

# 飼古屋岩陰遺跡調査報告書

—四国横断自動車道開設に伴う発掘調査報告—

1983.3

日本道路公団  
高知県教育委員会

# 飼古屋岩陰遺跡調査報告書

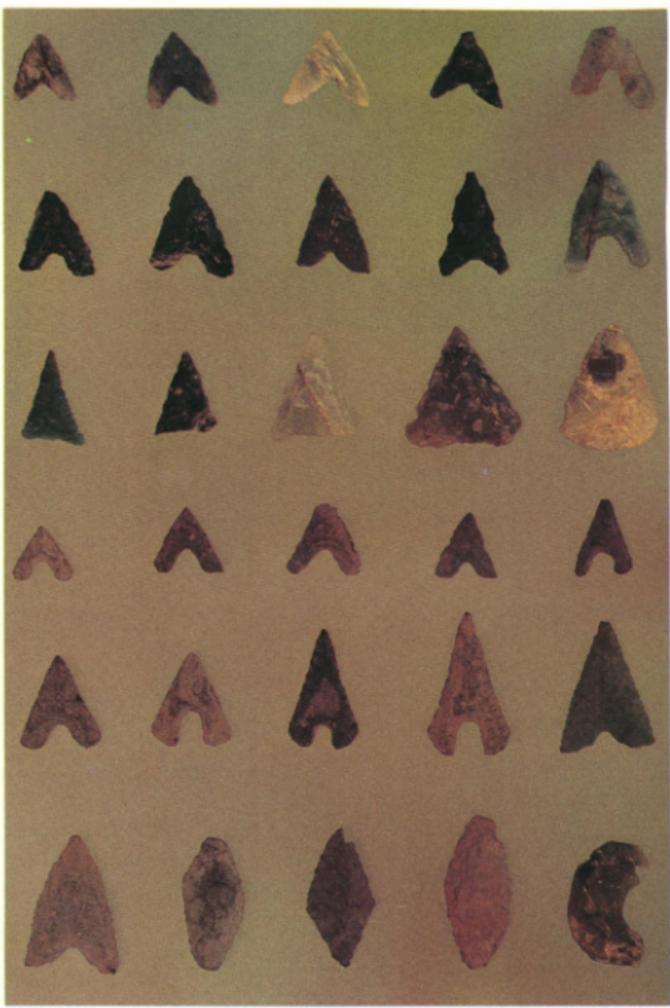
—四国横断自動車道開設に伴う発掘調査報告—

1983.3

日本道路公団  
高知県教育委員会







## 序

飼古屋遺跡は、香美郡土佐山田町繁藤にある縄文から弥生時代の複合した岩陰遺跡です。

昭和51年度に、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財分布調査として実施した事前調査により、本遺跡の発見となりました。その後、日本道路公団大阪建設局高知工事事務所や地元土佐山田町と協議を重ねた結果、昭和57年度に発掘調査を実施することとなり、今回の調査の運びとなりました。

調査においては、縄文時代早期、後期の遺物の出土をはじめ、弥生時代、古墳時代の遺物も発見され、吉野川にそそぐ穴内川の上流、標高350m前後の山間部に位置する遺跡について、貴重な資料を得ることができました。

出土した縄文時代の遺物のなかには、西は大分県国東郡姫島で、東は香川県坂出市を原産地とする石材によって製作された石鏃も含まれており、交通の便の発達していなかった当時の交流の広範さに驚かされます。

いわば「カモシカ道」が主な交通路だった縄文時代。四国横断自動車道といった高速道路の開通によって整備された交通体系をもつ現代社会。遺跡の発掘によって対比されるこの取り合せのなかに、大きな歴史の流れを感じられます。

本報告書が、学術研究の資料として広く活用され、文化財保護に役立てることができすれば幸甚に存じます。

最後に、調査にあたって種々御配慮いただいた日本道路公団大阪建設局高知工事事務所、高知県土木部高速道対策室、並びに土佐山田町、土佐山田町教育委員会に厚くお礼申しあげるとともに、調査指導をいただいた先生方、発掘調査に御協力いただいた地権者の方々そして寒き厳しい時節に作業に従事していただいた繁藤地区の皆様方に心からお礼申しあげます。

昭和58年3月31日

高知県教育委員会

教育長 中 村 哲 男

## 例　　言

- 1 本書は四国横断自動車道建設工事に伴い、昭和57年11月25日から昭和58年1月28日に行われた飼古崖岩陰遺跡の発掘調査報告である。
- 2 調査は日本道路公団大阪建設局の要請を受け、高知県教育委員会文化振興課が実施、顧問岡本建児（高知女子大学教授）の指導のもとに森田尚宏（主事）が担当した。事務、総括は横田勇（文化財班長）宅間一之（社会教育主事）があつた。
- 3 本報告の執筆はⅠを宅間一之が、Ⅱ以下を森田尚宏が行い、編集は高知県教育委員会が行った。
- 4 本報告記載の図面作成にあたっては、畠中史子、中城富規、福井郁美の全面的協力を受けた。記して感謝する。なお写真撮影は森田による。
- 5 写真図版の配列は一部変更しているが、実測図に準ずるものである。
- 6 石材鑑定には川添晃氏（教育センター）の協力を得た。記して感謝するものである。
- 7 作業員の確保については、土佐山田町教育委員会の協力を受け、また調査にあたっては地元、繁藤地区の御援助をいただいた。
- 8 出土遺物は高知県教育委員会文化振興課が保管の任にあたっている。

# 本文目次

I 調査に至る経過	1
II 地理的・歴史的環境	10
1 位置、地理的環境	10
2 歴史的環境	10
III 調査方法・経緯	13
1 調査方法	13
2 調査の経緯	13
○ A 区	13
○ B 区	16
○ C 区	17
IV 出土遺物	19
1 B 区	19
2 C 区	20
○ 陶器	20
○ 石器	24
V 総 括	42

## 挿 図 目 次

- Fig 1 遺跡周辺地図 (1/50000)  
Fig 2 四国横断自動車道路線内遺跡分布図 1  
Fig 3 四国横断自動車道路線内遺物分布図 2  
Fig 4 四国横断自動車道路線内遺物分布図 3  
Fig 5 土佐山田町地質図 (土佐山田町史より転載)  
Fig 6 遺跡地形測量図 (1/400)  
Fig 7 発掘区設定図 (1/200)  
Fig 8 岩陰断面図 (1/80)  
Fig 9 A・B区土層図 (1/40)  
Fig 10 C区土層図 (1/40)  
Fig 11 B区出土遺物 (1/1・1/2)  
Fig 12 C区出土遺物 繩文土器 (3/5)  
Fig 13 C区出土遺物 繩文土器 (3/5)  
Fig 14 C区出土遺物 繩文土器 (3/5)  
Fig 15 C区出土遺物 繩文土器 (3/5)  
Fig 16 C区出土遺物 繩文土器 (3/5)  
Fig 17 C区出土遺物 繩文土器 (3/5)  
Fig 18 C区出土遺物 繩文土器 (3/5)  
Fig 19 C区出土遺物 弥生土器 (1/2)  
Fig 20 C区出土遺物 弥生土器 (1/2)  
Fig 21 C区出土遺物 弥生土器 (1/2)  
Fig 22 C区出土遺物 石鏃 (1/1)  
Fig 23 C区出土遺物 石鏃 (1/1)  
Fig 24 C区出土遺物 石鏃 (1/1)  
Fig 25 C区出土遺物 石鏃 (1/1)  
Fig 26 C区出土遺物 石鏃 (1/1)  
Fig 27 C区出土遺物 石鏃 (1/1)  
Fig 28 C区出土遺物 石鏃 (1/1)  
Fig 29 C区出土遺物 石鏃 (1/1)  
Fig 30 C区出土遺物 石鏃 (1/1)  
Fig 31 C区出土遺物 石鏃 (1/1)  
Fig 32 C区出土遺物 石鏃 (1/1)  
Fig 33 C区出土遺物 石鏃 (1/1)

- Fig 34 C区出土遺物 石鏃 (1/1)  
 Fig 35 C区出土遺物 石器 (3/5)  
 Fig 36 C区出土遺物 石器 (3/5)  
 Fig 37 C区出土遺物 石器 (3/5)  
 Fig 38 C区出土遺物 石器 (1/2)  
 Fig 39 C区出土遺物 石器 (1/2)  
 Fig 40 C区出土遺物 石器 (1/2)

## 表 目 次

- Tab 1 土佐山田町地層分布表（土佐山田町史より転載）  
 Tab 2 石鏃破損部位別一覧表  
 Tab 3 石鏃全長表  
 Tab 4 石鏃全幅表  
 Tab 5 石鏃重量表  
 Tab 6 石鏃長幅比表  
 Tab 7 石鏃抉り深幅比表  
 Tab 8 石鏃計測表

## 写 真 図 版 目 次

- PL 1 岩陰全景  
 PL 2 遺跡遠景（南より）  
     遺跡遠景（南より）  
 PL 3 遺跡近景（南より）  
     遺跡近景（東より）  
 PL 4 A区トレンチ調査風景  
     A区トレンチ完掘状態  
 PL 5 B区 a トレンチ調査風景  
     B区 a トレンチ完掘状態  
 PL 6 B区 c トレンチ完掘状態  
     B区 c トレンチ北壁セクション

- PL 7 B区 d トレンチ完掘状態  
B区 d トレンチ西壁セクション
- PL 8 B区 b トレンチ完掘状態  
B区 b トレンチ東壁セクション
- PL 9 B区 a トレンチ遺物出土状態  
B区 e トレンチ遺物出土状態
- PL 10 C区岩陰・前庭部  
C区調査風景
- PL 11 C区調査風景  
C区 D-4 遺物出土状態
- PL 12 C区 H-3 遺物出土状態  
C区 H-4 遺物出土状態
- PL 13 C区岩陰部調査状況  
C区岩陰部調査状況
- PL 14 C区調査状況  
C区調査状況
- PL 15 C区調査状況  
C区調査状況
- PL 16 C区岩陰部完掘状態  
C区岩陰部セクション
- PL 17 C区 F-2・3 セクション  
C区 F-4・5 セクション
- PL 18 C区 E・F-4 セクション  
C区 G・H-4 セクション
- PL 19 完掘状態  
完掘状態
- PL 20 B区出土遺物 表面（1／1）
- PL 21 B区出土遺物 裏面（1／1）
- PL 22 C区出土遺物 繩文土器 表面（3／5）
- PL 23 C区出土遺物 繩文土器 裏面（3／5）
- PL 24 C区出土遺物 繩文土器 表面（3／5）
- PL 25 C区出土遺物 繩文土器 裏面（3／5）
- PL 26 C区出土遺物 繩文土器 表面（3／5）
- PL 27 C区出土遺物 繩文土器 裏面（3／5）
- PL 28 C区出土遺物 繩文土器 表面（3／5）

- PL 29 C区出土遺物 繩文土器 裏面 (3/5)  
PL 30 C区出土遺物 繩文土器 表面 (3/5)  
PL 31 C区出土遺物 繩文土器 裏面 (3/5)  
PL 32 C区出土遺物 繩文土器 表面 (3/5)  
PL 33 C区出土遺物 繩文土器 裏面 (3/5)  
PL 34 C区出土遺物 繩文土器 表面 (3/5)  
PL 35 C区出土遺物 繩文土器 裏面 (3/5)  
PL 36 C区出土遺物 繩文土器 押型文 拡大 (2.5倍)  
PL 37 C区出土遺物 繩文土器 押型文 拡大 (2.5倍)  
PL 38 C区出土遺物 弥生土器 表面 (1/2)  
PL 39 C区出土遺物 弥生土器 裏面 (1/2)  
PL 40 C区出土遺物 弥生土器 表面 (1/2)  
PL 41 C区出土遺物 弥生土器 裏面 (1/2)  
PL 42 C区出土遺物 石鐵 表面 (1/1)  
PL 43 C区出土遺物 石鐵 裏面 (1/1)  
PL 44 C区出土遺物 石鐵 表面 (1/1)  
PL 45 C区出土遺物 石鐵 裏面 (1/1)  
PL 46 C区出土遺物 石鐵 表面 (1/1)  
PL 47 C区出土遺物 石鐵 裏面 (1/1)  
PL 48 C区出土遺物 石鐵 表面 (1/1)  
PL 49 C区出土遺物 石鐵 裏面 (1/1)  
PL 50 C区出土遺物 石鐵 表面 (1/1)  
PL 51 C区出土遺物 石鐵 裏面 (1/1)  
PL 52 C区出土遺物 石鐵 表面 (1/1)  
PL 53 C区出土遺物 石鐵 裏面 (1/1)  
PL 54 C区出土遺物 石鐵 表面 (1/1)  
C区出土遺物 石鐵 裏面 (1/1)  
PL 55 C区出土遺物 石器 表面 (1/1)  
C区出土遺物 石器 裏面 (1/1)  
PL 56 C区出土遺物 石器 表面 (1/1)  
PL 57 C区出土遺物 石器 裏面 (1/1)  
PL 58 C区出土遺物 石器 表面 (1/1)  
PL 59 C区出土遺物 石器 裏面 (1/1)  
PL 60 C区出土遺物 石器 表面 (3/5)  
C区出土遺物 石器 裏面 (3/5)

PL 61 C区出土遺物 石器 表面（3／5）

C区出土遺物 石器 裏面（3／5）

PL 62 C区出土遺物 石器 表面（3／5）

C区出土遺物 石器 裏面（3／5）



Fig 1 遺跡周辺地図

## I 調査にいたる経過

四国縦貫・横断自動車道は、「国土開発幹線自動車道建設法」並びに「高速自動車国道法」に基づいて、四国山脈によって分断されている四県の結びつきを強める幹線道路として計画されたもので、本州四国連絡橋と一体となって四国地方を開拓する原動力となる高速道路である。この建設計画は、徳島市から大洲市までの縦貫自動車道と、高松から須崎市までの横断自動車道からなり、その延長はおよそ 370km となっている。

この道路の基本計画は、昭和48年にまとまり、高知県教育委員会は、昭和48年に須崎市多の郷～南国市領石間の42km、約84kmにわたって分布調査を実施した。その結果、124個所の遺跡や包蔵地を確認することができた。

また昭和51年8月から昭和52年1月にかけて、南国市笠ノ川～長岡郡大豊町間13.8km、およそ 6.8km<sup>2</sup>にわたっての分布調査が実施された。これによって、25個所の遺跡や包蔵地が確認された。

- 1 篠原遺跡 長岡郡大豊町篠原本村 (C)

河岸段丘上に立地した遺跡で室町時代の土師質土器が散布している。現状は畑及び水田で、かなり広範囲にわたる遺跡である。

- 2 飼古屋岩陰遺跡 香美郡土佐山田町飼藤飼古屋 (A)

丘陵端部の台地上に立地した岩陰遺跡で縄文時代のポイント状石器、剝片が散布している。上述の遺跡の石質はチャートである。また、土師器、須恵器等の遺物も散布していることから、かなり長期間にわたる複合遺跡である。現状は、畑・山林である。

- 3 カタナギリ遺跡 香美郡土佐山田町曾我部川カタナギリ83 (C)

丘陵端部斜面の水田に平安時代末期の須恵器が一片散布していたのみであるが、立地条件を考えると付近に窯跡の存在する可能性が大きい。恐らく須恵器は窯跡から散逸したもので、当散布地は二次堆積の可能性が大きい。

- 4 下オモダ窯跡 香美郡土佐山田町入野下オモダ (C)

山腹に立地した平安時代の窯跡で、遺構は道路下に埋没している。現状は道路敷で須恵器・土師質土器等の遺物が散布している。

- 5 才谷寺跡 南国市才谷 (C)

低丘陵上に立地した江戸時代の寺院跡であり、基壇・石仏・五輪塔等の遺構及び遺物が、残存する。また坂本龍馬の祖先である坂本太郎、五郎の墓も残っている。現状は宅地・山林・畑であるが、寺院跡周辺のかなり広範囲にわたって土師質土器が散布している。

- 6 才谷遺跡 南国市才谷 (C)

丘陵端部斜面の畑に安土桃山時代の古備前焼が散布している。

- 7 幸野遺跡 南国市才谷幸野 (C)

- 丘陵端部の舌状台地上の畠に江戸時代の土師質土器が散布する。この付近は藩政期に才谷寺の守領であったらしい。現状は宅地と畠である。
- 8 久礼田城跡 (C)  
標高 168m の丘陵上に立地した室町時代の城跡で、本丸、二の丸には土塁が残存する。また郭や掘り切り・井戸等の遺構も残るがゴルフ場の建設により城跡の大半は破壊されてしまっている。現状はゴルフ場・山林である。
- 9 堂ヤシキ遺跡B地点 南国市植野岸上堂ヤシキ (C)  
沖積地に立地した平安時代の遺跡で、畠に須恵器が散布する。
- 10 堂ヤシキ遺跡A地点 南国市植野岸上堂ヤシキ (B)  
沖積地に立地した遺跡で古墳時代の土師器・平安時代の須恵器・室町時代の天日茶碗等の遺物が散布する複合遺跡である。長曾我部地検帳にもドウヤシキの地名が見られる。
- 11 岸上遺跡 南国市植野岸上 (C)  
沖積地に立地した遺跡で室町時代の土師質土器及び古偏前焼等の遺物が散布する。現状はビニールハウスと畠である。
- 12 尾谷遺跡 南国市領石口ノ尾谷 (C)  
丘陵端部の台地上に立地した遺跡で室町時代の土師質土器が散布する。現状は畠である。
- 13 八反田遺跡 南国市領石八反田 (C)  
沖積地に立地した遺跡で、鎌倉時代の瓦器及び土師質土器等の遺物が散布する。現状は畠である。
- 14 牛月古墳 南国市領石牛月 (C)  
丘陵端部の舌状台地先端付近に立地した後期古墳で玄室の側壁4枚が残存する。地形に制約を受けたためであろうが、当古墳は北方向に開口しているところに特色がある。
- 15 新城城跡 南国市笠の川新城山 (C)  
標高 196m の丘陵上に立地した室町時代の城跡で、本丸・二の丸の周囲には土塁及び石垣等の遺構が残存する。また本丸と二の丸との間には堀り切りが残っている。現状は山林と畠である。
- 16 笠の川塹跡 南国市笠の川東村楓谷 (B)  
古墳時代後期の窓跡で工事中に多数の須恵器が出土したが、遺構の大半は破壊されている。なお、灰原は池の中に埋没している。現状は山林・荒地・畠である。
- 17 長源古墳 南国市笠の川東村長源 (B)  
丘陵端部斜面に立地した後期古墳で封土・横穴式石室の残存状態は良好である。現状は山林である。
- 18 長源遺跡 南国市笠の川東村長源 (C)  
丘陵端部の舌状台地に須恵器一片のみが散布するが、二次堆積の可能性が強い。当散

布地の北方7～8mの所に長源古墳が存在することから、長源古墳から遺物が当地に散乱したものと思われる。

- 19 左右山古墳 南国市左右山ハザマ谷670 (C)

低丘陵鞍部に立地した後期古墳で、須恵器・銀環等の遺物が出土したが現在では、完全に消滅している。現状は畑である。

- 20 左右山遺跡 南国市左右山ハザマ谷670 (C)

低丘陵端部の舌状台地に立地した複合遺跡で弥生土器・須恵器・土師質土器等の遺物が散布する。現状はみかん畠である。

- 21 両城館跡 南国市笠の川東村両城土居 (B)

低丘陵上に立地した館跡で室町時代～安土桃山時代の古備前焼や青磁が散布する。また、土塁や郭等の遺構も残存している。現状は山林と畑である。

- 22 土居遺跡 南国市笠の川東村両城土居 (C)

丘陵裾部に立地した遺跡で室町時代の土師質土器や古備前焼等の遺物が散布する。現状は畑であり、立地条件等を考えると付近一帯が散布地である可能性が強い。

- 23 横口遺跡 南国市笠の川東村横口 (C)

丘陵裾部に立地した遺跡で、室町時代の土師質土器・古備前焼等の遺物が散布する。現状は畑である。

- 24 池尻遺跡 南国市笠の川東村池尻 (C)

丘陵端部の舌状台地の先端に立地した遺跡で室町時代の古備前焼・土師質土器が散布する。現状は畑である。

- 25 寺家遺跡 南国市笠の川寺家 (C)

丘陵裾部の道路上で布目瓦一片が確認された。当散布地の近辺に平安時代の窯跡が存在する可能性が強い。現状は道路敷である。

特に本調査においては、確認された遺跡や包蔵地について、A（非常に重要な遺跡）、B（かなり重要な遺跡）、C（普通の遺跡）の3ランクに分けて位置づけがなされている。

昭和52年5月23日、高知県教育委員会は、日本道路公団大阪建設局長から、四国横断自動車道の建設予定地内にかかる飼古屋岩陰遺跡・カタナギリ遺跡・才谷遺跡・才谷寺跡・幸野遺跡・尾谷遺跡・八反田遺跡・牛月古墳・新城城跡・等の川窯跡について、遺跡の状況、遺跡の取扱区分（(1)事業地区に含めないもの、(2)事業地区に含めるが保存をはかるもの、(3)発掘調査を行って記録を残すもの）及び発掘方法等についての意見を求められ、さらに、上記以外に当該道路の予定地内にかかる埋蔵文化財が包蔵されていれば、遺跡名・所在地もあわせて貴意を得たい旨の通知があった。

これに対し高知県教育委員会は、昭和52年6月9日、意見を求められた遺跡について遺跡の所在地や状況・面積等について回答し、特に飼古屋岩陰遺跡・八反田遺跡・牛月古墳については、発掘調査を実施して記録を残すものとして、遺跡の重要性・遺跡の状況・発掘方法・発掘

面積・発掘調査費概算その他の意見を添えた。

昭和52年9月30日、日本道路公団大阪建設局高知工事事務所は、長岡郡大豊町川口から南国市等の川までの22kmについての事業計画概要と路線発表を行った。

高知県教育委員会も、この路線発表に基づき、先に示した遺跡についての発掘調査計画に着手した。本県にとってはいわば最初の大規模な行政発掘であり、その対応については文化庁や先進県の指導と資料収集から開始しなければならなかった。

昭和52年10月27日、日本道路公団大阪建設局長から文化庁長官へ協議文書が提出された。これに基づき文化庁は昭和53年8月24日局長宛に、文化財保護法（昭和25年法律第214号）の趣旨を尊重し、高知県教育委員会と協議の上発掘調査を実施すること、そして調査の結果重要な遺構などの検出に際しては、保存に十分配慮するよう回答し、高知県教育委員会へも、遺漏のないように取り計らうよう通知があった。

一方高知工事事務所は、昭和54年1月、銅古屋岩陰遺跡については昭和56年3月、八反田、牛月周辺については昭和56年10月工事着手の計画を提示した。したがって銅古屋については、用地買収完了予定の昭和55年7月より昭和56年3月にかけての間に、また牛月・八反田については昭和55年10月末より昭和56年7月末までに調査を完了するよう要請してきた。この要請に基づき、高知県教育委員会でも調査計画書を作成し公団に提示するとともに、昭和54年5月15日、工事事務所において、「埋蔵文化財発掘調査委託契約にかかる処理方針」について協議し、以後この方針に従って個別的に対応していくことにした。

昭和54年6月5日、高知県教育委員会は埋蔵文化財調査計画書と、経費積算書を道路公団に示し、高知工事事務所庶務課長武田恵之氏を中心に具体的な折衝を開始した。

しかし、当初計画した用地買収交渉は予想外に期日を要し、調査の具体的期日決定までは長期間の日時を要した。

高知県教育委員会では、年を追って増加する行政発掘に対応するためにも、四国横断道関連の調査は早期実施が必要であった。高知県土木部高速道対策室、および高知県土地開発公社と連絡を密にしつつ調査経費を昭和57年度当初予算に計上することとした。そして工事工程の詰めと、調査期日や方法等について交渉を開始した。この結果、南国インターチェンジにかかる牛月・八反田については、用地買収は完了しているが、工事期日が遅くなる見通しのため、調査後の水田等の管理上問題もあり、工事直前の調査とした。一方銅古屋岩陰遺跡については、用地買収は完了していないが、工事工程上昭和58年2月に終了する必要があり、地権者との調整をはかりつつ2月完了の方針で作業をすめることとした。昭和57年6月以降、数回にわたる遺跡の踏査やボーリング調査によって、従来の調査計画に若干の修正を加え、新たな調査計画書を立案し公団に提示、具体的な交渉に入った。

## 1 発掘調査場所

高知県香美郡上佐山田町繁藤西谷11

## 2 遺跡名及び面積

飼古屋岩陰遺跡 1,000m<sup>2</sup>

### 3 遺跡の概要

丘陵端部の台地上に立地した岩陰遺跡で縄文時代のポイント状石器、剥片が散布している。

また、土師器、須恵器等の遺物も散布しているところから、かなり長期間にわたる複合遺跡であるとされている。

### 4 土地所有者

日本道路公団

### 5 調査方法及び内容

北面の岩陰をA地区（岩陰）、B地区（前庭部）の2地区に分割し、入力によりA地区は全面発掘、B地区は部分発掘とする。なお必要に応じトレンチ法を併用する。

A地区 2mグリットによる全面発掘 約 234.5m<sup>2</sup>

B地区 2mグリットによる部分発掘 約 136.0m<sup>2</sup>

### 6 調査主体者

高知県教育委員会

### 7 発掘調査工程表

昭和57年11月5日～昭和57年11月19日 溝査準備

昭和57年11月25日～昭和58年1月28日 発掘調査

昭和58年1月29日～昭和58年3月31日 遺物整理

報告書作成

### 8 発掘調査費

7,000,000円

この計画書に基づき、昭和57年11月1日、日本道路公団大阪建設局と、高知県教育委員会は委託契約を締結した。

四国山地の山あいの風がつめたく感じる昭和57年11月25日調査は開始された。思えば分布調査が開始されて7年の歳月が流れている。調査は谷間を吹きおろす風に身をぢぢめ、ちらつく小雪に造構撮影が妨げられる悪条件のなかで進められた。しかし、日本道路公団大阪建設局高知工事事務所、高知県土地開発公社、高知県土木部高速道対策室、香美郡土佐山田町教育委員会、発掘調査作業員の方々の暖かい心づかいと御協力によって、予定した昭和58年1月28日には調査を完了することができた。あらためて御協力いただいた方々に深甚の意をあらわす次第である

註2 埋蔵文化財分布調査報告書 一四国横断自動車道建設に伴う一 高知県教育委員会  
昭和48年3月

註3 埋蔵文化財分布調査報告書 一四国横断自動車道建設に伴う一  
(高知県文化財調査報告書第21集) 高知県教育委員会  
昭和52年3月



Fig. 2 四国横断自動車道路線内遺跡分布図

集録

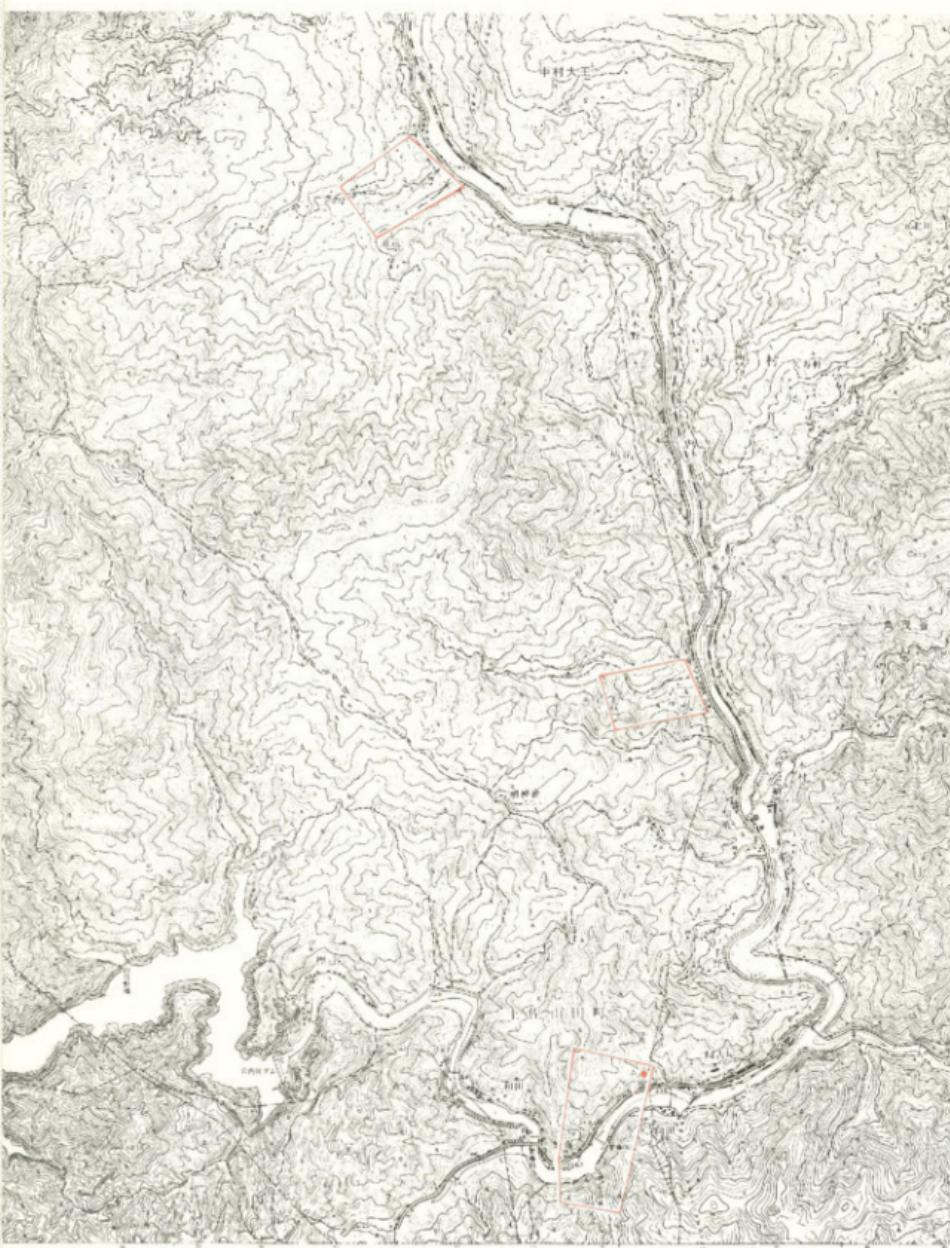


Fig. 3 四国横断自動車道路線内遺跡分布図 2

山田 茂之とやまだ

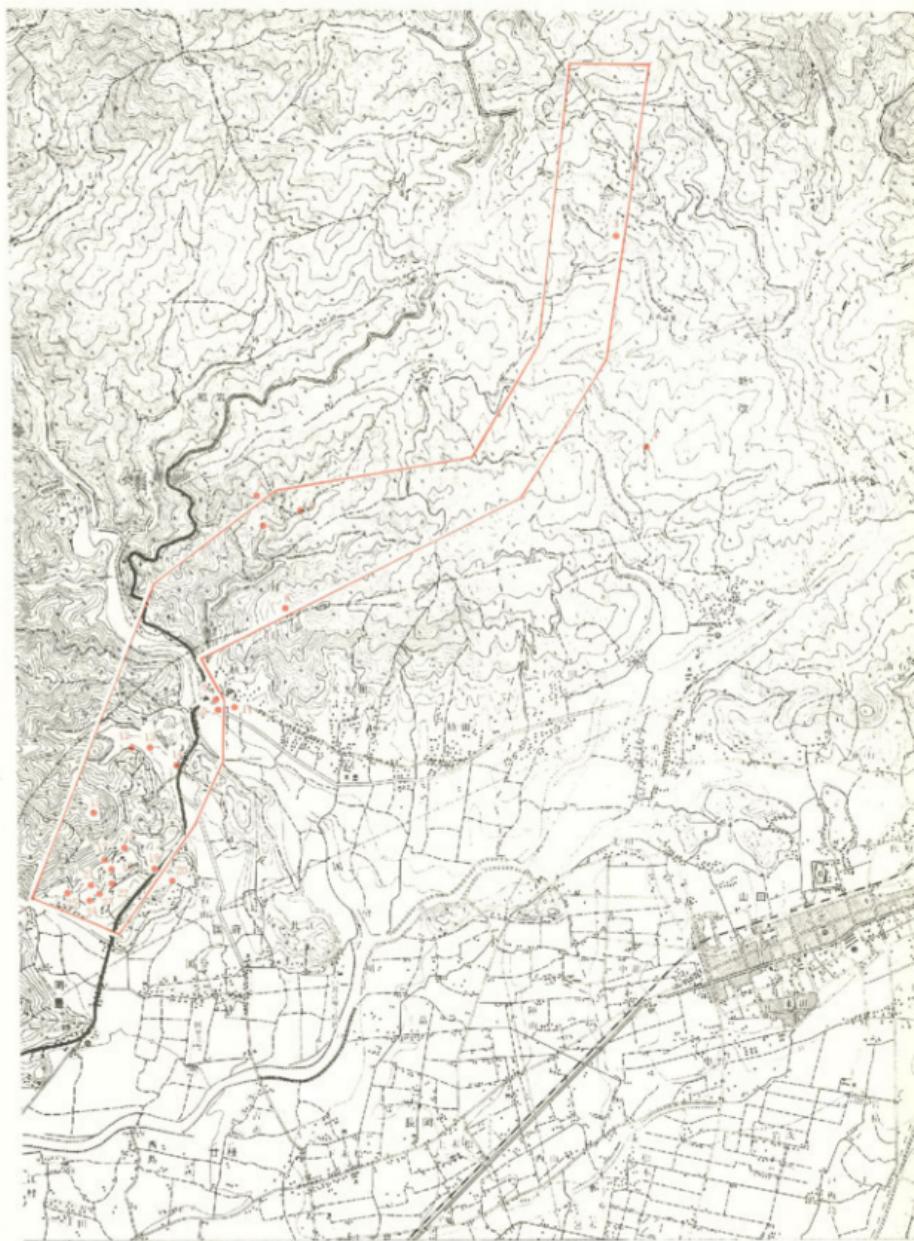


Fig. 4 四国横断自動車道路線内遺跡分布図 3

後免

## II 地理的・歴史的環境

### 1 位置・地理的環境

飼古屋岩陰遺跡は行政区画上、香美郡土佐山田町繁藤地区字飼古屋に位置している。土佐山田町は、高知県最大の平野である香長平野の北部、物部川の扇状地と長岡台地からなる平野部と四国山地の南端部にあたる根曳峰（383.9m）・甫喜ヶ峰（611m）・赤塚山（850m）さらに、北方の大豊町及び香北町の町界にそびえる国見山（1089.1m）・明神岳（743.1m）などの山嶺を中心とする急峻な山間部よりなっている。なかでも繁藤を中心とした地域は、昭和47年に発生した大崩壊にみるように軟弱な地盤と年間3000mmにも及ぶ降雨量のある縁深い山合いである。当町における水系は、国見山から甫喜ヶ峰・根曳峰につらなる陵線を分水嶺とし、太平洋へ流れれる距離の短い河川と、西日本の最高峰である石鎚山（1982m）の奥深い谷間を原流とする吉野川にそそぐ二つの水系に分かれている。遺跡の所在する繁藤地区は吉野川水系の一大支流である穴内川に沿って開かれた地であり、現在でも国鉄と国道32号線が並行してはしり、高知と瀬戸内側を結ぶ四国の大動脈の1本となっている。遺跡は穴内川流域でも分水嶺に近い上流部に位置し、南に面して開く秋ノ谷と呼ばれる小谷の出口部分にみられる大岩の岩陰部である。秋ノ谷もかなり急峻な谷であり、段丘のような平坦部は存在せず、すべて石垣を積み上げることにより傾斜面を水田として利用しているにすぎない。現地の標高は、海拔350～360mを測る。

地質的には、吉野川から四国山地北部を土佐岬へぬける中央構造線の南、外帯の秩父帯に属している。四国の秩父帯は、大樽一杉川構造線を神原谷一岩改梅構造線により北から秩父帯北帯・同中帯・同南帯に分けられ、当町の過半部は秩父帯北帯に属している。秩父帯北帯に見られる主な地層群は從来上八川層と白木谷層群であるが、最近の研究によりそのほとんどが三疊系の地層であることが判明し、上八川層を甫喜ヶ峰層と成合層の2つに分離するようである。秩父帯北帯の主要部分を占める甫喜ヶ峰層や白木谷層群には堅固なチャートや石灰岩が発達するので、峻険な山相を呈するところがみられる。一般的には標高500mから1000m前後の比較的起伏の少ない地域である。遺跡となる大岩自体はチャートの巨大な岩塊である。

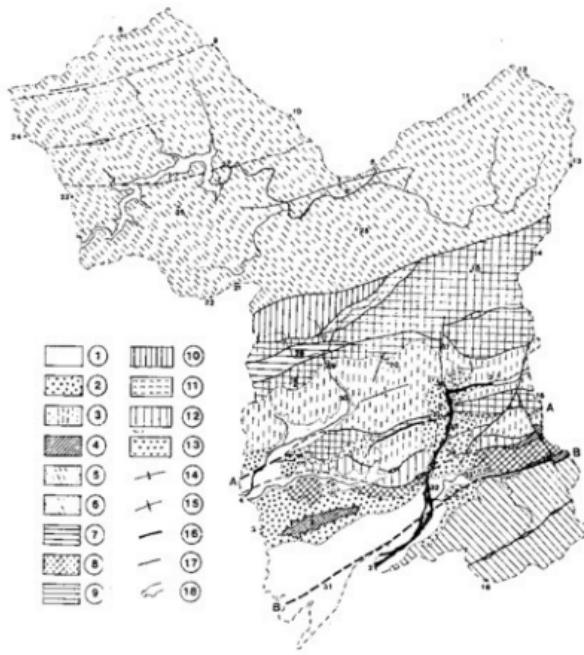
### 2 歴史的環境

Iで述べたように四国横断自動車道の計画路線内の山間部には、あまり遺跡は発見されていない。特に縄文時代に遡ると考えられる遺跡は当飼古屋岩陰遺跡だけである。やはり急峻な山間部では、当時の人々にとって生活の場としてはあまり良い条件ではなかったのであろう。しかしながら、穴内川流域を吉野川との合流点へ下がってゆけば、点在する河岸段丘上に縄文時代に遡る遺跡が発見されると思われる。吉野川の上流域、土佐町田井では、縄文時代前期と後期の遺物を出土している玉屋敷遺跡、同じく晩期の遺物を出土する八反坪遺跡などが知られ

ている。土佐山田町でも分水嶺をこえ、長岡台地香長平野へ出れば、数多くの遺跡が発見されている。しかし、縄文時代の遺跡は確認されておらず、弥生時代以降の遺跡が中心であり、特に古墳が多く分布している。また、著名な遺跡としては龍河洞穴遺跡がある。(Fig 1・1) 洞穴は金山、石灰岩よりなる標高 323m の三宝山の中腹に開口している。出土遺物は、弥生時代中期後半の龍河洞式を主体として後期の土器も含まれている。また、長岡台地上ではヒビノキ遺跡 (Fig 1・2) が調査されており、弥生時代後期終末から古墳時代にかけての住居址、貯蔵穴などの遺跡が検出されている。出土遺物は、ヒビノキ I・II・III式と 3 型式に編年されており、高知県における弥生時代終末から古墳時代の良好な資料である。他に弥生時代の遺跡としては、子岳・雪ヶ峰遺跡 (Fig 1・3)・楠目遺跡 (Fig 1・4) などが知られている。縄文時代の遺跡としては、物部川上流の香美郡香北町の中心部に美良布遺跡が存在している。同遺跡は河岸段丘上に位置しており、縄文時代晩期の遺物を出土している。

地 帯		秩 父 帯		
		北 帯	中 帯	南 带
新 生 代	第 四 紀	沖 積 世	沖 積 層	
		洪 積 世	段 丘 疣 層	
	第 三 紀		蛇 紋 岩	
中 生 代	白 堺 紀	宮古世 (上部物部川層群)	日比原層	荻野層
	白 堺 紀	有田世 (下部物部川層群)	袖ノ木層	船谷層
	頬石世 (頬石層群)	頬石層群	頬石層群	
	ジ ュ ラ 紀	新 世		鳥ノ巣層群
古 生 代	中 世			
	古 世			
	三 疊 紀	新 世	甫喜ヶ峰層	虚空藏山層群
古 生 代	中 世			
	古 世			
	ペ ル ム 紀	新 世	休場層群	
	中 世	成合層	F.↑ 白木谷 層群	高岡層
	古 世			宮ノ口層群
石 炭 紀				

Tab 1 土佐山田町地層分布表 (土佐山田町史より転載)



土佐山田町地質図(甲藤編)

(凡例) ①冲積層 ②洪積層 ③白亜系 ④鳥ノ巣層群(ジュラ系) ⑤甫喜ヶ峰層(三疊系) ⑥虚空巖山層群(三疊系) ⑦休場層群(二疊系) ⑧高岡層(二疊系) ⑨白木谷層群(二疊系) ⑩成合層(二疊系) ⑪上倉層(二疊系) ⑫宮ノ口層群(石炭系) ⑬蛇紋岩 ⑭背斜構造 ⑮向斜構造 ⑯A-A' : 杉田構造線、B-B' : 岩改構造線 ⑰断層 ⑱グム(地名など) 1: 土佐山田 2: 物部川 3: 杉田グム 4: 新改川 5: 穴内川 6: 離華崩壊跡 7: 六内川ダム 8: 国見山(1089.1m) 9: 標高951.8m 10: 明神岳 11: 標高992.2m 12: 茂ノ森 13: 標高1005.9m 14: 標高850m 15: 標高726.1m 16: 標高353.0m 17: 秋葉山(489.5m) 18: 開発山(368.3m) 19: 標高326m 20: 標高419.7m 21: 枝曳峠(383.9m) 22: 標高568.8m 23: 標高780.1m 24: 標高1048.4m 25: 標高636.8m 26: 甫喜ヶ峰(611m) 27: 標高谷 28: 休場疊岩 29: 天狗岳不整台 30: 新改 31: 戸板島 32: 神母の木 33: 佐古藪 34: 船谷 35: 宮ノ口 36: 仁井田 37: 中後入

Fig. 5 土佐山田町地質図(土佐山田町史より転載)

### III 調査方法・経緯

#### 1 調査方法

調査対象地としたのは、岩陰とその前庭部である畑、さらに比高1~2mを測る下面の2ヶ所の水田と畑である。当初の調査計画では、岩陰と前庭部については全面発掘、下面の水田・畑については試掘を行い、遺構、遺物の存在を確認した場合に全面発掘を行うこととした。調査手順としては、最も低い水田をA区、約1mの比高を測る上面の畑をB区、岩陰及び前庭部をC区と呼ぶこととし、耕土、作物等の関係によりA・B・C区の順で調査を進めた。また耕土はA・B区では埋めもどし、C区の遺物包含層については、フルイにかけ、水洗することにした。

調査にあたっては、自動車道のセンターラインを基準線とし、各区の現状に合わせ基本ラインを設置、2mグリッドを組んだ。A区では、2×16mのトレンチを設定、調査を進めたが、遺物、遺構ともに、検出されず終了した。B区では、2×14mに3mの張り出しをもつaトレンチ、2×12mのbトレンチを設定し調査を行った結果、遺構は検出されなかつたが、遺物の出土をみたので、さらにc・d・eの各トレンチを設定、調査を行い、結果的にはほぼ全面発掘となった。なおグリッドの名称は、南北ラインをA~H、東西ラインを1~5とした。C区は全面発掘を前提としていたので、当初より2mグリッドを全面に組み調査の進行に従い4mグリッドに変更した。グリッドラインは南北に準ずるラインをA~I、東西に準ずるラインを1~6とし、左上のポイントを各グリッドの名称とした。

#### 2 調査の経緯

##### ○ A区

A区は先に述べたように、前庭部との比高約2mを測る幅5~6mの水田であり、さらに下面の水田とは3mの比高差を測る。調査は当初、前庭部からの流れ込みの遺物等の存在が想定され、昭和57年11月25日より開始されたが、遺物、遺構ともに検出されず同年12月1日に終了した。当区の層序は次の通りである。

I層 耕作土 厚さ約20cmを測る。

II層 床土 赤褐色土であり、非常に多くチャートの岩盤細片を含み、最も厚いところで20cmを測る。

III層 黒褐色土 炭化物を含み、楕円形のレンズ状堆積を示す。

IV層 暗褐色土 チャートの岩盤細片を非常に多く含み固くしまっており、30~40cmを測る。



Fig. 6 遺跡地形測量図 (1/400)

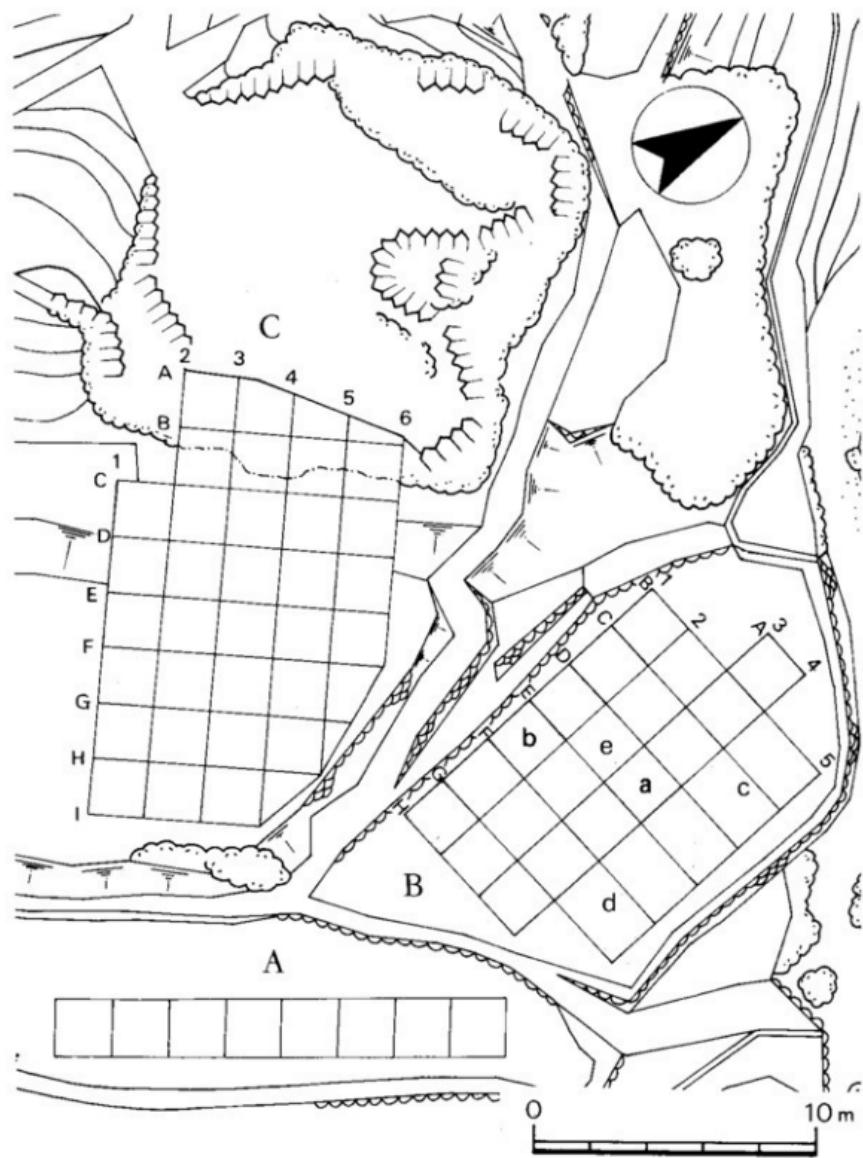


Fig. 7 発掘区設定図 (1/200)

V層 黄褐色土 いわゆる地山の山土であり粘土に近い。

V層の地山検出面においても、谷に面した石垣の付近では部分的に深く落ち込んでおり、水田化する以前は急な斜面であったことが判明した。

#### ○B区

B区は岩陰、前庭部に対し、やや北面に張り出した畑であり、比高差約1mを測る。畑の北は石垣により谷川に直接面し落ち込んでいる。このような地形から、畑とされる以前の原地形は前庭部から続く斜面と考えられ、遺物、遺構の存在が期待された。調査は昭和57年12月2日より開始され、排土置場と埋めもどしの都合により、a・bトレンチから着手した。aトレンチを開いた段階で石鏃、弥生土器片などの出土を見たので、3×4mのc・dトレンチを、さらにa・bトレンチの間にeトレンチを設定した。しかしながら遺構は検出されず、遺物はc・dトレンチ、特に谷側の石垣付近に流れ込んだ形で出土しており、b・eトレンチではほとんど出土しなかった。当区の層序は次の通りである。

I層	耕作土	厚さ10cmと薄い。
II層	床土	明茶褐色であり4ライン以東にみられる。厚さ約5cmを測る。
III層	床土	暗褐色土であり調査区全面にみられ、厚さ10~15cmを測る。
IV層	灰褐色土	旧耕作土と思われ、Fライン以北、2ライン以東に堆積しており、約5cm前後の厚さを測る。
V層	明褐色土	旧床土と思われ、部分的に赤褐色を呈し、非常に多くのチャートの岩盤細片を含む。堆積範囲はGライン以北、2ライン以東であり、IV層とは同様である。厚さは15~20cmを測る。
VI層	暗茶褐色土	4ライン以西の傾斜部にレンズ状の間層としてみられる。厚さ10cm前後を測る。
VII層	暗茶褐色土	石垣沿いに一部みられ、厚さ約20cmを測る。
VIII層	黄褐色土	4ライン以東の傾斜部の大半を占める層序であり、土質は地山に近く非常に粘性が強い。厚さは80cmを測る。
IX層	明茶褐色土	VII層をベースとする間層であり、厚さは20cmを測る。
X層	暗灰褐色土	旧地形における耕作土ではないかと思われる層であり、Eライン以北、2ライン以東に堆積している。厚さは40cmを測る。
XI層	茶褐色土	基盤となる地山である。

遺物は、VI・VII・VIII・IX層より出土しており、特にVIII層中より弥生土器片がまとまって出土

している。しかし、下部層のⅩ層より近代の陶磁片なども出土しており、すべて二次堆積であることが認められた。当区の調査はeトレンチの埋めもどしをもって12月14日終了した。

#### ○C区

C区は岩陰と前庭部であり、12月15日より調査を開始した。岩陰をなす岩塊は、高さ約7m、幅約15mであり、岩陰部の幅は9m、奥行き3m、底となる部分の高さは4mである。岩陰には平坦部がみられ、前庭部にかけ約1mの急な段をなし、前庭部自体も約1mの比高差をもつ傾斜面である。発掘は、基本土層を知るために、4ラインのグリッドを開けた。その結果を基とし、まず岩陰の平坦部を広げ、さらに前庭部へと調査を進めた。当区の層序は次の通りである。

I層	耕作土	褐色を呈し、チャートの岩盤細片を含み、厚さ約20cmを測る。
II層	暗褐色土	I層とほぼ同質の土層であり、やはりチャートの岩盤細片を多く含んでいる。厚さ約25cmを測る。
III層	茶褐色土	やや赤味を帯び、I、II層ほどではないがチャートの細片を含み、粘性は強い。厚さはE・Fラインで最も厚く40cmを測り、Iラインにかけて薄くなっている。
IV層	暗茶褐色土	III層と同類の土層であるが、チャートの岩盤細片は少なく、厚さ40cmを測る。
V層	黒褐色土	FからIラインにかけ堆積する腐蝕上であり、粘性は強く約80cmの厚さを測る。
VI層	黄褐色土	地山であり、岩陰平坦部においては多量のチャート岩片を含んでいる。

繩文及び弥生時代の遺物は主にIII・IV層を中心として出土しているが他層からも出土し、さらに下層（V層）より近代の陶磁器類が出土しており、当地区の層序はすべて二次堆積であることが確認された。平坦部においては、I層直下に無遺物層であるVI層が見られたが、さらに下層に遺物包含層の存在を考え岩塊に沿って約1mほど掘り下げた。しかしVI層に変化はなく、遺物包含層は確認できなかった。ゆえに、平坦部においては、繩文及び弥生時代の遺物は出土せず、すべて前庭部に流出したものと考えられる。繩文土器は、各グリッドより出土しており、特に集中している地点はないが、D-3・4及びE-3・4グリッドでやや多く出土する傾向にある。弥生土器については、G-2・3・4及びH-2・3・4において集中して出土している。石鐵については、非常に小型なものが多く、ほとんどがIII・IV層の堆土をフリイにかけることにより発見された。調査は、岩陰平坦部及び前庭部とともに地山まで掘り下げた結果、巨大なチャートの点在をみ、昭和58年1月28日に完了した。

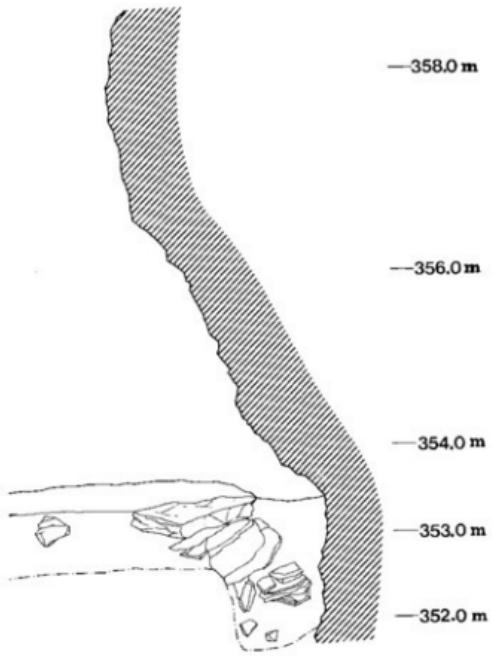


Fig 8 岩隙断面图

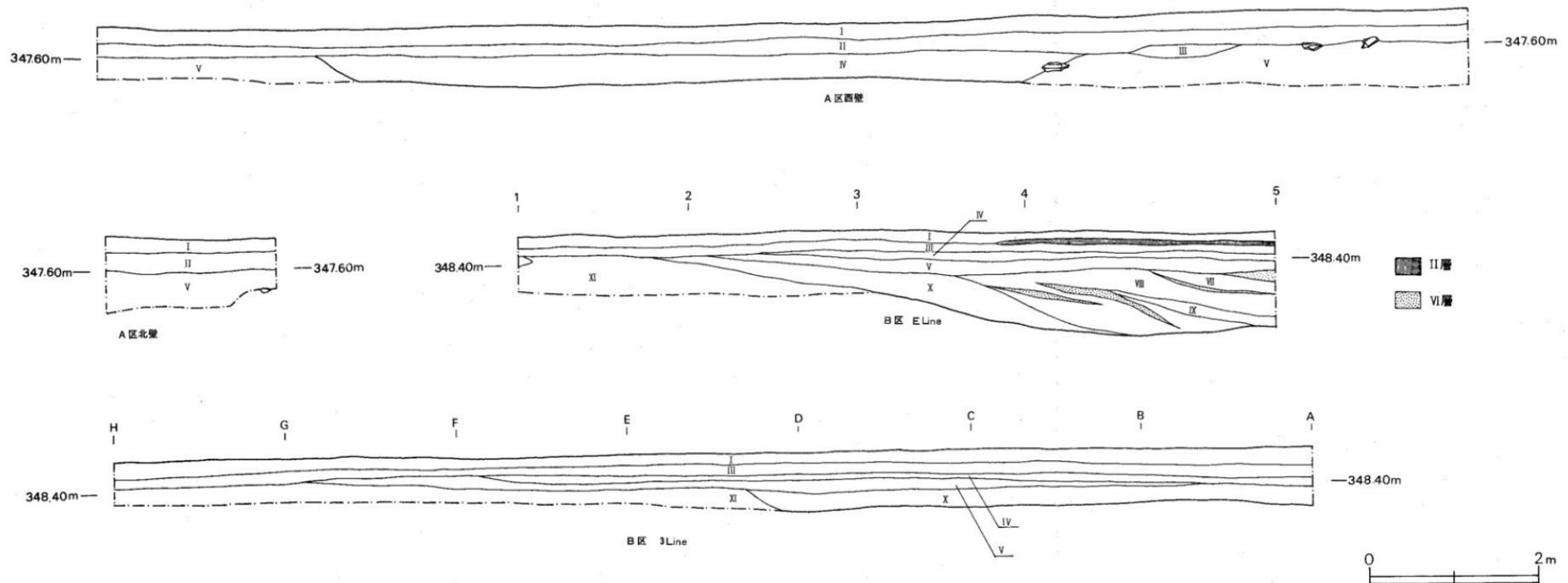


Fig. 9 A・B区土層図 (1/40)

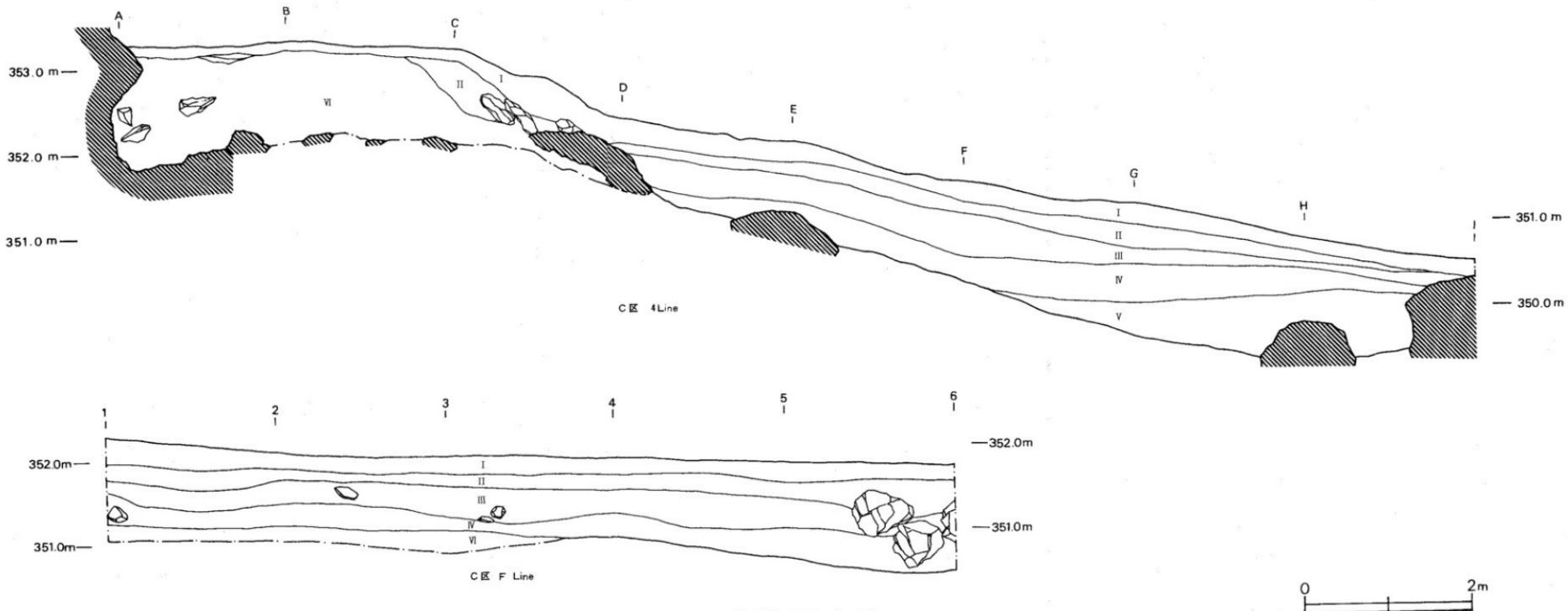


Fig 10 C区土層図 (1/40)

## IV 出 土 遺 物

### 1 B 区

B区よりは、石鐵、石核、スクレーパー、剝片などの石器と弥生土器、須恵器、土師質土器、近世・近代の陶磁器などが出土しているが、縄文土器は出土していない。これらの遺物は耕作土より地山上面にいたる各層より出土し、混在している。弥生土器及び土師質土器については、いずれも小片であり図示していないが、弥生土器片はすべて外面に叩き目が見られ、C区出土の弥生土器を考えれば、弥生時代終末から古墳時代に位置づけられる。土師質土器は底部の破片には糸切り痕が見られ、胎土などからも中世のものと考えられる。石器・須恵器については図示したものがあり以下に説明する。(Fig. 11)

- 1 振りの深くはいるいわゆる鍔形鐵であり、完形品である。全長2cm、全幅1.7cm、全厚0.4cm、振りは0.8cmを測り、当遺跡出土の石鐵の中では大型である。石材はチャートを使用している。
- 2 振りは浅く正三角形に近い形をしており、脚部の一端を若干欠損している。全長1.3cm、全幅1.3cm、全厚0.3cmを測り、1に比べると半分以下である。石材はやはりチャートを使用している。
- 3 振りのない平基式の石鐵であり、上半部が大きく破損している。全長1.7cm、全幅2.0cm、全厚0.5cmを測り、やや青味を帯びた黒色のチャートを使用している。
- 4 質の悪いチャートを素材とした石核であり、剥離面は一面だけである。打面は筋理による面を使用しており、打面調整などはみられない。剥離面からみれば、不定形なフレークが剥離されている。
- 5 赤色チャートの剝片を使用したスクレーパーであり、一側辺に2回の大きな剝離の後、小さな剝離の調整により、刃部を形づくっている。刃部の角度はほぼ30°であり、かなり薄い。
- 6 須恵器の杯蓋であり、口径18.5cmを測る。胎土は緻密であり、焼成も良く、青灰色を呈している。
- 7 須恵器の壺口縁と考えられる。頸部はやや開きながら直立し、3本の沈線がみられる。口縁部は外反し開く。口縁部を若干欠くが、口径は9.8cmを測る。胎土は明灰色を呈し、緻密である。
- 8 須恵器の脚であり、盤ではないかと思われる。器壁は0.8cmと厚く、下半部に1本の沈線がみられる。現存部の径は5cmを測る。胎土は7と同じく明灰色である。
- 9 須恵器の杯底部であり、断面台形のしっかりした貼付高台をもっている。底径9.5cmを測る。胎土は灰色を呈し、焼成は良好である。
- 10 近世の天目茶碗であり、内外面にやや黒味を帯びた茶褐色の釉が厚くかけられている。

口径は12.8cmを測り、外反して開く。器形は浅く、胎土は暗灰色を呈しており、緻密である。

1～3の石鏡のうち、1、2は縄文早期に伴うものと考えられるが、3の大型の平基式の石鏡はかららずしも早期に伴わず、同じ縄文時代であっても、やや新しい時期に属するものではないかと思われる。

また、6～9の須恵器はいずれもほぼ同時期であり、8世紀後半と考えられる。

## 2 C 区

C区では、縄文時代早期の押型文を中心とした縄文土器と弥生時代終末から古墳時代にかけての弥生土器がまとまって出土した。他に須恵器、土師質土器、近世・近代の陶磁器も出土しているが量的には少なく、細片がほとんどである。また石器としては、石鏡が大量に出土しており、他にスクレーパー、礫器、石核、砾石、叩石などがある。遺物の出土層は先に述べたようにⅢ、Ⅳ層が中心であるが、早期の押型文については、特にⅢ層より多く出土する傾向がみられた。以下、土器と石器に分け説明する。

### ○土 器

縄文土器は早期の押型文土器、無文厚手土器、条痕文土器のほか、中・後期の土器が数点ある。(Fig. 12～18)

押型文土器は、山形文、横円文、格子目文の3種類とも出土している。3種類のうち山形文が最も多く、全体の過半数以上を占め、横円・格子目文は少なく、特に格子目文は数点出土しているにすぎない。山形文は施文される山形の大きさにより2種類に大きく分類され、これをI・II類とした。

I類 山形の振幅が大きく、明確にみられるもので、施文原体の違い、胎土の違い等により5種類に分けられる。

#### I a類 (1～10, 12, 13)

胎土は黒褐色を呈し、金雲母がかなりみられる。山形の間隔はやや広く、振幅は5mm前後であり、単位は7条まで確認できた。施文は外面にかぎられている。口縁部は3点出土しているが、山形文は口縁直下にまでおよんでおり、口縁端部は丸くおさめられ、ほとんど外反しない。器厚は6～7mmである。

#### I b類 (11, 14～28)

胎土はI a類と同じく、金雲母を含んでいる。山形はやや太く、振幅は3～4mmであり、なだらかである。施文は約1.5cm幅に、4条の山形を1単位とし単位間に1.5cm幅の無文帶

がみられる(14、22、24)。また4条の山形文の間に5mm前後の大きさの格子目文がみられる(11)。山形文と同一原体による長さ1cmの傾斜するノ字形の押型文がみられる(12、15、17)。施文はいづれも外面にのみみられ、器厚は5~7mmである。

#### I c類 (29~33)

きわめて明瞭な山形文が見られ、振幅は1cm近く、大型なものと、やや振幅の小さなものがある。胎土はI a、b類に類似するが、金雲母は含まれていない。山形の単位は6~7条が確認でき、重複する部分がみられる。施文は外面にみられ、器厚は5~6mmである。

#### I d類 (34~60、69)

胎土がやや赤味をおびた褐色を呈す一群であり、かなり摩耗がはげしい。山形文は太目であり振幅約5mm前後で、間隔のつんだものである。施文は外面になされたものがほとんどであるが、同種の山形文が内面にみられる(40、45、48、50)。また、楕円文を伴う例もある(69)。口縁部はないが、底部または底部に近い部位が出土しており、尖底をなすことが確認された。器厚は8mmである(42、43、58、59)。

#### I e類 (61~65)

外面が、黒褐色を呈し、器厚3mm前後と非常にうすい一群である。山形文は約5mmの振幅をもつ細目のものであり、内面には施文されていない。

#### II類 (66~68)

山形の振幅が非常に狭く、ほとんど山形をなさない一群である。山形文自体も乱れ、重複する部分が多くみられ、場合によっては乱れた線のように見える部位もある。胎土は茶褐色を呈し、焼成も良好である。器厚は7mmである。

I・II類ともに山形文はすべて横位に施されており、縱位方向はみられない。次に楕円文であるが、山形文と同様に施文される楕円の大きさにより、III・IV類の2種類に分けられる。

#### III類 (70~74)

楕円の粒子が2mmの小型の楕円文であり、特に小さなものでは楕円が連続し線状となり、並行して続く。施文単位は9条まで確認されており、それ以上と考えられる。口縁部の破片では内面に長さ約1.5cmの縱位の平行短線がめぐっており、以下の部位に楕円文がみられる。しかし、外面に押型文はみられない(70)。同じく、口縁部に近いと考えられる破片の内面に長さ約1cmの縱位平行短線が2段にみられ、以下の部位及び外面に楕円文がみられる例がある(71)。胎土は暗褐色を呈し、焼成は良好であり、器厚8mmである。

#### IV類 (75~83)

III類に比べ大型の横円文であり、粒子は5mmである。横円がやや偏平となり、並行して連なるもの(75)と典型的な横円文がみられる。施文はいづれも外面だけであり、山形文同様に縦位に入るものはなくすべて横位に施文されている。胎土はほとんどのものが赤褐色を呈しており、器厚は6mmである。

#### V類 (84~89)

格子目文は1種類であり、V類とする。格子目は3~4mmと小さい。口縁部は3点出土しており、いずれもやや外反し、口縁端部は丸くおさめられている。施文部位は内面(84)、外面(85)、両面(86)の3種類に分けられ、内外面に施文されているものは斜向している。格子目文の単位は7条まで認められるので、それ以上であったと思われる。胎土は褐色で剛く焼きしまり、器厚は6mmである。

#### VI類 (90~95)

爪形にやや類似する押型文であり、施文単位は、10~15mmの長さをもつ大型のものと、5mm前後の小型のもの2種類がみられる。1点をのぞき、施文は平行して並ばず、相互に重ねている。胎土は赤褐色を呈し、焼成は良好である。器厚は6mmである。

厚手無文土器は胎土の違いにより2種類に分類される。

#### VII類 (96~104)

器厚12mmであり、茶褐色のかなりしまった胎土で、焼成も良好である。表裏両面の一部に指頭調整痕がみられる。破片は、いずれも約4cmの幅をもち、輪積成形痕と思われる。

#### VIII類 (105~115)

器厚は約15mmであり、断面に繊維痕がみられ、胎土中に繊維を含んでいたと思われる。胎土は荒く、1~3mmの小石を含み、表裏面ともに剥落している。図示した破片はいずれも同じ胎土なので同一個体と考えられる。また補修口のみられる破片も存在する。(109)

以上が縄文早期と考えられる押型文を中心とした土器群であるが、総数は、ごく細かい破片も含めれば約250点ほど出土している。次に早期以降の縄文土器についてであるが、量的には少なく、数十点出土している。時期的には中期から後期にかけてのものである。以下に図をとって述べる。(Fig. 18)

116、117はともに外面に縄文をもっている。縄文はかなり太く、原体の繊維の痕跡をみると

とができる。胎土は赤褐色を呈し、よく焼きしまっている。器厚は9mmを測り、かなり厚く、しっかりしている。

118は口縁部であり、表裏両面に条痕が見られる。条痕の幅は3mmほどで、外面はやや弧をえがき、内面は右上がりの条痕である。また口縁上端部に細かい刻み目が入る。器厚は6mmを測る。

119はやや波うつ2本の沈線とその間に刺突文が見られる。胎土は、ほとんど砂粒を含まず、暗褐色を呈し、焼成もよく、焼しまっている。器厚は6mmである。

120・122の2点は同一個体であり、ともに口縁部である。地文に幅2mmの細い右下がりの条痕文がみられ、口縁下に2段の刺突文が施文される。また裏面にも、表面と同じ条痕文がみられる。胎土は茶褐色を呈し、器厚は6mmである。

121は貼付けた粘土帯に太く大きな爪形が見られ、貼付の粘土帯自体も大きく弧をえがくと思われる。また粘土帯の外部には繩文が施文されている。胎土は小石を若干含むものでやや荒く、焼成もやや悪い。器厚は1cmとかなり厚手の土器である。

124は口縁部であり、口縁上端部に刻み目が見られるが内外面ともに無文である。器形は深鉢と考えられ、やや外反する。胎土は砂粒を含み、やや荒く、器厚は6mmである。

125・126は外面に細い繩文がみられ、125では太く浅い沈線により無文部と分けられている。胎土は124同様に砂粒を若干含んでおり、器厚はやはり6mmを測る。

127、128は口縁部であるが、127では口縁部の外面端部に繩文がみられ、胎土は黒褐色を呈し、しまっており、器厚は4mmである。器形は浅鉢ではないかと思われる。128は無文であり、胎土は124同様、やはり砂粒を含んでいる。深鉢の口縁であり、器厚7mmを測る。

以上のうち、116～122が中期の土器と考えられ、瀬戸内の船元式に並行する土器群であろう。123～128は後期に位置づけられるとと思われ、彦崎K II式などに並行関係にある土器である。

弥生土器は繩文ほど点数は多くないが、まとまって出土しており、良好な資料である。時期的に限定され、弥生時代終末より、古墳時代にかけての一時期だけである。以下、図をおって述べる。(Fig. 19-21)

1～8、14～16は口縁部もしくは一部を欠くものである。1はやや口径が大きく26cmを測るが、他は17～18cmである。14～16はやや小型で口径14cmを測る。外面はタタキ目が多くみられ、ハケによりタタキ目を消しているものもある(2・9)またハケ目だけみられるものとしては4・5・15などがある。口縁部はタタキ出し口縁による例が多く、2・7・8・14の4点である。内面にはヘラ削りが見られる(2～4)。9は半分ほど残る甕であるが、外面には幅3mmほどのタタキ目が全面に残され、下半部を除き、縦のハケ目で消しているが、タタキ目自体はかなり残っている。口縁部外面にもタタキ目が残されており、タタキ出しにより口縁部が作り出されたものと考える。内面はヘラ削りがみられ、口縁内面にはハケ目がみられる。断面の観察により、4ヶ所の接合部がみられる。17は口径15cmを測る甕である。内外面ともナデにより調整されており、口縁部は外面に粘土をかぶせ、未調整のまま終っている。断面観察により、接

合部が2ヶ所みい出されたが、接合方法は内面からであり、あまりみられない例である。10~13、18~27は底部である。10~13は丸底に近く、やや厚みをおびた底を残すのみである。また23~27も同様である。18~21はややしっかりした底をもつ底部であるが、中でも21はやや上底になってしまっており、他の底部に比べ一時期古いのではないかと考えられる。外面にはタタキ目またはタタキ目をハケで消す例が多くみられる(11、12、19、20、23~25)。内面にはヘラ削り、ハケ目がみられる(20~23、26、27)。10は小型のほとんど丸底に近い底部であるが外面にヘラ削りの痕が残されている。

以上のように口縁部、底部などの特徴をみてみると、弥生土器の一群は、ヒビノキII式とされるものであり、最近の研究では古墳時代の土器、土師器と考えなければならないようである。しかしながら3の口縁部または21の底部など古い様相をもつものがあり、弥生時代終末の遺物もあると考える。

## ○石 器

石器は石鏃が大量に出土したほかに、スクレーパー、石核、抉状耳飾り状石器、礫器、砥石、叩石を出土している。また、フレーク、チップともにかなりの量が出土している。石鏃はそのほとんどが排土をフルイにかけ、水洗することにより出土し、他の石器は二次堆積の包含層出土なので、グリッドにより一括して取り上げた。以下、器種ごとに述べる。

### 1 石 鏃 (Fig. 42~54)

石鏃は完形品、破片あわせて、327点が出土している。このうち249点を図示した。石鏃を分類するにあたっては、まず破損部位、残存部について、Tab 2のようにa~gの7タイプに分類した。完形品は124点と多く、38%を占めている。破損部位としては片脚破損が最も多く86点、両脚破損の21点を入れると107点となり、33%を占めている。先端部の破損は少なく、44点であり、17%を占めている。先端、脚部の残存は少なく13点であり、1%にも満たない。ただし破損状況については、二次堆積層からの出土であることを考えれば、後世の破損を考慮しなければならないであろう。

石鏃の形態的な分類であるが、一般的には無茎鏃と有茎鏃に、さらに無茎鏃は平基式と凹基式に分類されている。今回の石鏃も同じ分類法により、無茎鏃のうち凹基式をA類、平基式をB類とし、有茎鏃をC類とした。A類については全体の形、抉りの深さなどによりA<sub>1</sub>~A<sub>4</sub>類に細分した。

A<sub>1</sub>類はいわゆる鍔形鏃であり、抉りは深く、幅に対して2/3以上の深度をもつものである。脚部は明確に作り出され、長脚鏃のように長くのびるものもある。形態は脚部の開きにより、正三角形を呈するものから、外湾する側辺をもつ二等辺三角形をとるものが多い。

A<sub>2</sub>類も鍔形鏃の範に入るものであるが、A<sub>1</sub>類に比べ、抉りは幅全体におよばず、一部に深く入る。脚部は丸味をおびて作り出される例が多く、形態は全長が長い二等辺三角形を呈する。

Aa類は抉りが浅く、基底部が湾曲または直線的になり、脚の端部だけが短く突出する。形態は正三角形に近いものが多く、大きさは1~1.5cmが大半を占めている。

Aa類は上記以外のタイプで、抉りは概して浅く、左右不对称の外形、または不定形の脚部をもつものであり、特殊な例であろう。

B類は平基式であるが、基部はやや丸味をおびるものが多く、形態的には、三角形を呈するが、不整形をしている。また、大きさも全長約3cmを最大に大型のものが目につく。

C類は有茎鐵としたが、当遺跡では、中子をもつ有茎鐵ではなく、ポイント状の石鐵である。3点出土しており、形態は柳葉形を呈し、全長約3cmを測る。すべてサヌカイト製である。

AaおよびAa類には、全長1~2cmまでの小さなものが多く、特にサヌカイト製の石鐵では1cm前後にピークがみられ、重量も0.2~0.4gに集中しているので、ここに1つのタイプがみられるようである。またB類の中では、特に大型の石鐵がみられるが、これらが早期の所産になるものかはいさか疑問である。

全体的な傾向からみれば、長さは1~1.5cmに集中しており、1.3cmが最も多く26点である。2cmをこえるものは2点しかなく、2cm以内が標準的なサイズであったと考えられる。幅についても、1~2cmに比較的集中しているが、3cmまでの範囲にも少なからずあり、脚部の開きにより、画一的な形態はみられない。長さと幅の比率では、1:1から2:1の範囲内にほとんどのものが含まれ、長さ、幅ともに1~2cmの間に集中している。抉りについては、深さが0.5cmをこえるものはほとんどなく、幅は0.5~1.5cm中に分布しており、特に集中する傾向はみられない。

使用される石材は、サヌカイト・チャート・黒曜石の3種類がみられ、なかでもサヌカイトは236点と最も多く、72.2%を占めている。チャートは89点であり27.2%、黒曜石は2点しかなく、0.6%である。チャートは穴内川流域にも転石として豊富に得られるが、使用率は低く、サヌカイトが圧倒的な使用率を誇っている。チップにおいても同じことが云え、サヌカイトが圧倒的に多く出土したが、フレークでは逆にチャートがかなり多く出土している。また黒曜石のフレークは25点出土しているが、いずれも小片でありチップは出土しなかった。サヌカイトは香川県産と考えられ、黒曜石は白い斑点を多く含む大分県姫島産である。このような石材の使用状況からみれば、石鐵製造にあたっては意識的に石材を選択しており、サヌカイトが阿讃山脈を越え、吉野川流域を遡ってはいってきたと考えられる。タイプ別の石材の使用度にあまり変化はなく、石材と石鐵のタイプにはあまり関連性がなかったようである。

## 2 スクレーパー (Fig 35・36)

スクレーパーは13点出土している。1~5・7・8・12・14はやや大型の剝片の側辺部に調整を加え刃部を作り出しており、削器である。刃部の調整は、1・2・4・5・7・8のように、全辺におよび、非常に細かい例が多く、3・12・14のように荒い例は少ない。6は下辺部に荒い調整を、10・11は一部に細かい調整が加えられている。13は下半部全体に調整が加わっており、スクレーパーの範囲には入らないものかもしれない。使用される石材は、5が流紋岩、

6が粘板岩、7・8がサヌカイトであり、他はチャートである。石鐵では多く使用されたサヌカイトは、スクリーパーでは少なく、チャートが主体となっている。

### 3 石核 (Fig 36)

石核は3点出土しており、すべてやや質の悪いチャートを使用している。明確な打面調整はみられず、節理面などを打面としている。剝離は1~2回しか行われず、剝離面からみれば不定形な小型の剥片が剝離されている。なおサヌカイトの石核は出土しなかった。

### 4 扱状耳飾り状石器 (Fig 36・9)

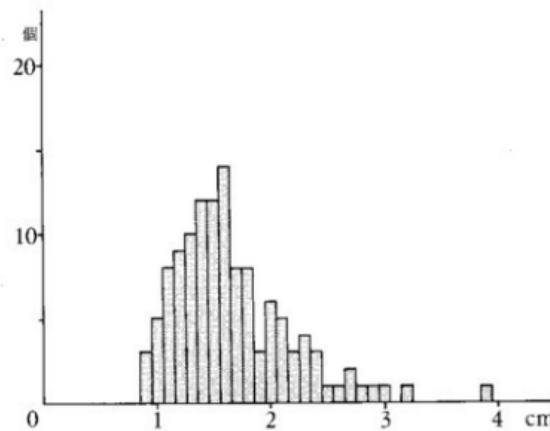
一部破損しており、原形は不明であるが、ほぼ円形をなすと考えられ、全長2.5cmを測り、中心部に穿孔されている。内面にはかなり明確に擦痕が残され、碧玉が使用されている。石材、形態からみれば、扱状耳飾りの可能性を考えられる。

### 5 磨器 (Fig 37・38)

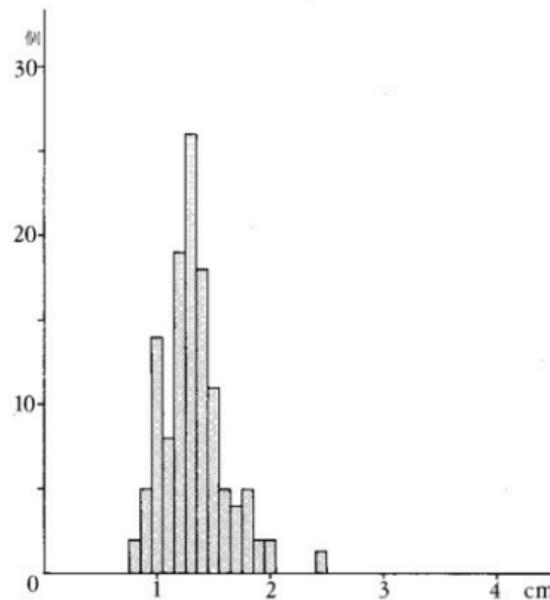
磨器は4点出土しており、すべて青色のチャート礫が使用されている。いずれも礫皮面を残し、荒い調整が行われている。18はフラットな面より4回の剝離が見られ、石核の可能性を考えられる。21は円礫の周辺部に荒い剝離を加え刃部を形成しており、チョッパーであろう。礫皮面には2回のパンチ痕が残されている。

記号	破損状態	サヌカイト	チャート	黒曜石	計	
完		完形品	96	28	124	
a		先端破損	31	12	1	44
b		片脚破損	61	25		86
c		両脚破損	9	11	1	21
d		先端脚部破損	27	7		34
e		脚部残存	3	1		4
f		先端部残存	6	3		9
g		半破損・他	3	2		5

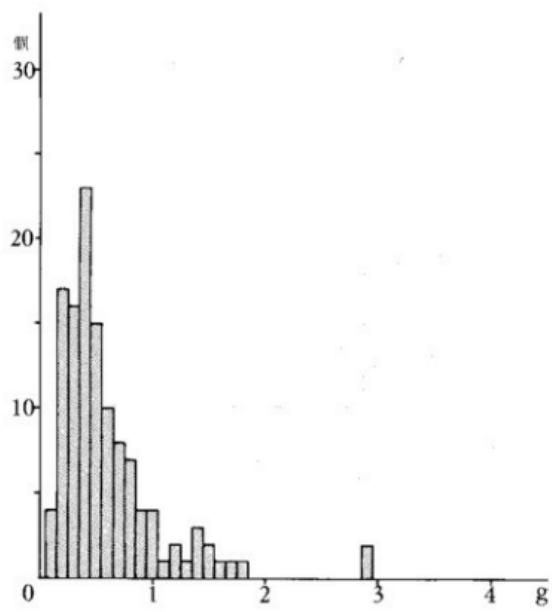
Tab 2 石鐵破損部位別一覧表



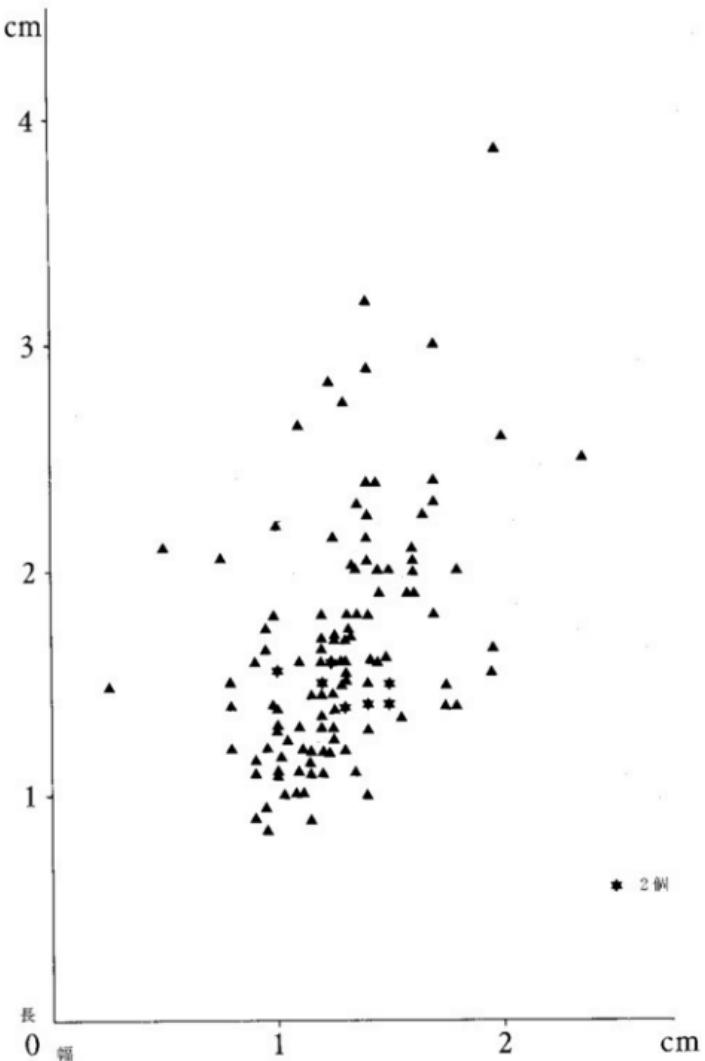
Tab 3 石器全長表



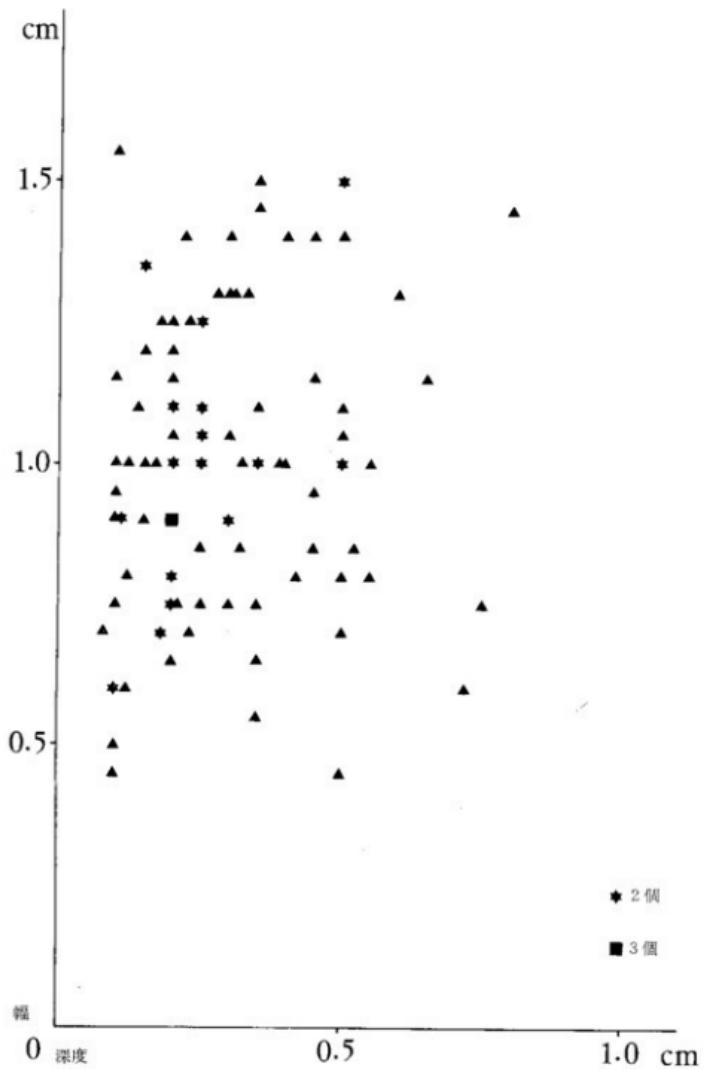
Tab 4 石器全長表



Tab 5 石錐重量表



Tab 6 石撓長幅比表



Tab. 7 石鎚抉り深幅比表

Tab 8 石 磚 計 測 表

番号	大きさ(cm)			重さ(g)	先端角度	抉り(cm)		石 材	破損番号	分類	插図番号	備考
	長	幅	厚			幅	深度					
1	1.6	1.85	0.35	0.65	70°	1.5	0.5	チャート	完	A1	1	
2	1.55	1.2	0.4	0.4	60°			"	b	"	2	
3	1.7	1.8	0.4	0.8				"	d	"	3	
4	1.95	1.2	0.27	0.4	45°			"	b	"	4	
5	1.95	1.2	0.4	0.55	50°			"	b	"	5	
6	1.47	1.51	0.32	0.4		1.4	0.4	"	a	"	6	
7	1.58	1.35	0.3	0.5	60°			"	b	"	7	
8	1.72	1.19	0.27	0.35	55°			"	b	"	8	
9	1.45	1.3	0.23	0.4	60°			黒曜石	c	"	9	
10	1.49	1.29	0.16	0.25		0.7	0.3	"	a	"	10	
11	1.48	1.35	0.2	0.4	55°	1.0	0.35	チャート	完	"	11	
12	1.8	1.5	0.3	0.75	55°	0.8	0.5	"	完	"	12	
13	2.1	1.5	0.25	0.7	55°	1.4	0.45	"	完	"	13	
14	1.5	1.75	0.4	1.1	60°	1.4	0.5	"	完	"	14	
15	1.6	1.1	0.3	0.3	50°			"	b	"	15	
16	2.5	1.0	0.25	0.9	45°			"	b	"	16	
17	2.37	1.5	0.37	0.85	60°			"	b	"	17	
18	2.53	1.46	0.37	0.7	40°			"	b	"	18	
19	1.7	1.75	0.45	1.2		1.6	0.7	"	a	"	19	
20	1.68	1.13	0.32	0.45	50°			"	b	"	20	
21	1.4	1.5	0.3	0.55		0.8	0.45	"	a	"	21	
22	1.98	1.69	0.42	1.05	65°			"	b	"	22	
23	2.0	1.4	0.4	0.75	65°			"	b	"	23	
24	2.15	1.4	0.5	1.0	40°	1.1	0.35	"	完	A1	24	
25	1.43	0.95	0.35	0.3				"	d	"	25	
26	1.57	1.05	0.7	0.5		0.65	0.25	"	a	"	26	
27	1.6	1.2	0.35	0.45	55°			"	b	A1	27	
28	1.5	1.4	0.3	0.4	50°			"	c	"	28	
29	1.5	1.2	0.4	0.4	45°	1.1	0.2	"	完	"	29	
30	1.42	1.38	0.31	0.5				"	d	"	30	
31	1.61	1.18	0.33	0.4	45°			"	b	"	31	
32	1.3	0.9	0.3	0.2		0.85	0.35	"	a	"	32	

番号	大きさ(cm)			重さ(g)	先端 角度	抉り(cm)		石材	破損 状態	分類	押 番 号	備考
	長	幅	厚			幅	深度					
33	1.2	1.02	0.2	0.2	55°			チャート	b	A1	33	
34	1.4	0.95	0.4	0.3	50°		"	"	b	"	34	
35	1.5	1.2	0.25	0.4	40°	0.7	0.08	"	完	"	35	
36	1.4	0.98	0.3	0.4	60°	0.45	0.1	"	完	"	36	
37	1.73	1.29	0.22	0.4	40°			"	b	B	37	
38	2.0	1.34	0.24	0.45	25°	1.1	0.14	"	完	"	38	
39	1.25	1.0	0.4	0.5	40°	0.8	0.12	"	完	"	39	
40	1.79	0.98	0.41	0.6	40°			"	完	"	40	
41	1.74	0.95	0.32	0.45	35°	0.6	0.1	"	完	"	41	
42	1.5	1.3	0.3	0.4	50°			"	完	"	42	
43	1.7	1.2	0.25	0.5	50°			"	b	A4	43	
44	1.7	1.4	0.3	0.6	60°			"	b	A3	44	
45	2.02	1.33	0.36	0.95	45°	1.05	0.25	"	完	"	45	
46	1.94	1.95	0.45	1.35		1.45	0.28	"	a	"	46	
47	1.6	1.6	0.4	1.05		0.65	0.2	"	a	"	47	
48	1.2	1.3	0.3	0.4		0.85	0.1	"	a	"	48	
49	1.8	1.5	0.25	0.8		1.2	0.15	"	a	A4	49	
50	1.8	1.7	0.4	1.2	80°	1.15	0.2	"	完	"	50	
51	2.84	1.23	0.38	1.6	30°			"	完	B	51	
52	2.3	1.75	0.5	1.5	45°	1.55	0.1	"	完	"	52	
53	1.59	1.44	0.4	0.8	70°	1.0	0.12	"	完	"	53	
54	1.43	1.16	0.37	0.45	50°	0.9	0.1	"	完	"	54	
55	2.5	2.35	0.6	2.85	60°	1.15	0.1	"	完	"	55	
56	1.9	2.12	0.4	1.8				"	d	"	56	
57	1.74	1.32	0.38	0.9	60°			"	完	"	57	
58	1.2	1.8	0.63	1.9	70°			"	g	"	58	
59	2.65	1.1	0.5	2.95	70°			"	完	"	59	
60	1.49	1.29	0.16	0.25	60°	0.9	0.3	"	完			
61	1.05	0.85	0.2	0.15	50°			"	b			
62	2.1	1.3	0.4	0.85	55°			"	c			
63	1.45	1.35	0.32	0.75				"	d			
64	1.8	1.25	0.4	0.7	50°			"	c			

番号	大きさ(cm)			重さ(g)	先端角度	抉り(cm)	石材	破損状態	分類	挿図番号	備考
	長	幅	厚								
65	1.18	1.02	0.2	0.25	50°		チャート	c			
66	2.44	1.5	0.46	1.15	65°		"	b			
67	1.82	1.32	0.38	0.8	65°		"	c			
68	1.5	1.28	0.3	0.45			"	d			
69	2.0	1.3	0.3	0.55	50°		"	b			
70	1.38	1.26	0.22	0.35	60°		"	完			
71	1.1	0.95	0.28	0.1	60°		"	f			
72	0.91	0.99	0.32	0.2	65°		"	f			
73	0.76	0.9	0.26	0.1	75°		"	f			
74	1.4	0.32	0.9	0.3	40°		"	c			
75	1.85	1.1	0.5	0.6	40°		"	b			
76	1.7	1.2	0.35	0.4	50°		"	c			
77	2.55	1.0	0.35	0.9			"	g			
78	1.3	0.9	0.32	0.25	55°		"	c			
79	2.3	2.02	0.4	1.35			"	e			
80	2.22	1.7	0.3	1.1	70°		"	c			
81	1.2	1.2	0.25	0.25	70°		"	c			
82	1.9	2.0	0.75	1.9			"	d			
83	1.31	1.12	0.4	0.45	65°		"	c			
84	0.95	1.18	0.3	0.35		0.75	0.1	"	a		
85	2.05	1.6	0.42	0.9	70°		"	完	B	243	
86	1.7	1.6	0.4	1.0			"	a	B	247	
87	1.6	1.42	0.33	0.55	65°	1.15	0.45	"	完	A1	245
88	2.4	1.73	0.38	1.25	60°	1.45	0.8	"	完		
89	1.3	1.33	0.31	0.35	65°		"	b			
90	1.7	2.0	0.5	1.75			"	a			
91	1.3	1.05	0.2	0.2	60°		"	b			
92	0.8	1.4	0.2	0.2		1.1	0.25	サスカイト	a	A1	60
93	1.0	1.4	0.15	0.2	90°	0.65	0.15	"	完	"	61
94	0.94	1.71	0.31	0.3		0.95	0.25	"	a	"	62
95	0.88	1.38	0.3	0.3		0.8	0.2	"	a	"	63
96	1.2	1.3	0.3	0.25	65°	0.8	0.42	"	完	"	64

番号	大きさ(cm)			重さ(g)	先端角度	抉り(cm)		石材	破損状態	分類	掲図番号	備考
	長	幅	厚			幅	深度					
97	1.5	1.1	0.3	0.25	55°			サスカイト	b	A1	65	
98	1.4	1.2	0.3	0.3				"	d	"	66	
99	1.23	1.05	0.27	0.2	60°			"	b	"	67	
100	1.4	1.4	0.2	0.3	65°	1.0	0.5	"	完	"	68	
101	1.4	1.02	0.19	0.2	50°			"	b	"	69	
102	1.34	1.26	0.3	0.3	65°			"	b	"	70	
103	1.68	1.43	1.43	0.55	60°			"	b	"	71	
104	1.48	1.53	0.31	0.45	60°	1.0	0.55	"	完	"	72	
105	1.38	1.3	0.2	0.25	60°	0.55	0.35	"	完	"	73	
106	1.5	1.5	0.25	0.45	60°	0.75	0.3	"	完	"	74	
107	1.6	1.27	0.41	0.6	65°	0.85	0.32	"	完	"	75	
108	1.9	1.6	0.2	0.55	55°	1.05	0.5	"	完	"	76	
109	1.7	1.5	0.32	0.7	60°			"	b	"	77	
110	1.8	1.3	0.2	0.5	60°			"	b	"	78	
111	1.67	1.2	0.29	0.25	50°			"	b	"	79	
112	1.8	1.3	0.3	0.4	60°			"	b	"	80	
113	1.17	1.46	0.22	0.3				"	d	"	81	
114	1.54	1.13	0.22	0.25	65°			"	b	"	82	
115	1.3	1.1	0.23	0.2	90°			"	b	"	83	
116	1.6	1.35	0.2	0.35	70°			"	b	"	84	
117	1.75	1.21	0.19	0.25	65°			"	b	"	85	
118	1.64	1.36	0.18	0.35	60°			"	c	"	86	
119	2.18	1.25	0.26	0.45	60°			"	b	"	87	
120	1.87	1.22	0.16	0.3	60°			"	b	"	88	
121	1.23	1.38	0.25	0.35	80°			"	c	"	89	
122	1.69	1.25	0.25	0.3	40°			"	b	"	90	
123	1.6	1.1	0.2	0.35	65°			"	b	"	91	
124	1.6	1.23	0.2	0.3	65°			"	b	"	92	
125	1.5	1.4	0.3	0.45	60°			"	b	"	93	
126	1.7	1.55	0.3	0.4	65°			"	b	"	94	
127	1.54	1.33	0.22	0.4				"	d	"	95	
128	1.61	1.43	0.26	0.35	75°			"	b	"	96	

番号	大きさ(cm)			重さ (g)	先端 角度	抉り(cm)		石材	破損 状態	分類	押圧 番号	備考
	長	幅	厚			幅	深度					
129	1.8	1.68	0.27	0.55	65°			サスカイト	b	A1	97	
130	1.77	1.31	0.3	0.5	55°			"	b	"	98	
131	1.8	1.8	0.27	0.6	80°			"	b	"	99	
132	1.55	1.93	0.32	0.55	70°	1.4	0.4	"	完	"	100	
133	1.38	1.76	0.31	0.45	75°	1.3	0.33	"	完	"	101	
134	1.4	1.6	0.34	0.5		1.2	0.4	"	a	"	102	
135	1.7	1.7	0.5	0.75	60°			"	b	"	103	
136	1.95	1.48	0.3	0.5	55°			"	b	"	104	
137	2.2	2.0	0.36	1.0	60°			"	b	"	105	
138	2.1	1.65	0.25	0.5	55°			"	b	"	106	
139	2.2	1.5	0.35	0.6	65°	1.0	0.5	"	完	"	107	
140	2.1	1.6	0.3	0.7	55°	1.15	0.65	"	完	"	108	
141	2.45	1.59	0.27	0.8	50°			"	b	"	109	
142	2.4	1.85	0.4	0.8	50°			"	b	"	110	
143	2.0	2.3	0.5	1.25		0.95	0.8	"	a	"	111	
144	2.02	1.74	0.25	0.5				"	d	"	112	
145	3.0	1.7	0.34	1.2	35°	0.6	0.72	"	完	A1	113	
146	2.4	1.4	0.23	0.75	40°	0.45	0.5	"	完	"	114	
147	2.0	1.6	0.25	0.65	50°	0.75	0.75	"	完	"	115	
148	1.66	1.18	0.29	0.35	45°	0.85	0.52	"	完	"	116	
149	1.7	1.3	0.4	0.5	55°	0.7	0.5	"	完	"	117	
150	1.64	1.18	0.23	0.3	65°	0.85	0.45	"	完	"	118	
151	1.4	1.3	0.3	0.35		1.2	0.35	"	a	"	119	
152	1.62	1.18	0.27	0.35	45°			"	b	"	120	
153	1.79	1.29	0.28	0.5	50°	1.0	0.25	"	完	"	121	
154	2.0	1.5	0.35	0.8	40°	1.0	0.32	"	完	"	122	
155	1.34	1.36	0.27	0.35		1.2	0.4	"	a	"	123	
156	1.65	1.3	0.4	0.5				"	d	"	124	
157	1.6	1.2	0.28	0.4				"	d	"	125	
158	1.7	1.2	0.3	0.45	50°			"	b	"	126	
159	1.65	1.3	0.36	0.5	45°	1.0	0.35	"	完	"	127	
160	1.43	1.12	0.24	0.3		0.9	0.2	"	a	"	128	

番号	大きさ(cm)			重さ(g)	先端角度	挟り(cm)		石材	破損状態	分類	排番号	備考
	長	幅	厚			幅	深度					
161	3.86	1.96	0.31	1.5	60°	1.55	0.5	サスカイト	完	A 1	129	
162	1.27	1.0	0.21	0.15	55°	0.75	0.35	"	完	"	130	
163	1.4	1.1	0.15	0.15	55°			"	b	"	131	
164	1.35	1.0	0.2	0.25	40°			"	c	A 1	132	
165	1.18	1.24	0.29	0.25	45°	0.75	0.2	"	完	A 1	133	
166	1.3	1.1	0.25	0.35	50°	0.85	0.25	"	完	A 1	134	
167	1.23	0.95	0.18	0.15	50°	0.65	0.35	"	完	A 4	135	
168	1.3	1.15	0.3	0.3	60°			"	b	A 1	136	
169	0.9	0.95	0.25	0.25	55°			"	c	"	137	
170	1.26	1.1	0.29	0.3				"	d	A 4	138	
171	1.29	0.98	0.24	0.3	50°			"	b	A 1	139	
172	1.55	1.0	0.3	0.25	40°	0.9	0.3	"	完	A 2	140	
173	1.7	1.05	0.2	0.35	45°			"	c	"	141	
174	2.38	1.44	0.35	0.7	60°	1.1	0.5	"	完	"	142	
175	2.25	1.65	0.43	0.8	50°	1.3	0.28	"	完	"	143	
176	2.15	1.25	0.23	0.4	50°	1.0	0.4	"	完	"	144	
177	2.56	1.36	0.37	0.95	55°			"	b	"	145	
178	1.86	1.24	0.25	0.5	40°			"	b	"	146	
179	1.92	0.96	0.25	0.4	55°			"	b	"	147	
180	1.8	1.4	0.2	0.5	45°	1.0	0.15	"	完	"	148	
181	2.05	1.4	0.35	0.9	60°	0.8	0.2	"	完	"	149	
182	2.25	1.4	0.3	0.8	60°	1.3	0.3	"	完	"	150	
183	0.95	0.95	0.2	0.15	60°	0.7	0.18	"	完	A 1	151	
184	0.93	0.85	0.22	0.1	65°	0.6	0.1	"	完	"	152	
185	0.98	1.03	0.18	0.1	55°	0.7	0.18	"	完	"	153	
186	1.17	1.02	0.26	0.2	55°	0.75	0.2	"	完	"	154	
187	1.2	1.12	0.24	0.2	50°	0.75	0.25	"	完	"	155	
188	1.08	1.0	0.22	0.2	50°	0.75	0.21	"	完	"	156	
189	1.01	1.11	0.2	0.15	95°	1.0	0.17	"	完	"	157	
190	0.88	0.87	0.17	0.1		0.75	0.2	"	a	"	158	
191	1.15	1.15	0.15	0.25	80°	1.05	0.3	"	完	"	159	
192	1.1	1.14	0.2	0.2	70°	0.9	0.2	"	完	"	160	

番号	大きさ(cm)			重さ(g)	先端角度	抉り(cm)		石材	破損状態	分類	押圧番号	備考
	長	幅	厚			幅	深度					
193	1.01	1.09	0.22	0.15	65°	0.65	0.2	サヌカイト	完	A 1	161	
194	1.1	1.2	0.25	0.2	65°	1.0	0.25	"	完	"	162	
195	1.3	1.25	0.2	0.3	60°	1.0	0.39	"	完	"	163	
196	1.35	1.2	0.25	0.3	45°	1.0	0.2	"	完	"	164	
197	1.21	1.23	0.26	0.25	65°	1.05	0.25	"	完	"	165	
198	1.1	0.9	0.3	0.2	50°	0.75	0.1	"	完	"	166	
199	1.3	1.0	0.28	0.3	70°	0.6	0.12	"	完	"	167	
200	1.09	1.13	0.25	0.2	60°	0.95	0.1	"	完	"	168	
201	1.1	1.0	0.2	0.25	65°	0.9	0.15	"	完	"	169	
202	1.23	0.86	0.32	0.25	45°			"	b	"	170	
203	1.08	1.34	0.2	0.2	70°	1.25	0.18	"	完	"	171	
204	1.1	1.15	0.2	0.2		0.65	0.15	"	a	"	172	
205	1.26	1.04	0.36	0.35	55°	0.9	0.11	"	完	"	173	
206	1.05	1.05	0.15	0.2		1.0	0.1	"	a	"	174	
207	1.4	1.3	0.3	0.6	55°	0.9	0.11	"	完	"	175	
208	1.52	1.21	0.2	0.3	55°			"	b	"	176	
209	1.51	1.29	0.29	0.4				"	d	"	177	
210	2.13	1.8	0.28	1.15	65°			"	b	"	178	
211	1.71	1.29	0.3	0.45	50°			"	b	"	179	
212	1.2	1.6	0.3	0.5		1.3	0.15	"	a	"	180	
213	1.3	1.4	0.35	0.35	60°	1.25	0.23	"	完	"	181	
214	1.5	1.4	0.25	0.3	55°	1.25	0.25	"	完	"	182	
215	1.4	1.35	0.3	0.4	65°	1.3	0.25	"	b	"	183	
216	1.4	1.4	0.28	0.35	60°	1.25	0.25	"	完	"	184	
217	2.0	1.39	0.37	0.55	50°			"	b	"	185	
218	1.37	1.51	0.23	0.35	70°	1.25	0.2	"	完	"	186	
219	1.4	1.4	0.2	0.35		1.25	0.1	"	a	"	187	
220	1.62	1.42	0.27	0.5	55°	1.35	0.15	"	完	"	188	
221	1.7	1.3	0.2	0.4	60°			"	b	"	189	
222	1.36	1.22	0.46	0.5	45°			"	b	"	190	
223	1.4	1.4	0.3	0.6		1.3	0.2	"	a	"	191	
224	1.56	1.36	0.19	0.3	55°			"	b	"	192	

番号	大きさ(cm)			重さ(g)	先端角度	抉り(cm)		石材	破損状態	分類	押送番号	備考
	長	幅	厚			幅	深度					
225	1.61	1.29	0.25	0.4	50°	1.1	0.25	サスカイト	完	A 1	193	
226	1.5	1.3	0.3	0.4	60°	1.0	0.2	"	完	"	194	
227	1.8	1.3	0.32	0.6	65°			"	b	"	195	
228	1.7	1.75	0.3	0.7	75°			"	b	"	196	
229	1.42	1.28	0.29	0.4	70°	0.9	0.2	"	完	"	197	
230	1.8	1.2	0.25	0.4	55°	1.1	0.25	"	完	"	198	
231	1.6	1.1	0.3	0.45	65°	1.45	0.35	"	完	"	199	
232	2.0	1.45	0.25	0.55	55°	1.4	0.3	"	完	"	200	
233	2.05	1.4	0.3	0.75	60°			"	b	"	201	
234	1.7	1.26	0.19	0.3	50°	1.2	0.15	"	完	"	202	
235	2.0	1.3	0.3	0.55	35°			"	b	"	203	
236	2.28	1.31	0.37	0.7	30°	1.05	0.2	"	完	"	204	
237	1.6	1.25	0.3	0.45	55°	0.85	0.15	"	完	"	205	
238	2.05	1.4	0.25	0.45	40°			"	b	"	206	
239	1.4	1.8	0.4	0.7	50°	1.2	0.2	"	完	"	207	
240	1.48	1.28	0.36	0.5				"	d	A 1	208	
241	1.15	1.3	0.3	0.4		1.2	0.42	"	a	"	209	
242	1.8	1.5	0.25	0.6	70°	1.5	0.35	"	完	"	210	
243	1.6	1.5	0.45	0.85		1.45	0.5	"	a	"	211	
244	1.91	1.57	0.45	1.0	80°	0.7	0.23	"	完	"	212	
245	1.65	1.28	0.33	0.7	90°			"	b	"	213	
246	2.05	0.75	0.35	0.9	80°	1.4	0.22	"	完	"	214	
247	2.9	1.4	0.45	1.35	65°			"	完	C	215	
248	2.74	1.29	0.58	1.65	50°			"	完	"	216	
249	1.19	0.8	0.26	0.1	40°			"	完	B	217	
250	1.14	0.9	0.18	0.2	55°			"	完	"	218	
251	1.45	1.2	0.23	0.4	55°			"	完	"	219	
252	1.27	1.26	0.28	0.35	65°			"	完	"	220	
253	1.3	1.2	0.25	0.3	65°			"	完	"	221	
254	1.3	1.5	0.3	0.4				"	a	"	222	
255	1.09	1.17	0.31	0.35				"	a	"	223	
256	1.4	1.3	0.4	0.75				"	d	"	224	

番号	大きさ(cm)			重さ(g)	先端角度	抉り(cm)		石材	破損状態	分類	挿図番号	備考
	長	幅	厚			幅	深度					
257	1.62	1.18	0.28	0.4	55°			サスカイト	完	B	225	
258	1.5	1.34	0.35	0.7				"	d	"	226	
259	1.42	1.43	0.37	0.5				"	a	"	227	
260	1.65	1.2	0.2	0.4	40°			"	b	"	228	
261	1.8	1.48	0.3	0.65	60°			"	b	"	229	
262	1.8	1.36	0.45	1.0	60°	1.0	0.8	"	完	"	230	
263	1.98	1.82	0.35	1.4	65°			"	完	"	231	
264	2.2	1.6	0.4	1.3	75°	1.1	0.1	"	完	"	232	
265	2.3	1.55	0.58	1.7	65°			"	g	"	233	
266	2.05	2.4	0.39	1.95		2.1	0.22	"	e	"	234	
267	0.9	1.15	0.1	0.2	90°	0.9	0.2	"	完			
268	1.19	1.15	0.17	0.2	65°	0.8	0.2	"	完			
269	1.64	0.94	0.23	0.4	80°	0.5	0.1	"	完			
270	1.65	1.55	0.3	0.65		0.7	0.4	"	d			
271	1.4	1.4	0.25	0.45		0.8	0.25	"	a			
272	1.1	2.1	0.3	0.4		0.7	0.15	"	a			
273	1.5	1.7	0.25	0.45		1.55	0.2	"	a			
274	1.52	1.32	0.25	0.35				"	d			
275	1.5	1.0	0.26	0.15	50°			"	b			
276	1.4	1.17	0.22	0.3				"	d			
277	1.03	1.1	0.3	0.3	65°			"	c			
278	0.9	1.35	0.3	0.3				"	d			
279	1.08	0.85	0.59	0.15	45°			"	c			
280	2.15	1.25	0.3	0.6	30°			"	b			
281	1.75	1.1	0.22	0.45	65°			"	c			
282	1.77	1.48	0.4	0.85				"	d			
283	1.29	1.32	0.25	0.45				"	d			
284	1.91	1.3	0.3	0.5	55°			"	c			
285	1.55	1.35	0.25	0.35	40°			"	f			
286	1.4	1.3	0.35	0.45	60°			"	f			
287	1.04	1.1	0.28	0.25	65°			"	f			
288	0.8	0.82	0.16	0.1	50°			"	f			

番号	大きさ(cm)			重さ(g)	先端角度	抉り(cm)		石材	破損状態	分類	插図番号	備考
	長	幅	厚			幅	深度					
289	1.2	0.79	0.19	0.15	55°			サスカイト	f			
290	1.39	1.2	0.24	0.5		0.75	0.2	"	a			
291	1.6	1.1	0.3	0.4				"	d			
292	1.52	1.25	0.25	0.3				"	d			
293	0.72	1.12	0.21	0.15		0.6	0.19	"	a			
294	0.95	1.22	0.25	0.3		0.85	0.31	"	a			
295	1.52	1.09	0.25	0.3	55°			"	f			
296	1.09	1.52	0.2	0.35				"	d			
297	1.2	1.6	0.4	0.65		0.25	0.15	"	a			
298	1.02	1.3	0.29	0.4				"	d			
299	1.05	1.6	0.2	0.3				"	d			
300	0.75	1.3	0.2	0.2		1.0	0.12	"	a			
301	1.12	1.25	0.32	0.4				"	d			
302	1.1	1.55	0.42	0.6				"	d			
303	1.2	1.71	0.32	0.75		1.42	0.05	"	a			
304	1.55	1.46	0.3	0.7		1.22	0.09	"	a			
305	0.85	0.8	0.29	0.15				"	d			
306	2.55	1.8	0.28	1.0	70°			"	g			
307	1.4	0.8	0.22	0.25				"	g			
308	0.67	1.4	0.22	0.25		1.05	0.15	"	e			
309	1.4	1.7	0.3	0.7				"	a			
310	1.02	2.78	0.5	1.65		2.1	0.18	"	e			
311	0.9	0.9	0.2	0.1	60°			"	完			
312	1.47	1.25	0.32	0.6	70°			"	完			
313	1.97	1.29	0.33	0.9	65°			"	b			
314	1.64	1.47	0.23	0.4				"	d			
315	1.6	1.23	0.27	0.4	55°	0.8	0.55	"	完			
316	2.7	2.1	0.45	1.45		1.1	0.4	"	a	A 1	248	
317	2.6	2.0	0.45	1.35	80°	1.3	0.6	"	完	A 1	235	
318	1.72	1.24	0.36	0.5	55°	0.95	0.45	"	完	A 1	238	
319	1.8	1.42	0.27	0.5	60°			"	b	A 1	237	
320	1.06	1.18	0.22	0.2	65°	0.8	0.24	"	完	A 1	246	

番号	大きさ(cm)			重さ(g)	先端角度	抉り(cm)		石材	破損状態	分類	押図番号	備考
	長	幅	厚			幅	深度					
321	1.34	1.53	0.29	0.4	70°	1.3	0.31	サスカイト	完	A1	242	
322	1.9	1.46	0.29	0.5	65°			"	b	A4	241	
323	1.91	1.46	0.34	0.75	55°	1.1	0.2	"	完	A3	240	
324	1.63	1.16	0.31	0.5	40°			"	b	B	236	
325	1.69	1.32	0.46	0.7	50°			"	完	"	239	
326	3.2	1.4	0.4	1.75	55°			"	完	C	249	
327	2.81	1.92	0.48	2.0				"	d	B	244	

## V 総括

今回の調査における最大の成果は、縄文時代早期の押型文土器群を検出したことであろう。今まで四国内では、愛媛県の上黒岩洞穴遺跡より草創期以降の遺物を層位的に出土しているほかに、肱川流域の上流に中津川、黒瀬川洞穴などの遺跡があり、早期の遺物を出土している。県内においては、高岡郡佐川町の不動ヶ岩屋遺跡より、草創期から早期の資料を出土している。また徳島県では、吉野川流域の三好郡三加茂町の洞穴遺跡において押型文が出土している。香川県では瀬戸内海沿岸で断片的ではあるが、押型文を出土する遺跡が知られている。

当遺跡の資料は二次堆積中の遺物なので、層位的には把握できなかったが、かなりの多様性を示している。早期の土器群としては、山形文、楕円文、格子目文が出土しており型式的に編年ができる。山形文は、I類とII類に大きく分類され、從来の編年には従えば、I類が古くII類が新しく位置づけられる。楕円文では、粒子の大きさにより、III、IV類に大類されるが、高山寺式にみられるような粗大な楕円文ではなく、施文も縦位はみられずすべて横位である。編年的には山形文のI類、楕円文のIII、IV類、格子目文のV類がI型式としてとらえられ、県内においては、不動ヶ岩洞穴遺跡出土の不動ヶ岩II式と同型式であると考える。これは上黒岩III式と並行関係にあり、帝釈観音堂洞窟遺跡の第19層中にみられる押型文と同時期であろう。また、VII、VIII類とした厚手無文土器群は、いわゆる葛島式と同型式と考えられ、他の遺跡でも上記の押型文土器に伴い出土しているので、飼古屋II式を構成する土器群であるが、飼古屋III式にも伴う可能性もある。この型式を飼古屋II式としておく。これに対し、山形文が細かく乱れたものを飼古屋III式とする。楕円文においても粒子の細かなものについては、同型式に含まれる可能性が考えられる。

さて次にVI類としたものであるが、一見、爪形文にも見えるが、施文を細かく観察すれば、神宮寺式とされる、ネガティブな押型文と考えられる。神宮寺式では回転による押型ではなく、施文手法としては、同原体を押圧または半回転により半段ずつずらし、爪形状の施文を相互に出現させている。この神宮寺式の押型文は編年的には従来、文様の類似性などから、草創期の爪形文と間違づけ、古く位置づける立場と、特殊性により、押型文の中でもむしろ新しく位置づけられる立場があるが、古く位置づけられると考え、当遺跡の出土遺物中最も古く、飼古屋I式とする。飼古屋III式では、文様の粗雑化により新しく位置づけたが、高山寺式にもみられるような粗大な楕円文は検出されていないので、この時期まで遡るものであるかは疑問である。

石器については、ほとんどのものが早期に伴うと考えられるが、一部中期、後期に伴うものがあると考えられる。ここで特徴的なのは使用されている石材の70%以上がサヌカイトであり、石材選択にあたっては、文化的にかなりの規制があったためではないかと考えられる。チップにもサヌカイトが多く、フレークに少ないところをみると、原砾を直接、当地に搬入したのではなく、剥片または半成品のような形でもってきたと考えられる。

遺跡の性格としては、多量の石器の出土からみて、石器製造場であり、岩陰という地形を考

えれば、ベースキャンプ的なものであり、かなり長期間にわたり使用されたものであろう。また早期以降においても、中、後期の船元II式、彦崎K II式などがみられることにより、短期間に断続的に使用されていると考えられる。さらに弥生時代後期終末から古墳時代の遺物として、ヒビノキII式が出土しており、水田開墾の結果、このような山間部にも進出してきたのである。

調査結果としては、良好な早期資料を中心に、中、後弥生時代から、さらに中世、近代に至る資料を出土したが、報告書製作まで時間的余裕もなく、十分な考察も行えなかつたが、今後の研究の一助になればと思うしたいである。

### 参考文献

日本の洞穴遺跡	S 42	日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会
帝釈峠遺跡群	S 51	松崎寿和
考古学集刊 第4集下	S 46	東京考古学会
大分県二日市洞穴	S 55	橋昌信
卯の木押型文遺跡	S 38	長岡市立科学博物館考古研究室
壬遺跡 1981	S 56	国学院大学文学部考古学研究室
1982	S 57	" "
里木貝塚	S 46	倉敷考古館
考古学論文集	S 53	南山大学考古学研究室
港町岩陰	S 54	美濃市教育委員会
高知県史 考古編	S 43	高知県
土佐山田町史	S 54	土佐山田町史編纂委員会

# 図 版

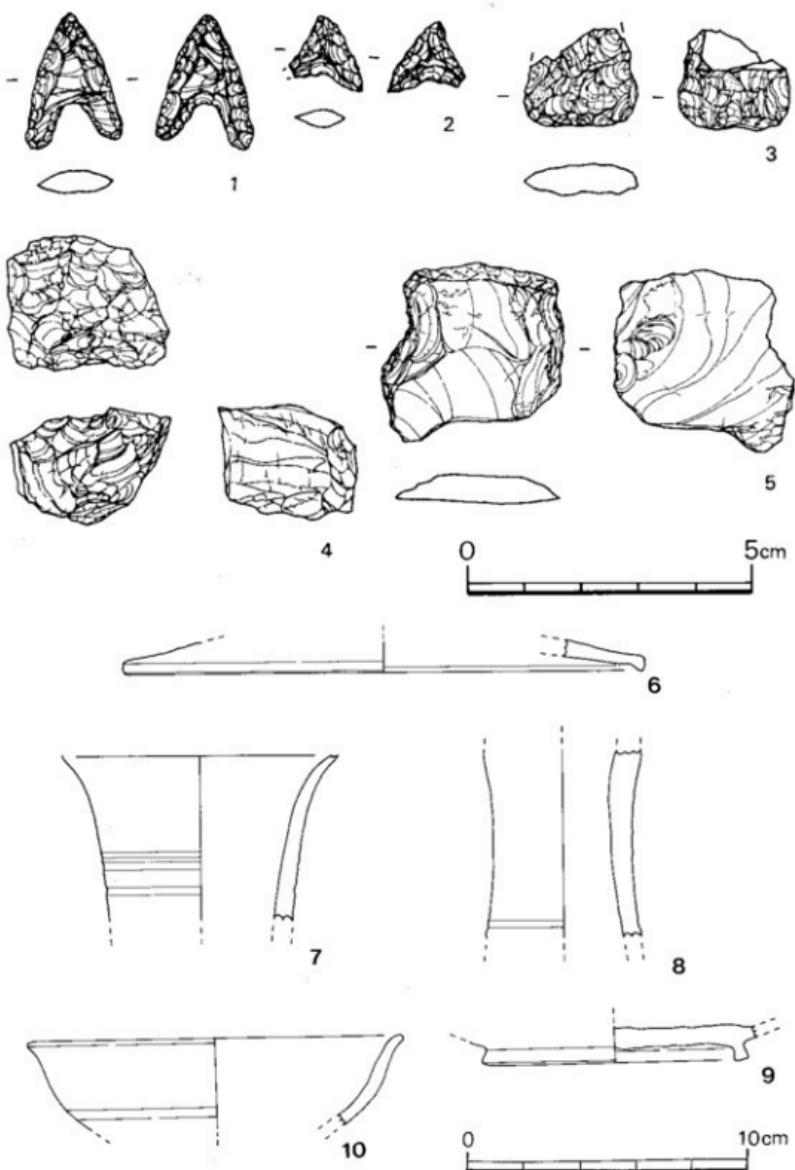


Fig. 11 B区出土遗物 (1/1·1/2)

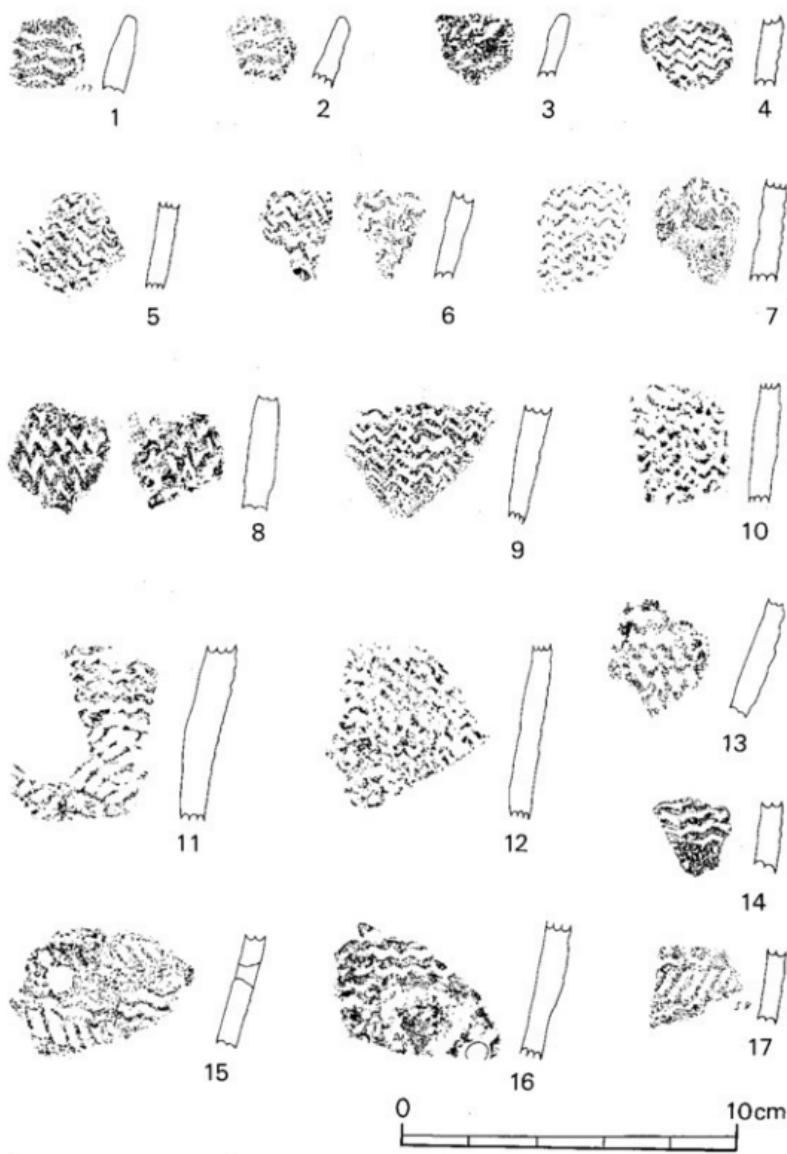


Fig. 12 C区出土遺物 繩文土器 (3 / 5)

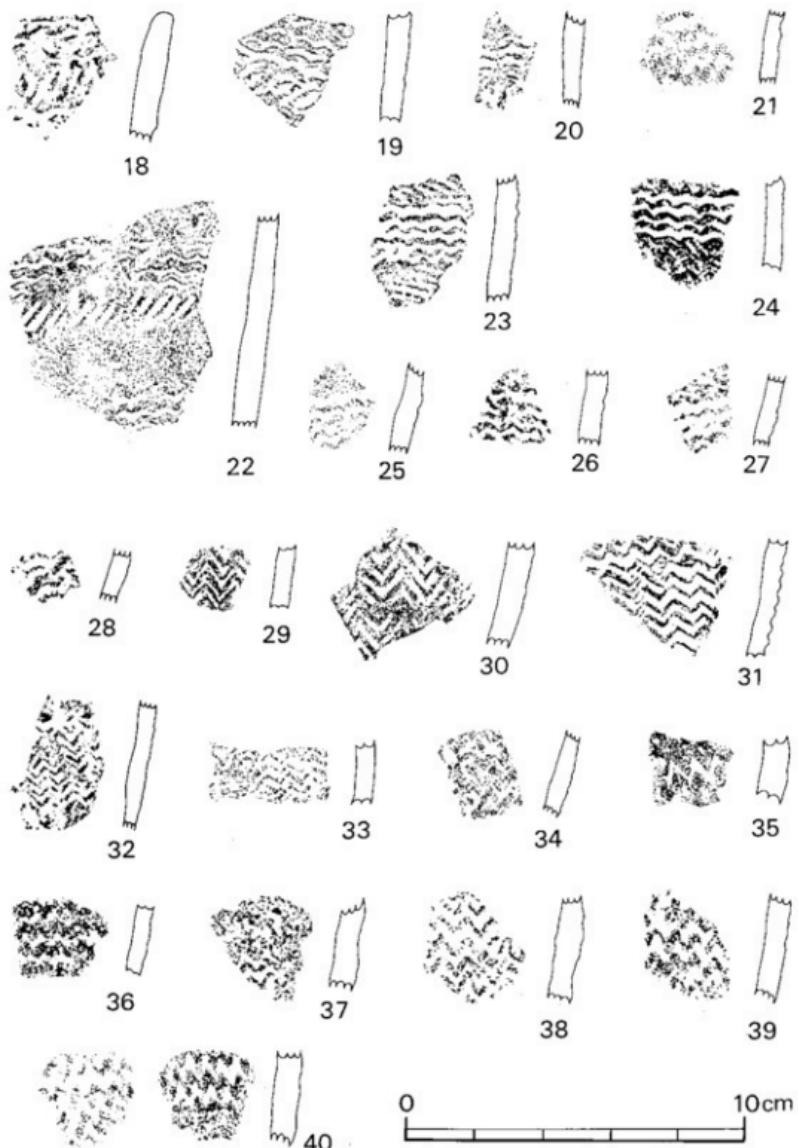


Fig. 13 C区出土遺物 繩文土器 (3 / 5)

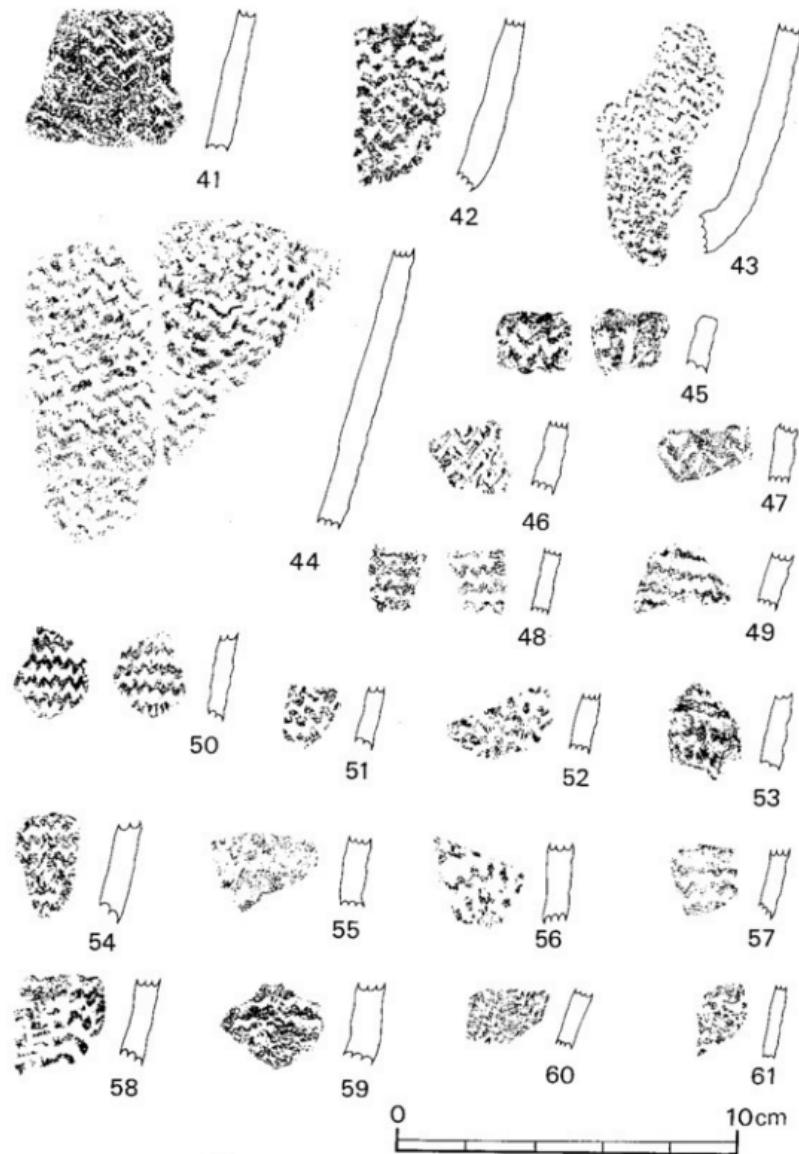


Fig. 14 C区出土遺物 繩文土器 (3 / 5)

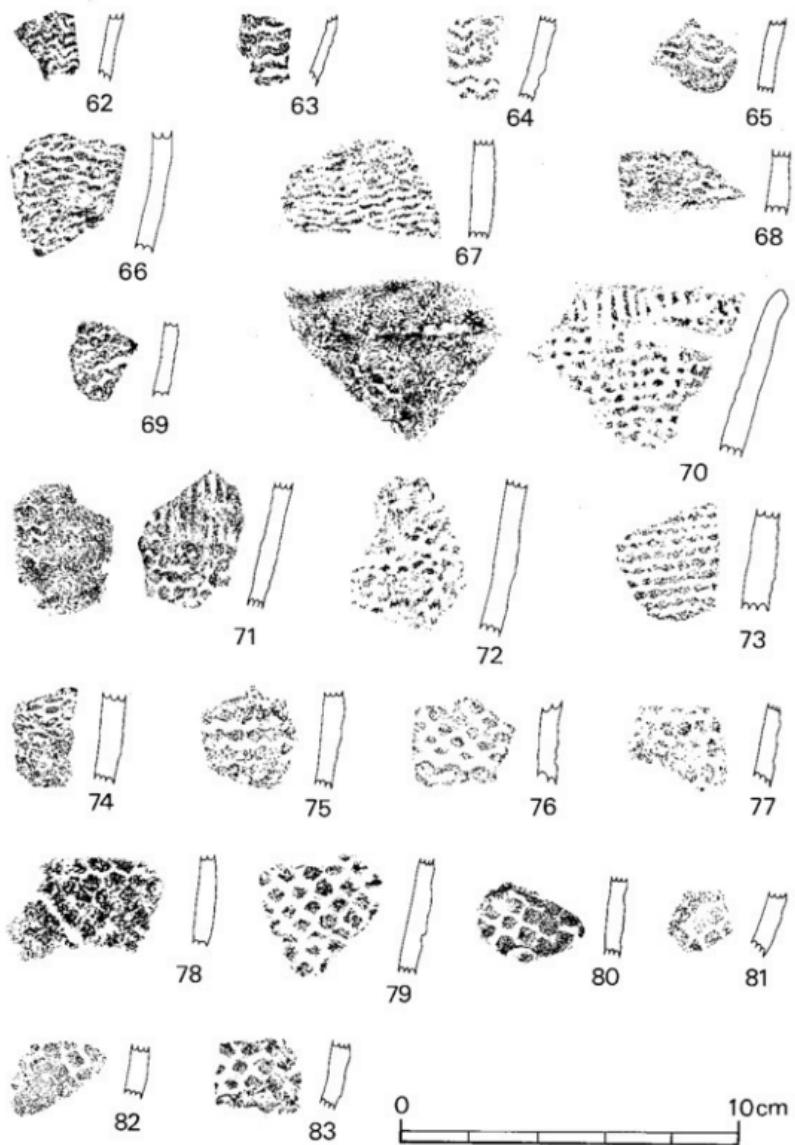


Fig. 15 C区出土遺物 繩文土器 (3/5)

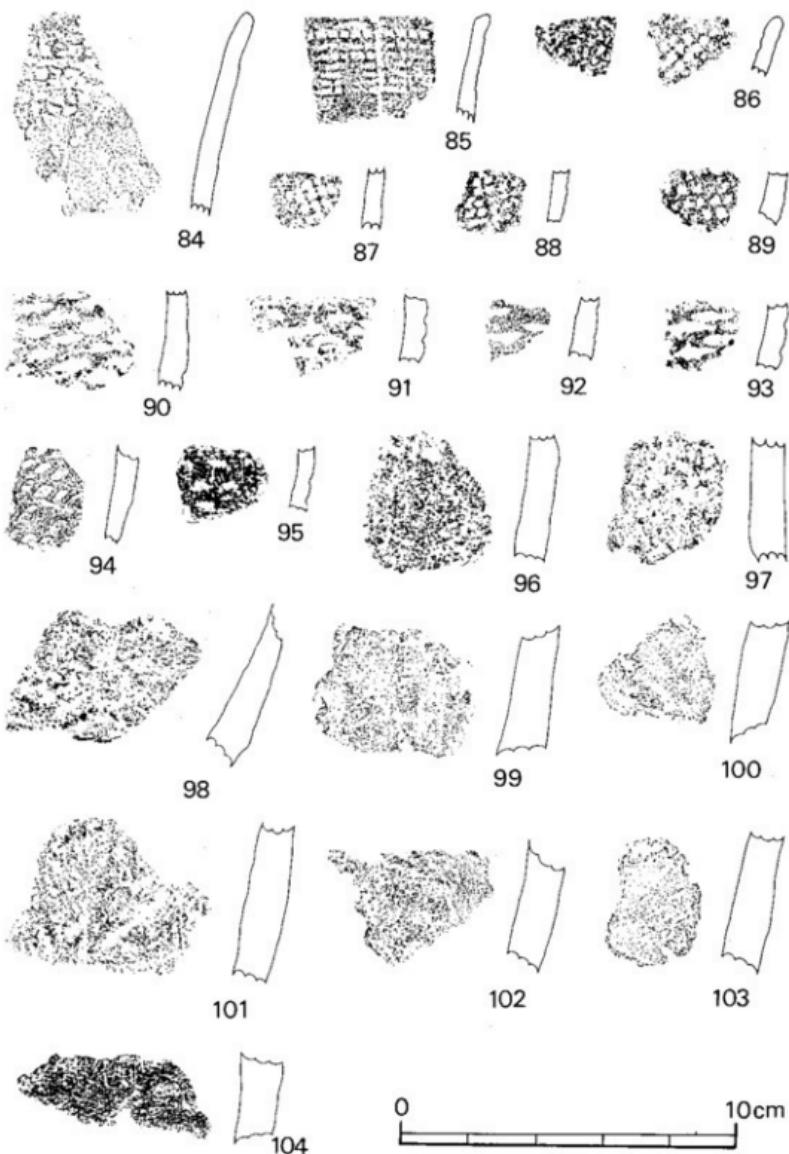
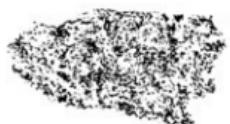


Fig. 16 C区出土遺物 繩文土器 (3 / 5)



105



106



107



108



109



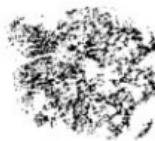
110



111



112



113



114



115

0

10cm

Fig. 17 C区出土遺物 繪文土器 (3 / 5)

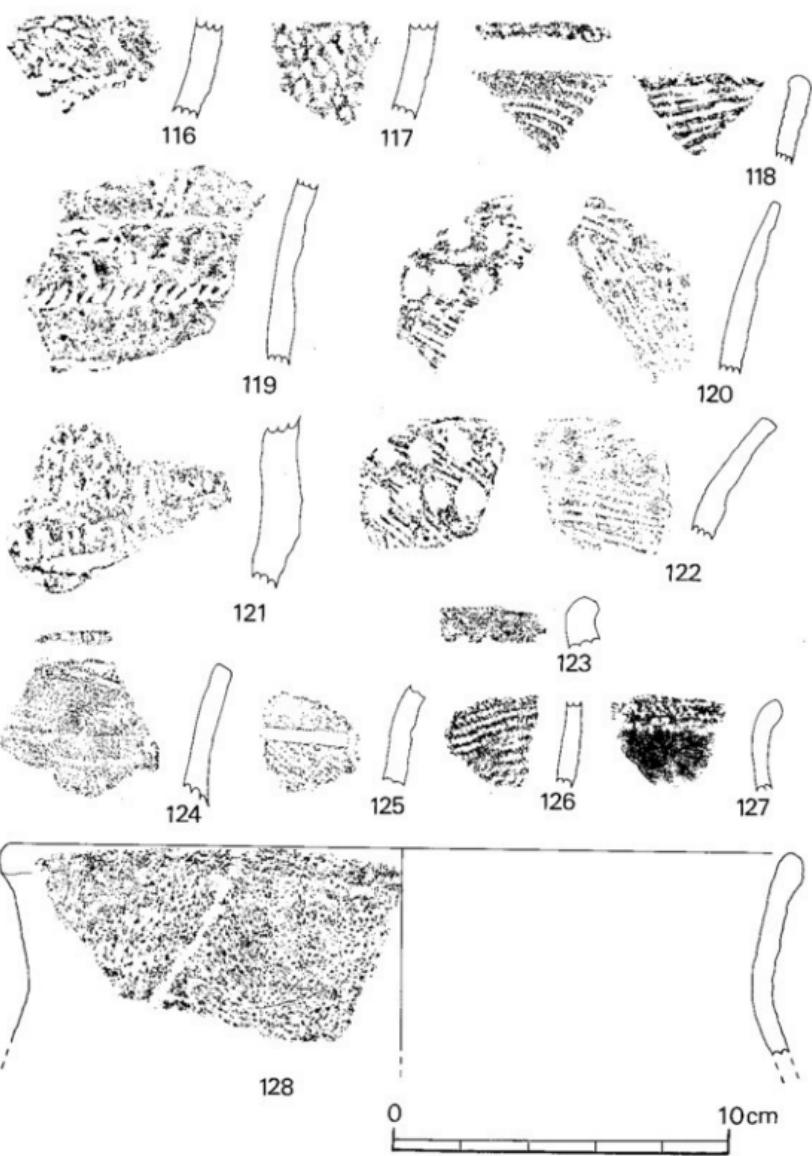


Fig. 18 C区出土遺物 繩文土器 (3/5)

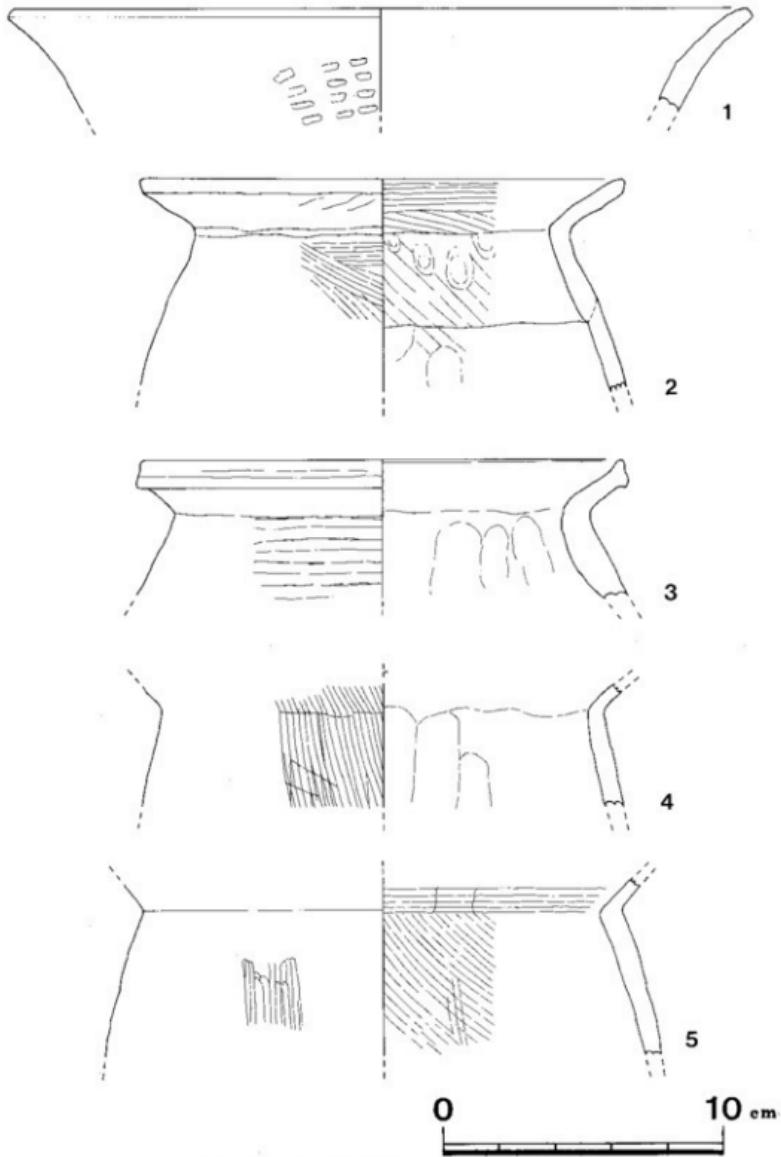


Fig. 19 C区出土遺物 弥生土器 (1/2)

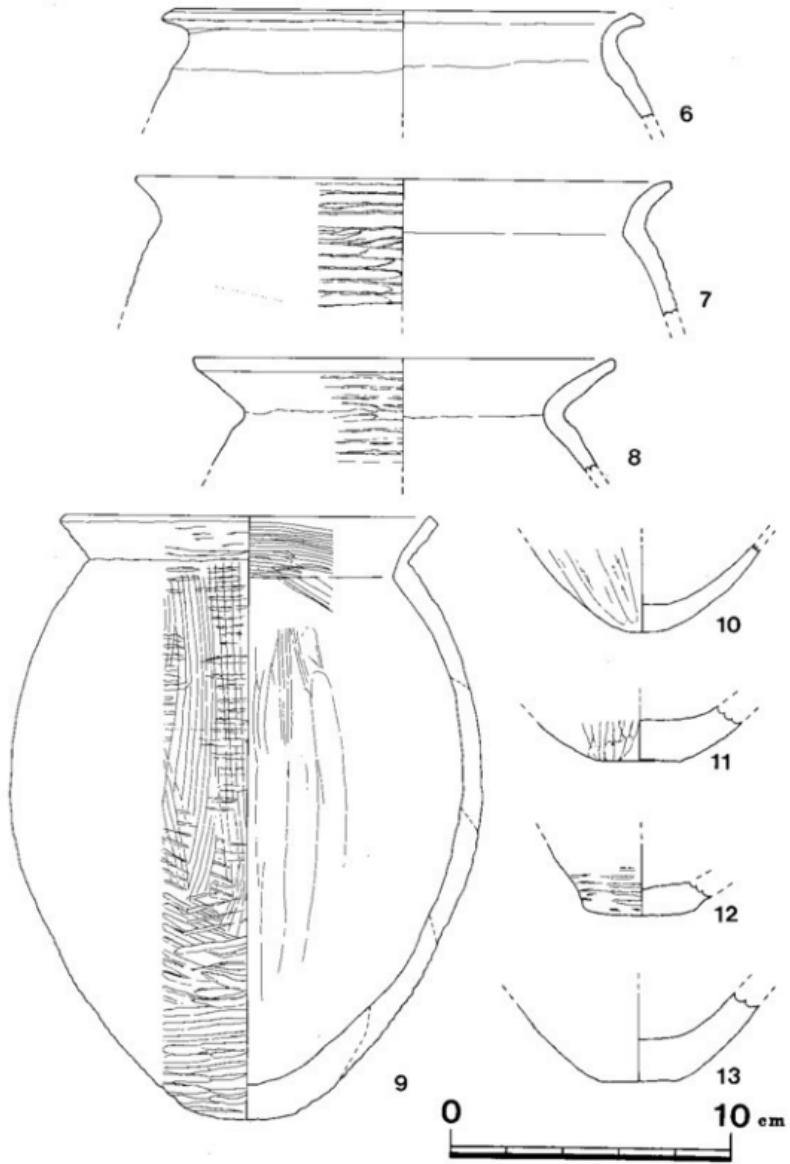


Fig. 20 C区出土遺物 弥生土器 (1 / 2)

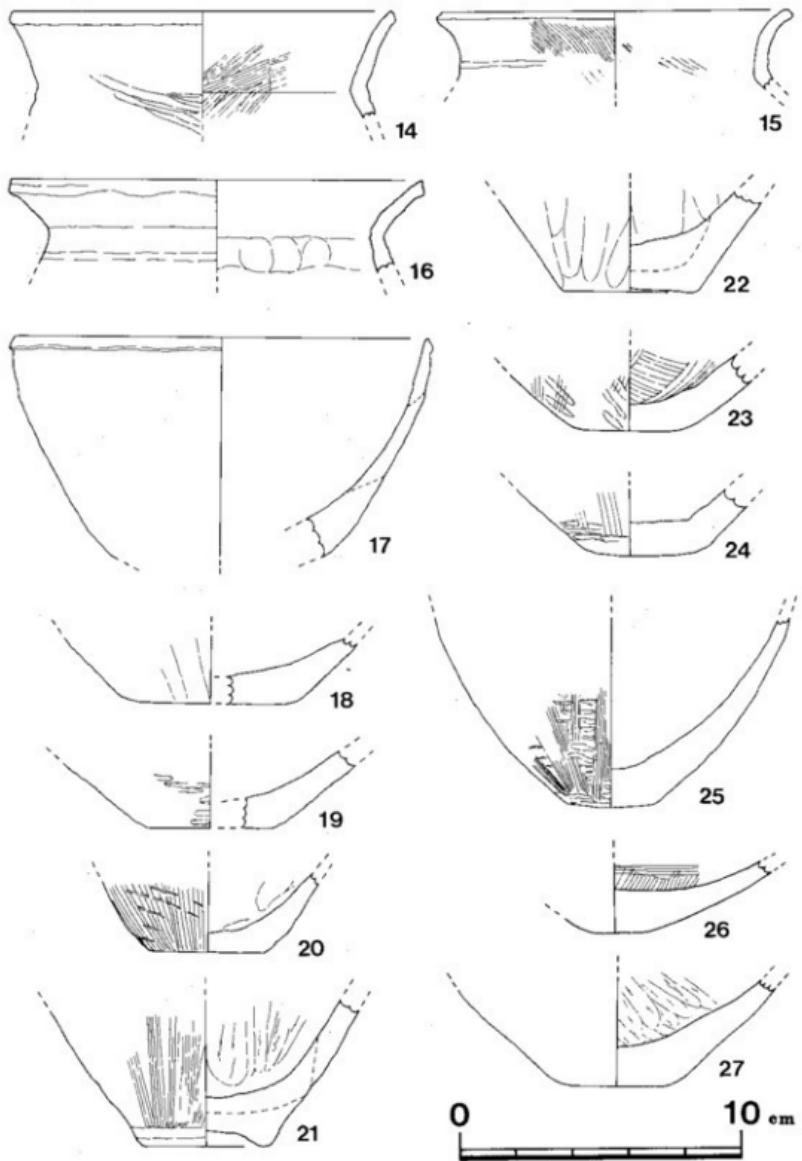


Fig. 21 C区出土遺物  
弥生土器 (1 / 2)

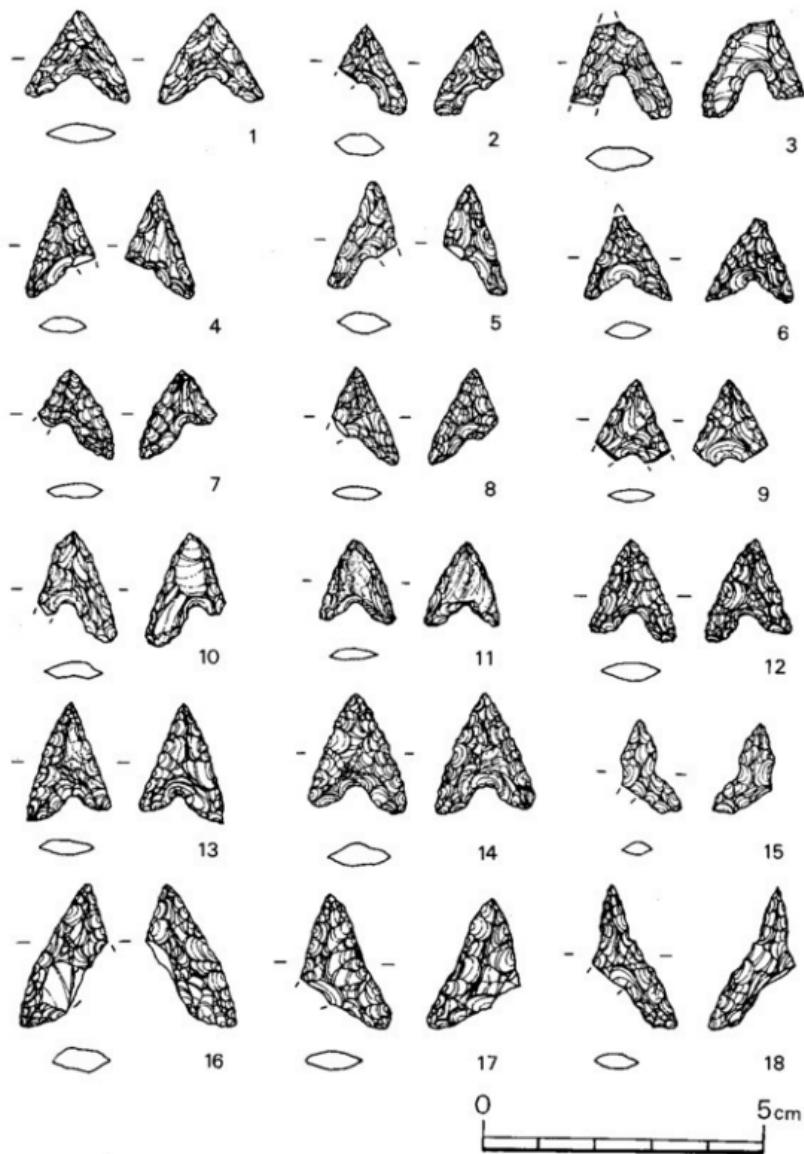


Fig. 22 C区出土遺物 石鏃 (1/1)

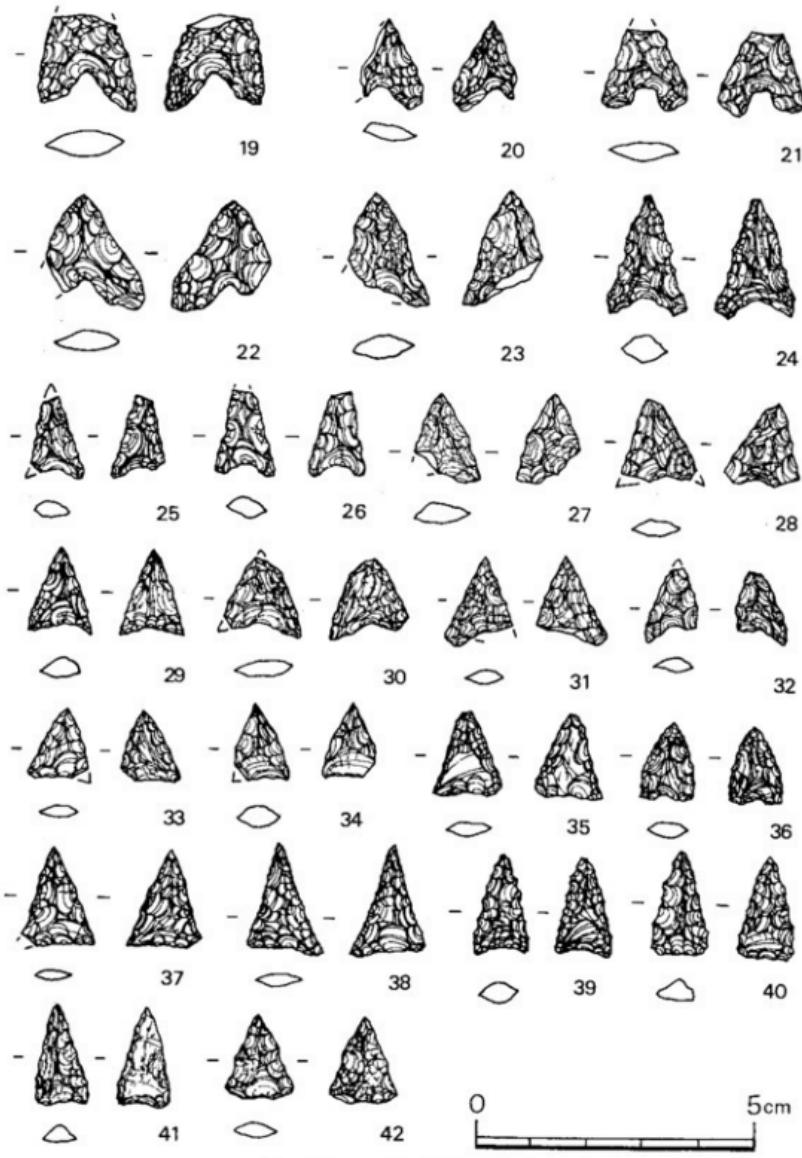


Fig. 23 C区出土遺物 石鏃 (1 / 1).

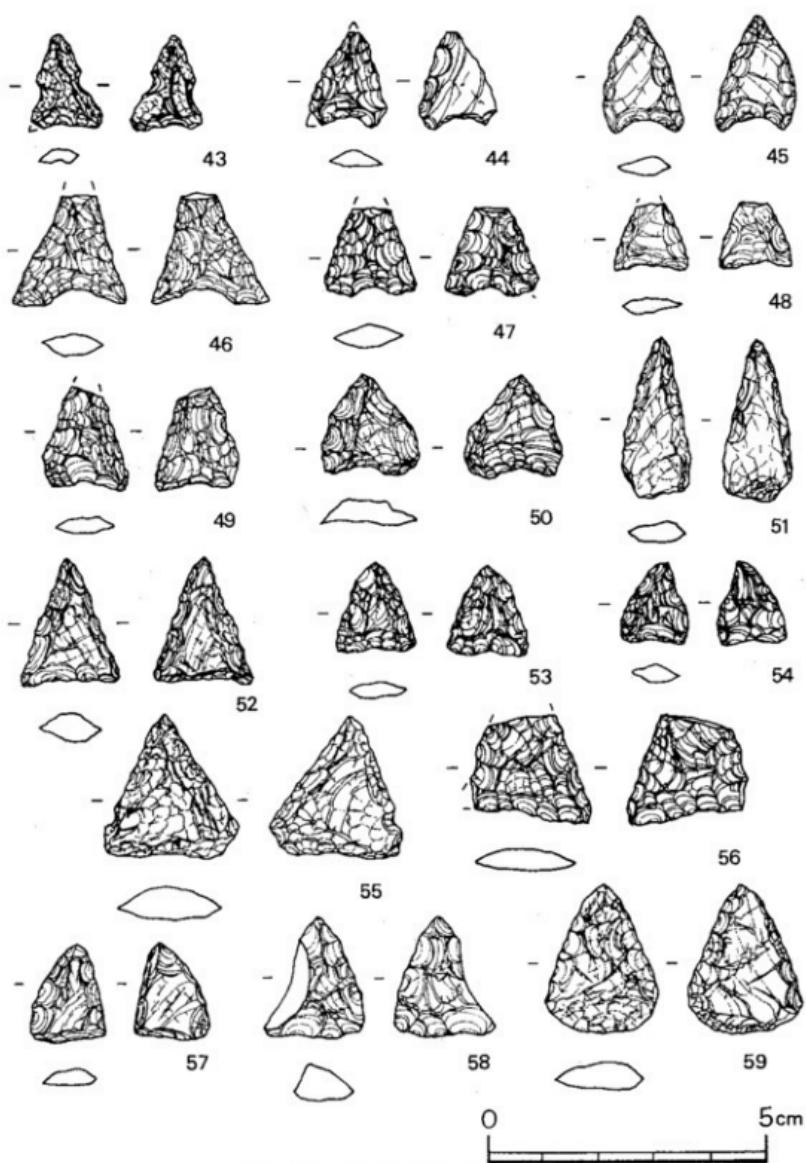


Fig. 2.4 C 区出土遺物 石器 (1/1)

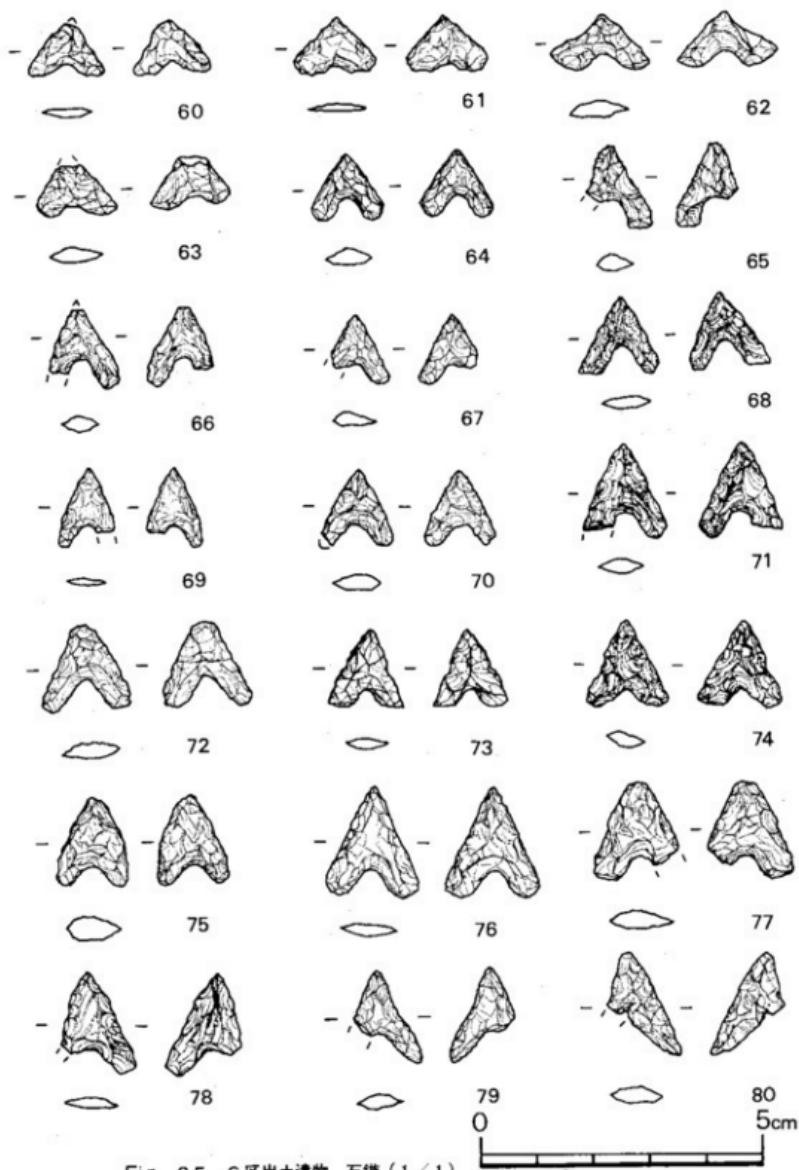


Fig. 25 C区出土遺物 石鏟 (1 / 1)

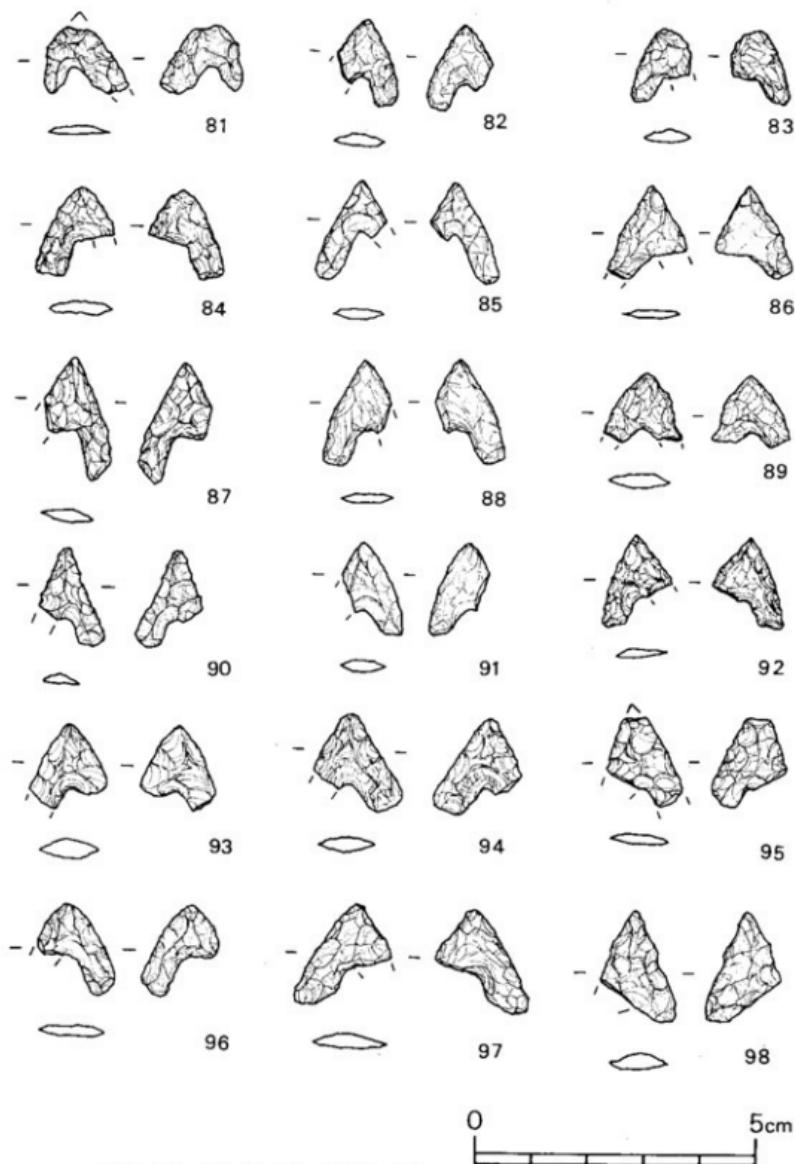


Fig. 26 C区出土遺物 石器 (1/1)

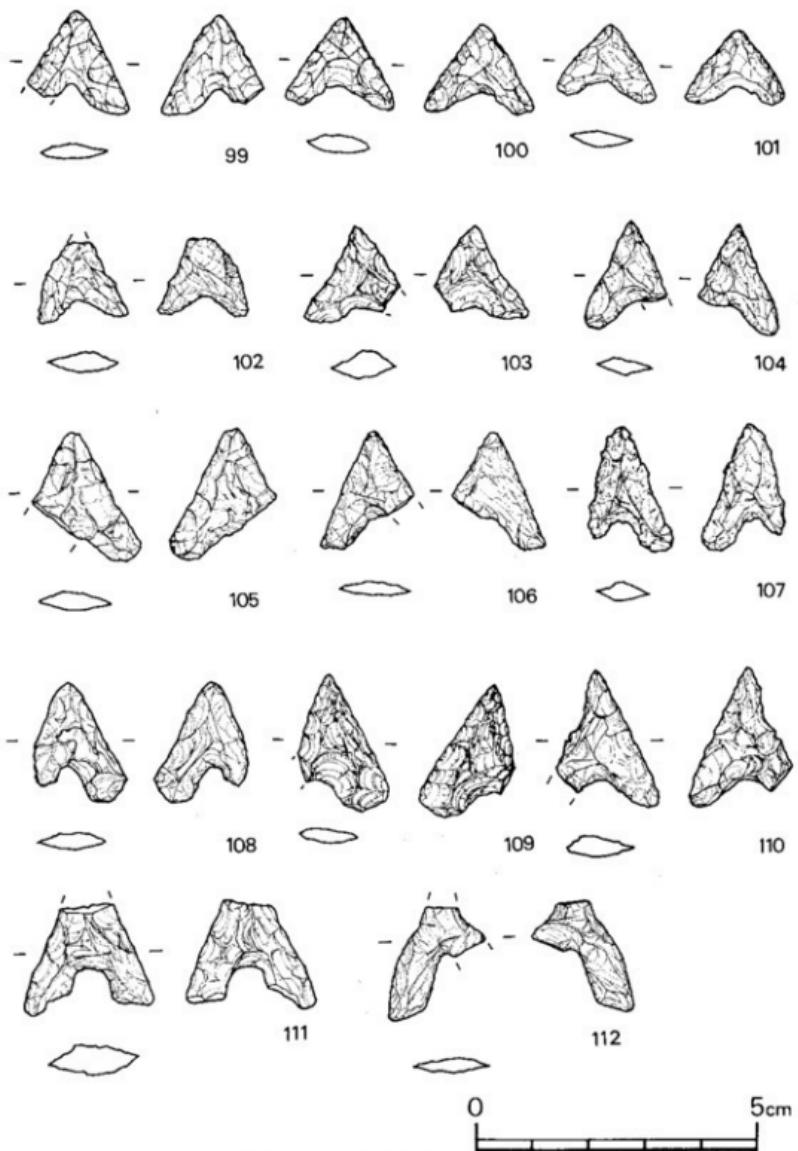


Fig. 27 C区出土遺物 石器 (1/1)

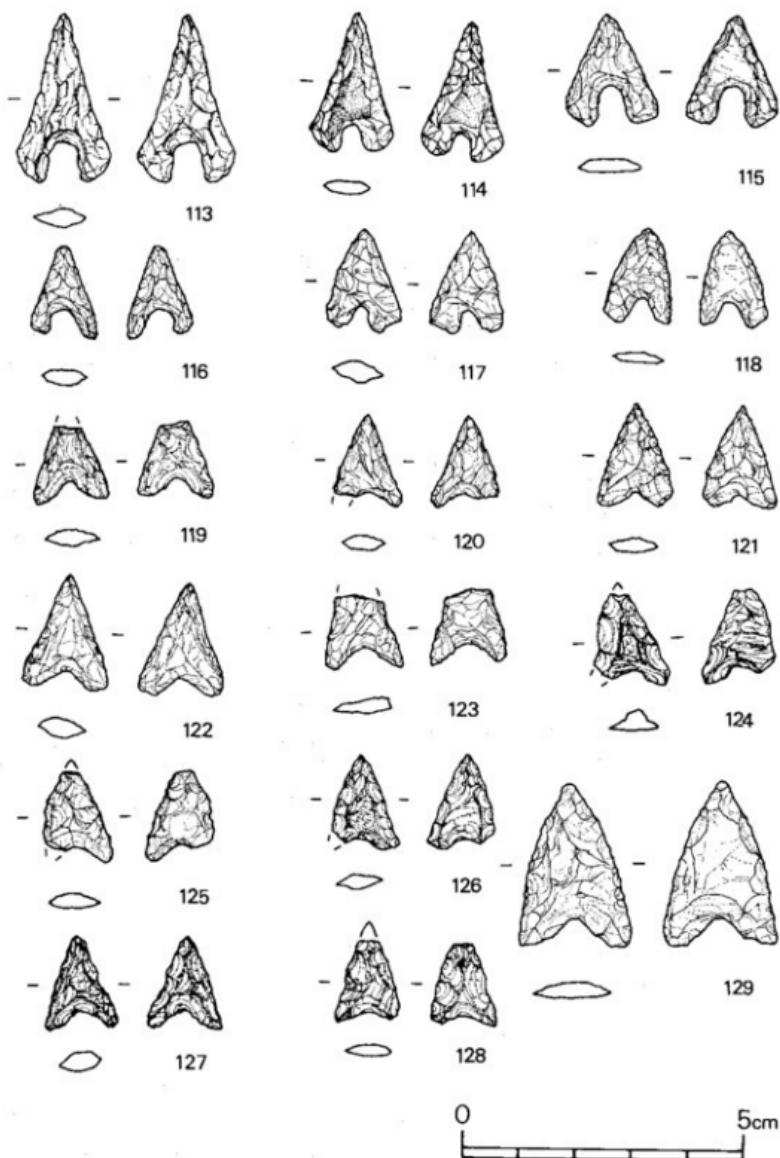


Fig. 28 C区出土遺物 石鏃 (1/1)

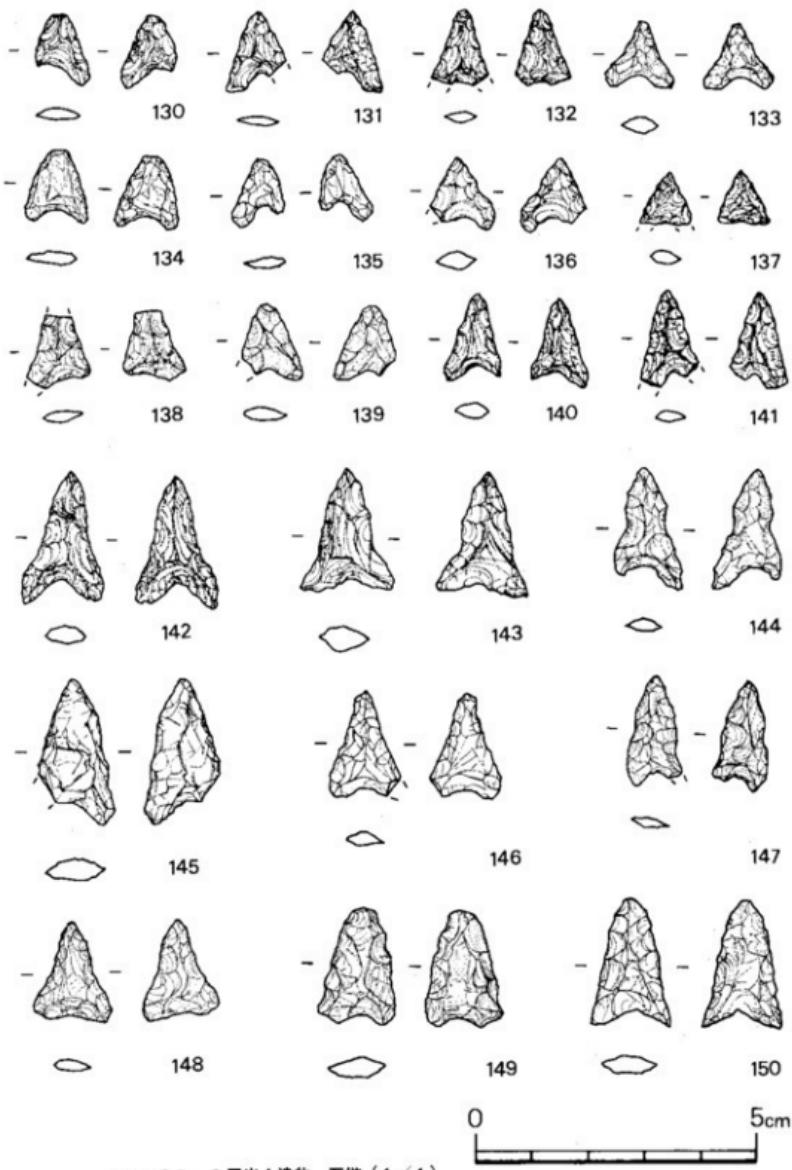


Fig. 29 C区出土遺物 石鏃 (1/1)

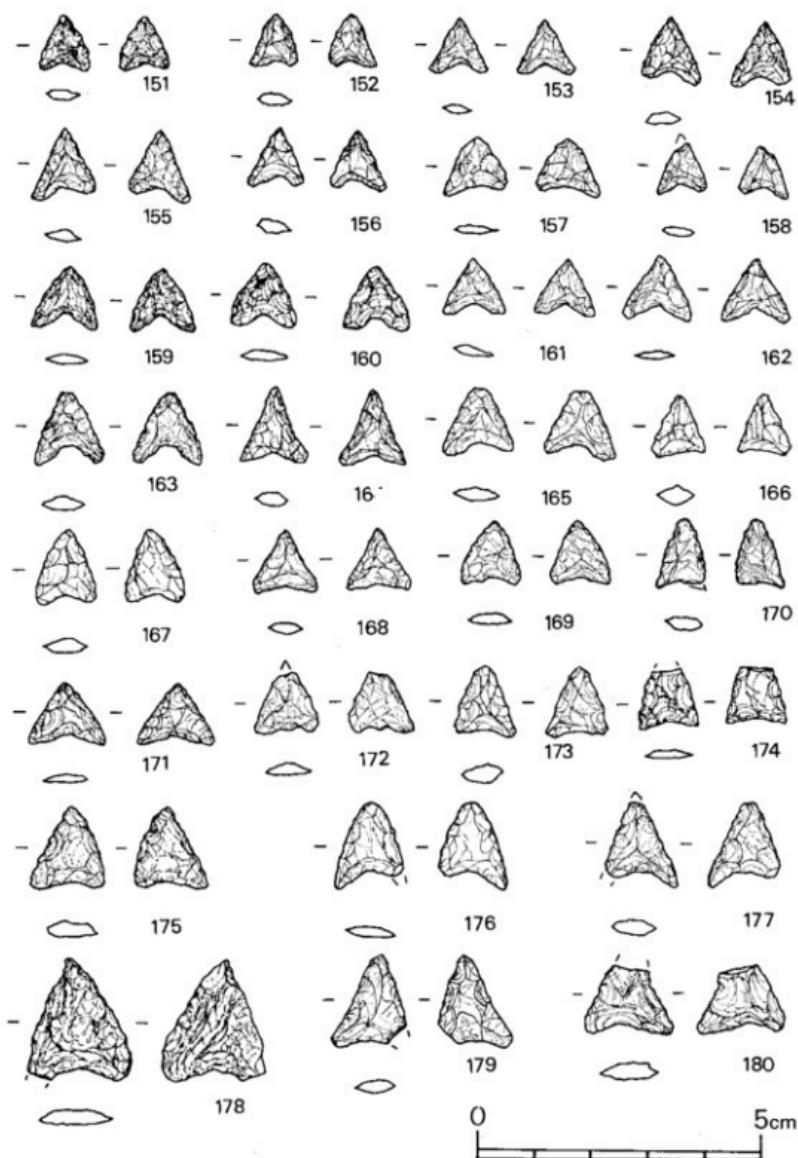


Fig. 30 C区出土遺物 石鎌 (1/1)

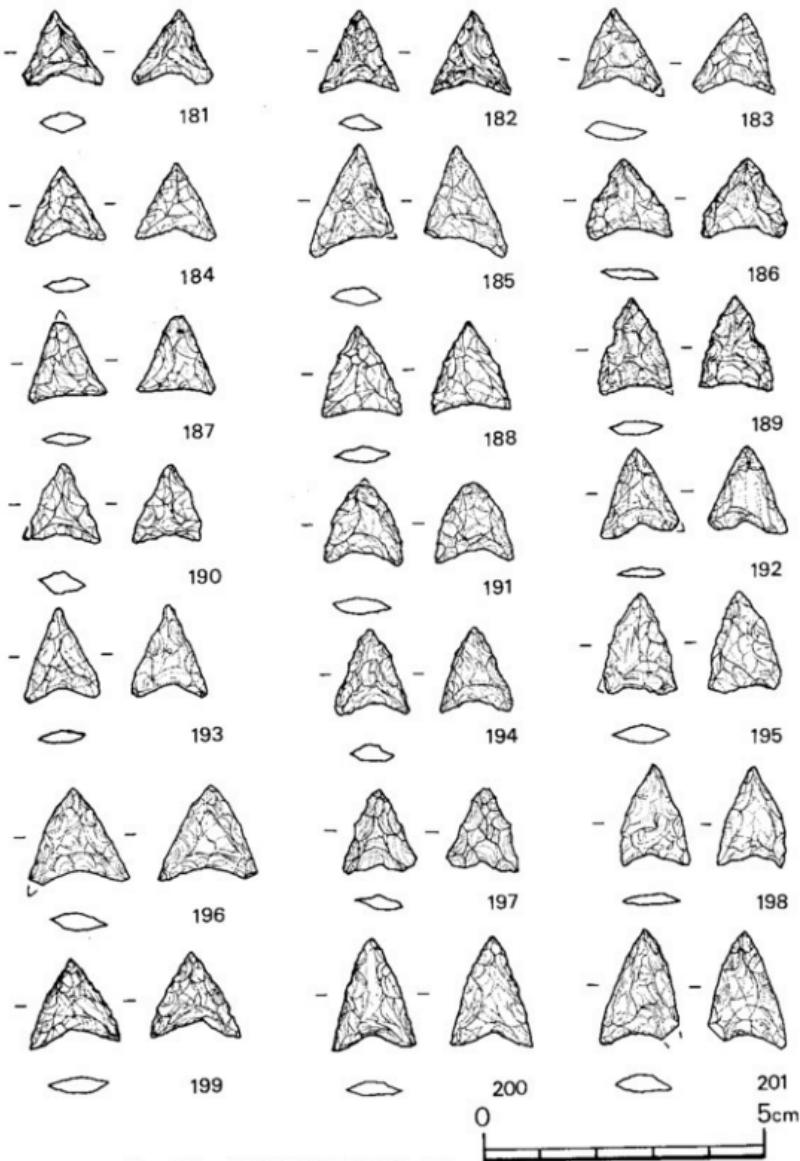


Fig. 31 C区出土遺物 石鏃 (1/1)

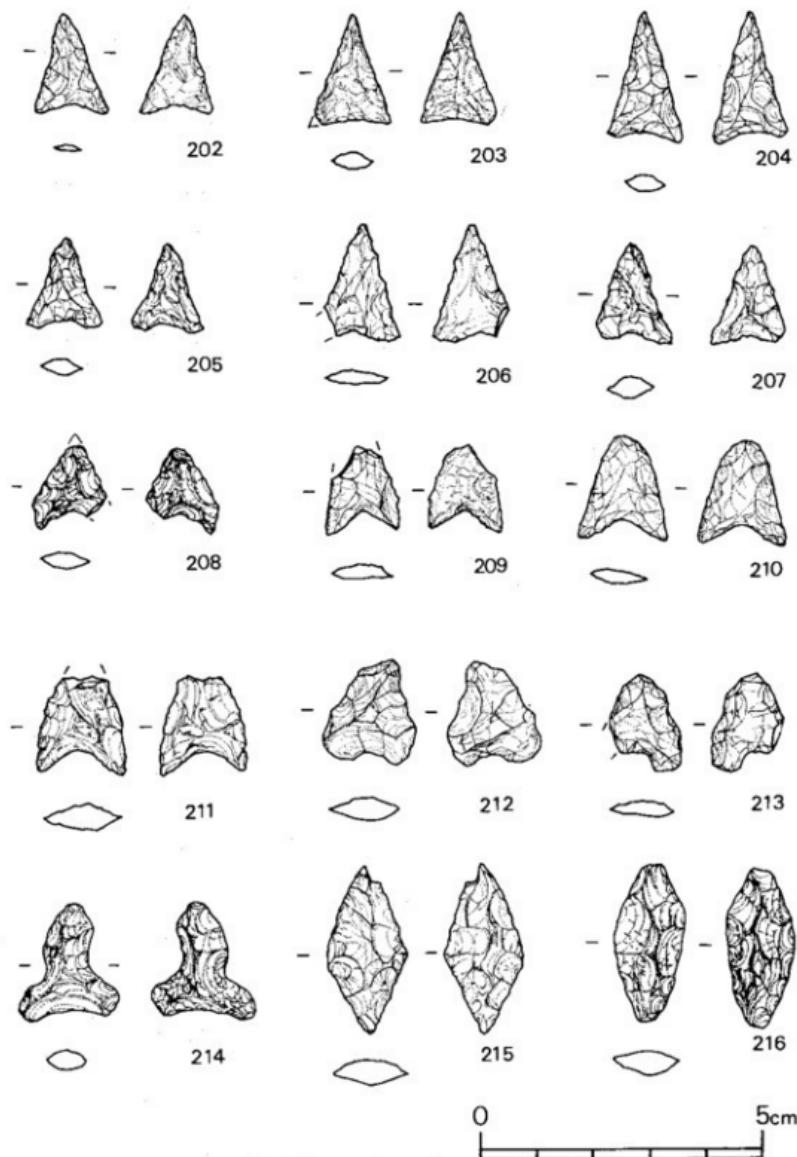


Fig. 32 C区出土遺物 石鏃 (1/1)

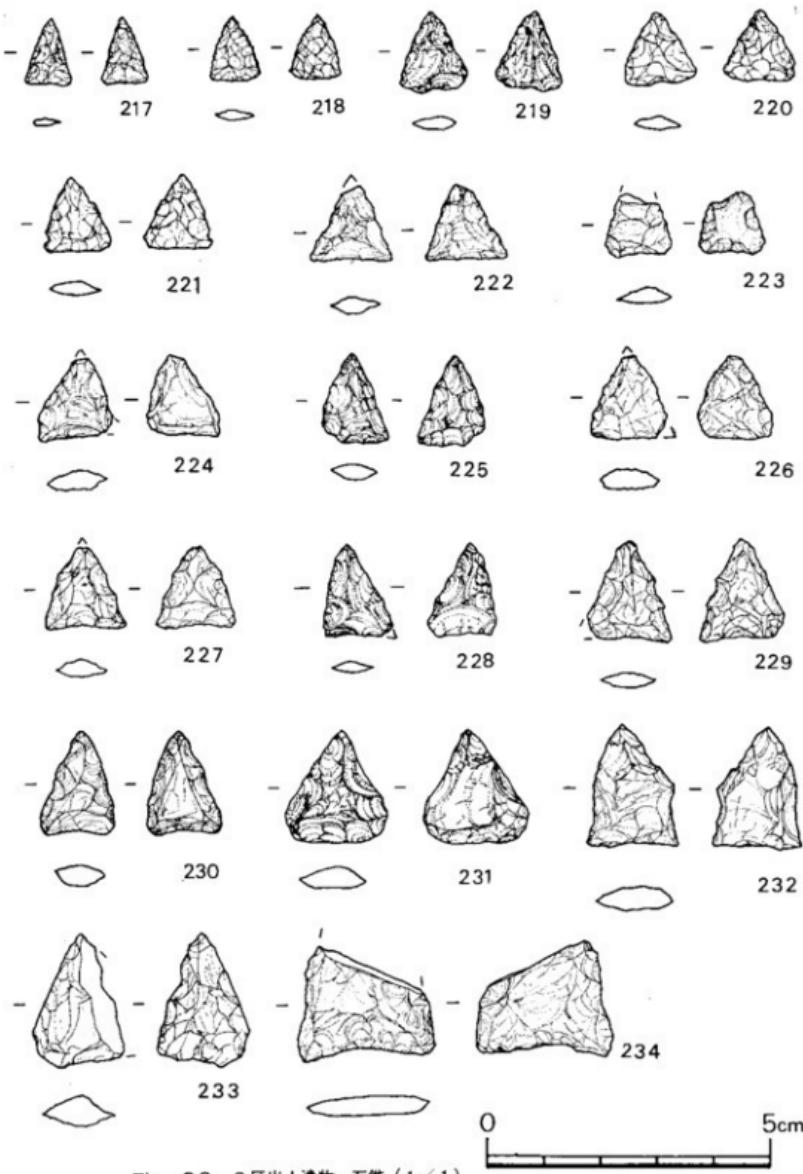


Fig. 33 C区出土遺物 石器 (1 / 1)

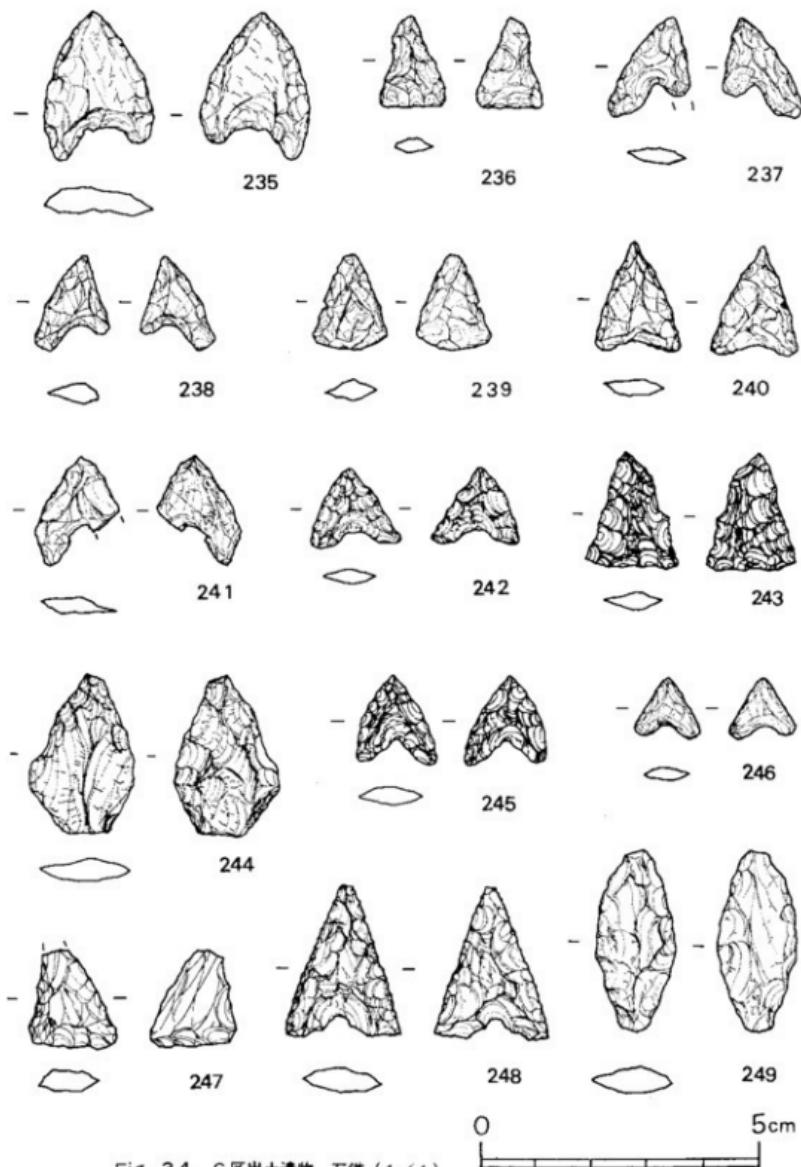


Fig. 3.4 C区出土遺物 石鏃 (1/1)

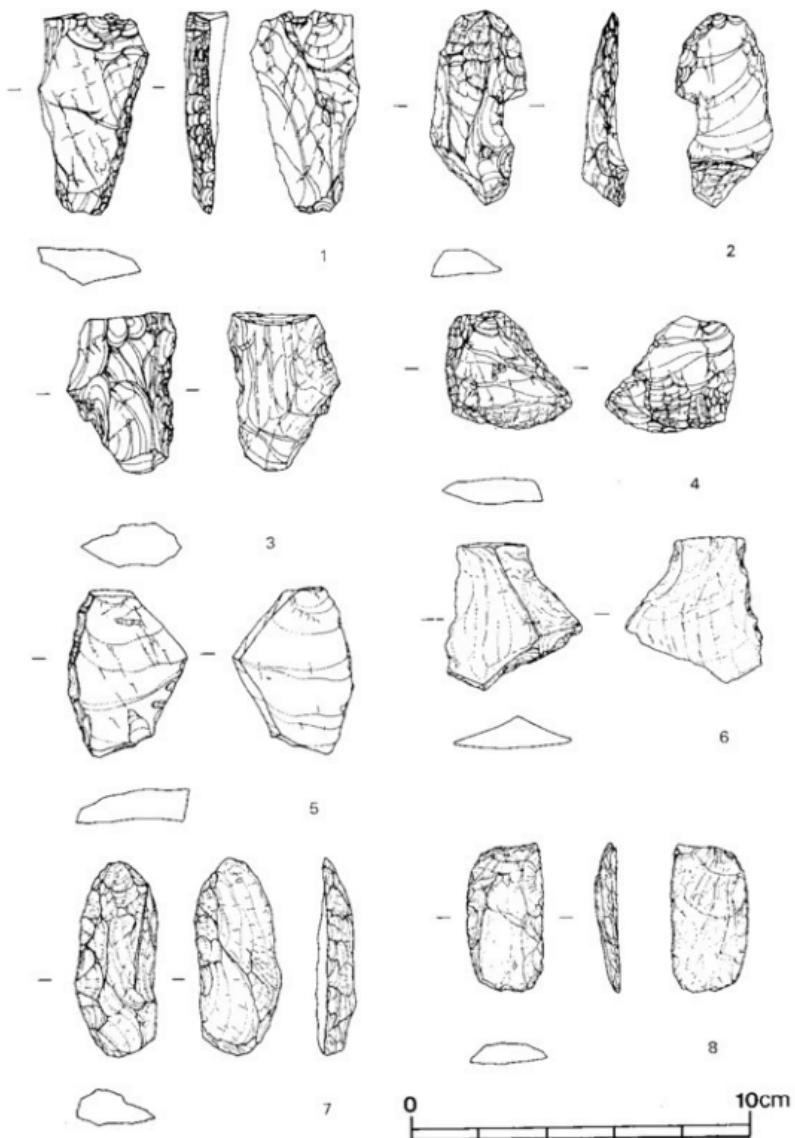


Fig. 35 C区出土遺物 石器 (3/5)

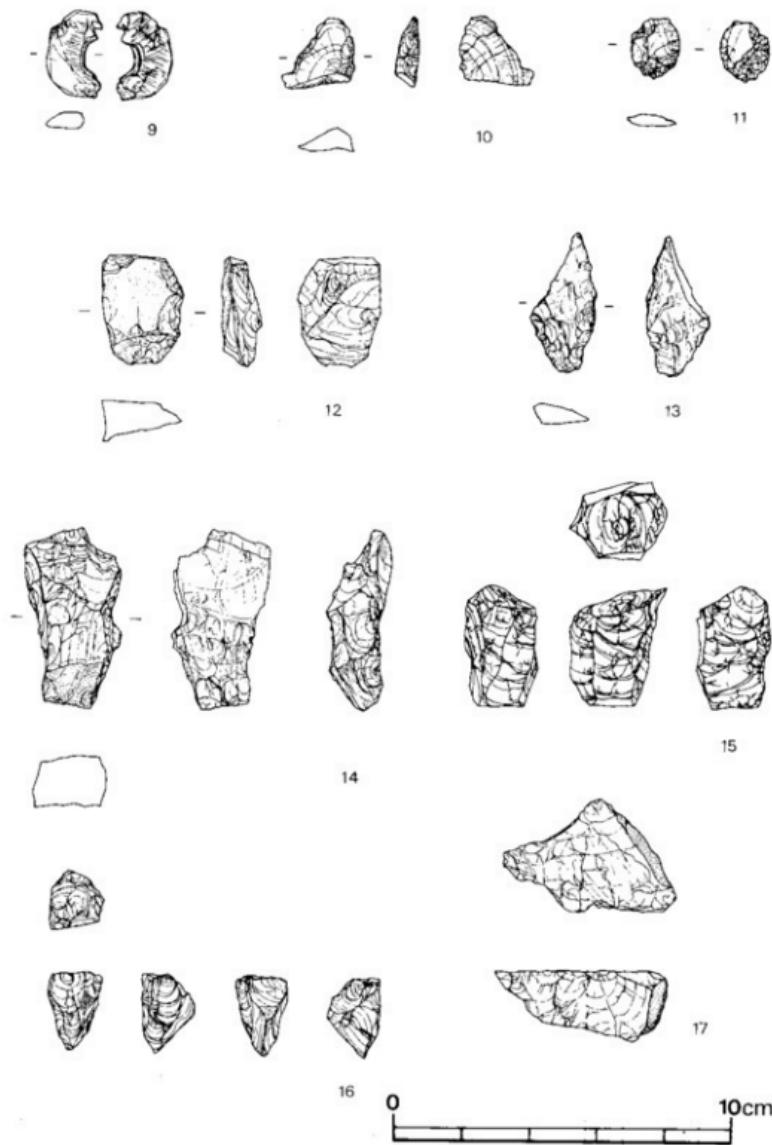
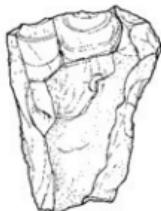
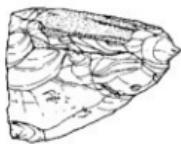


Fig. 36 C区出土遺物 石器 (3 / 5)



18



19



20

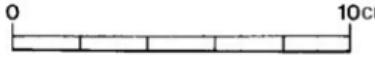


Fig. 37 C区出土遺物 石器 (3/5)

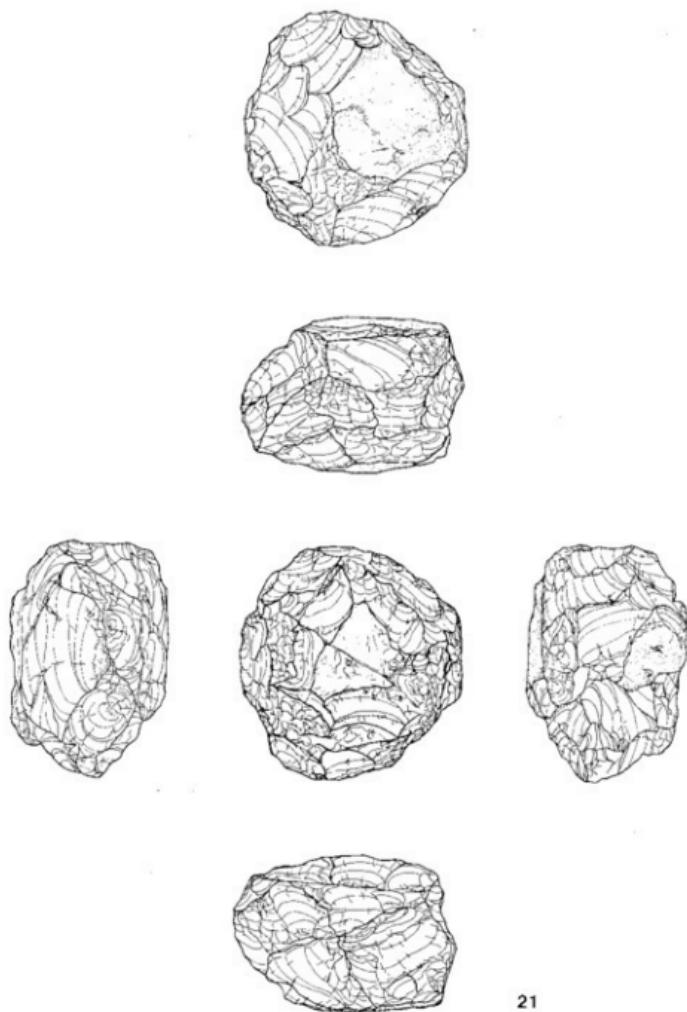
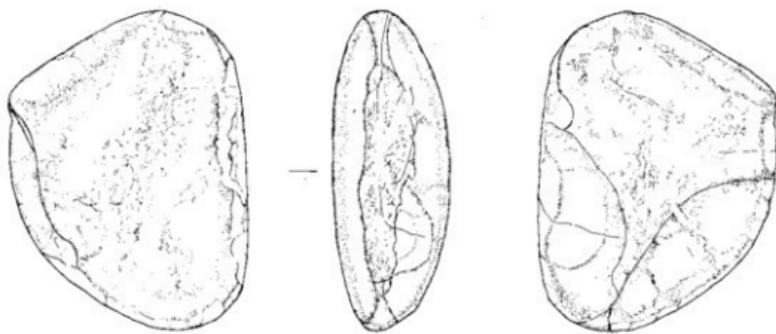
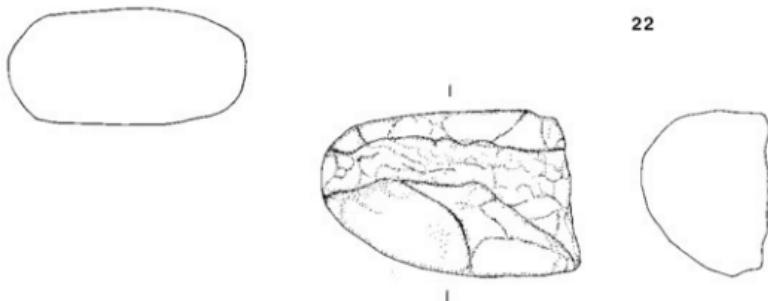


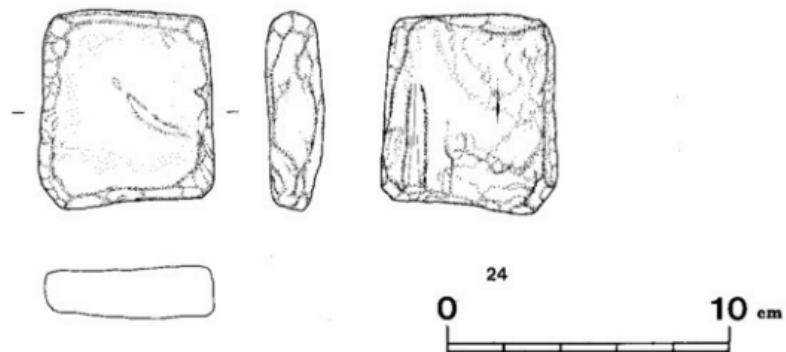
Fig. 38 C区出土遺物 石器 (1/2)



22



23



24

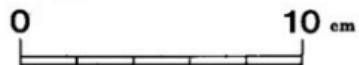


Fig. 39 C区出土遗物 石器 (1/2)

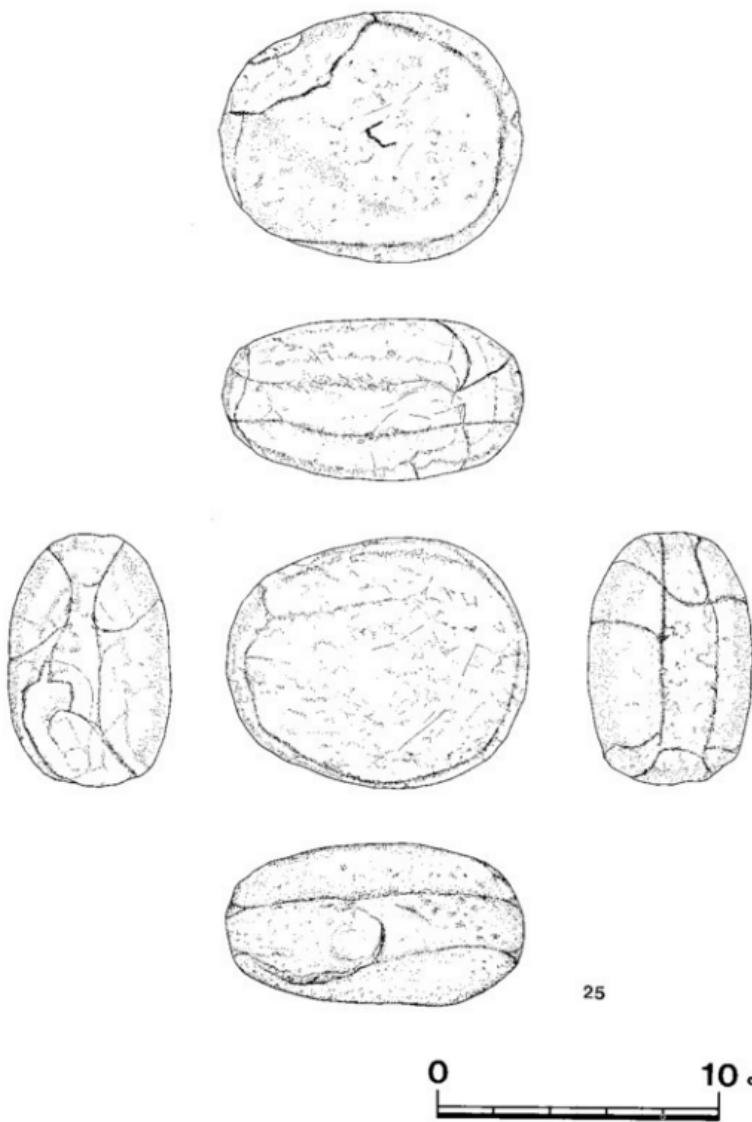


Fig. 40 C区出土遺物 石器 (1 / 2)

## 写 真 図 版



岩 陰 全 景



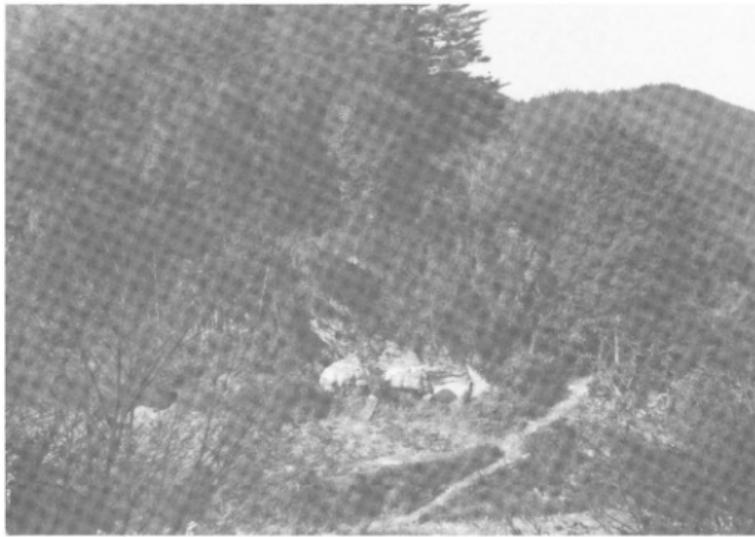
遺跡遠景（南より）



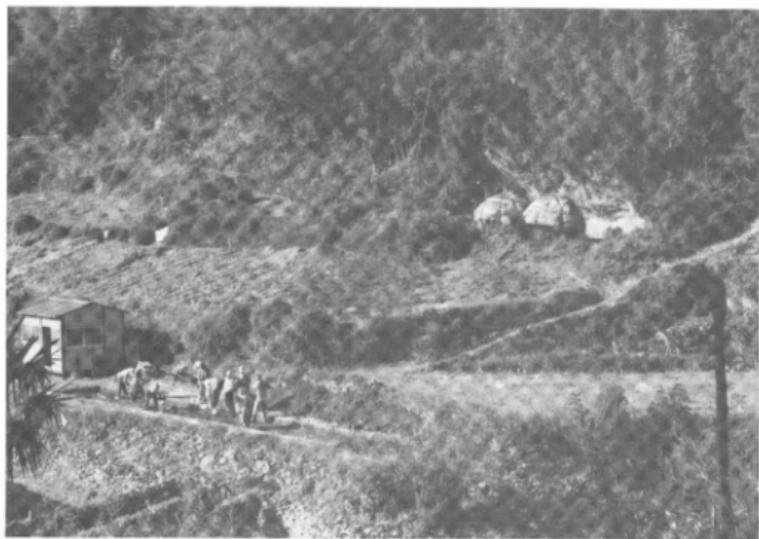
遺跡遠景（南より）



遺跡近景（南より）



遺跡近景（東より）



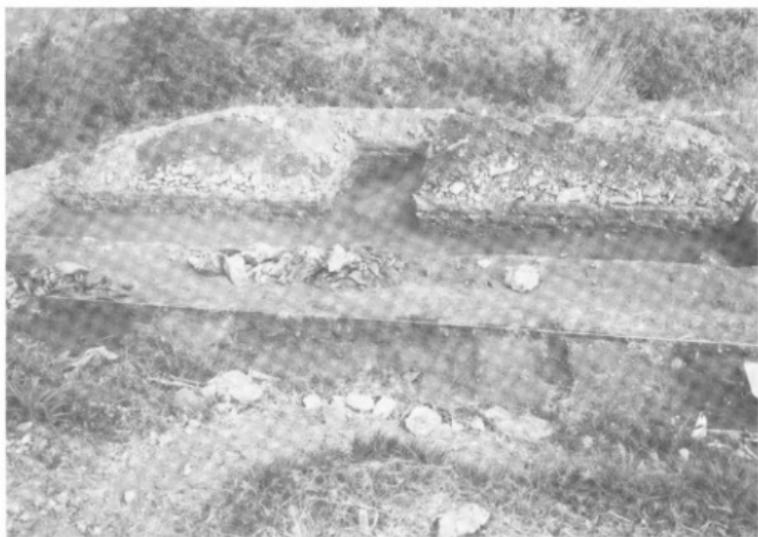
A 区トレンチ調査風景



A 区トレンチ実掘状態



B 区 a トレンチ調査風景

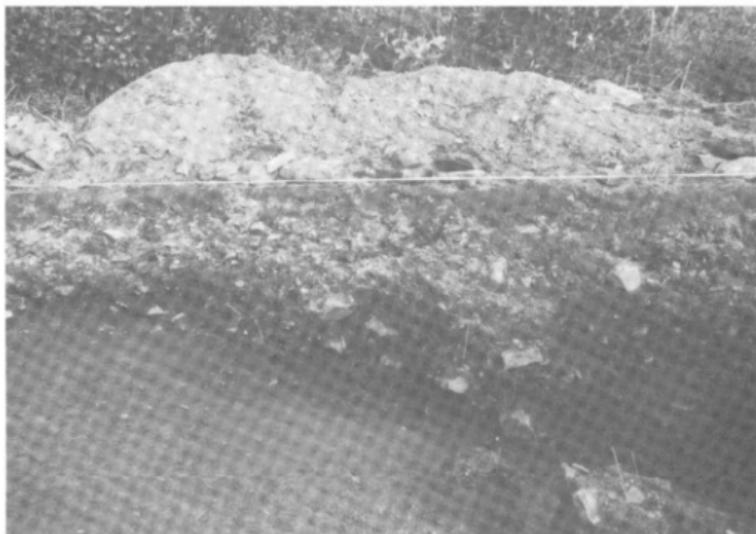


B 区 a トレンチ発掘状態

P L 6



日区 c トレンチ完掘状態



日区 c トレンチ北壁セクション



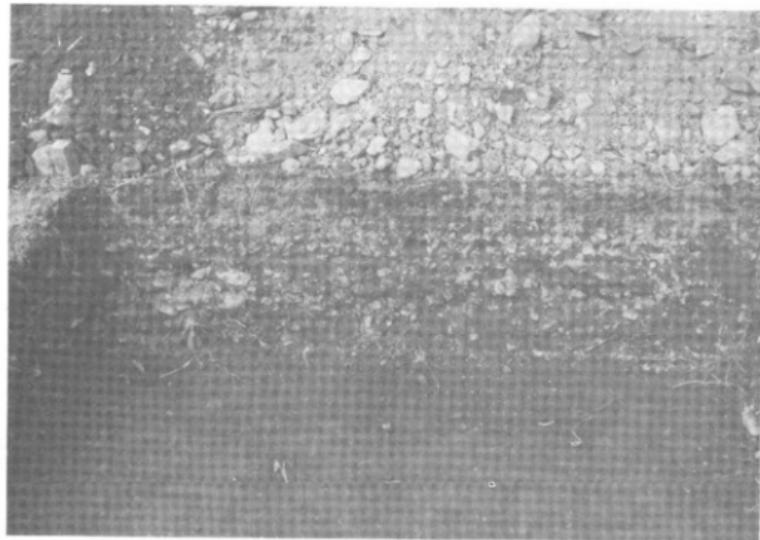
B 区 d トレンチ完掘状態



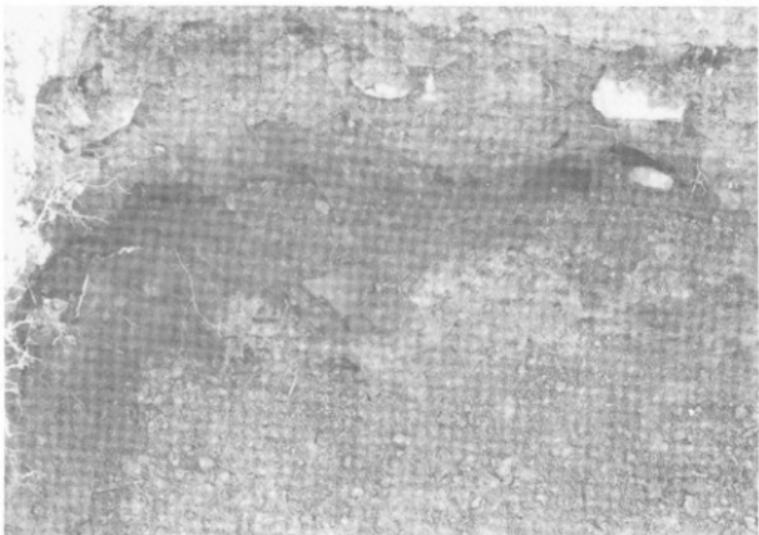
B 区 d トレンチ西壁セクション



B区 bトレンチ完掘状態



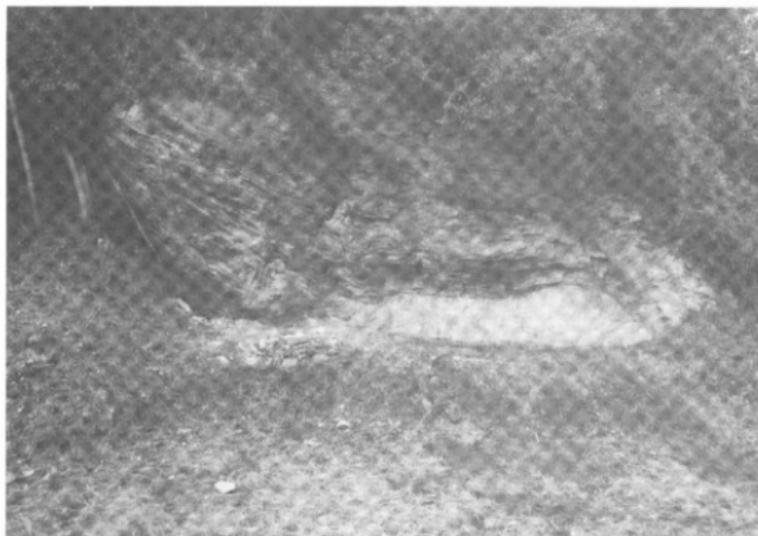
B区 bトレンチ東壁セクション



B 区 a トレンチ遺物出土状態



B 区 e トレンチ遺物出土状態



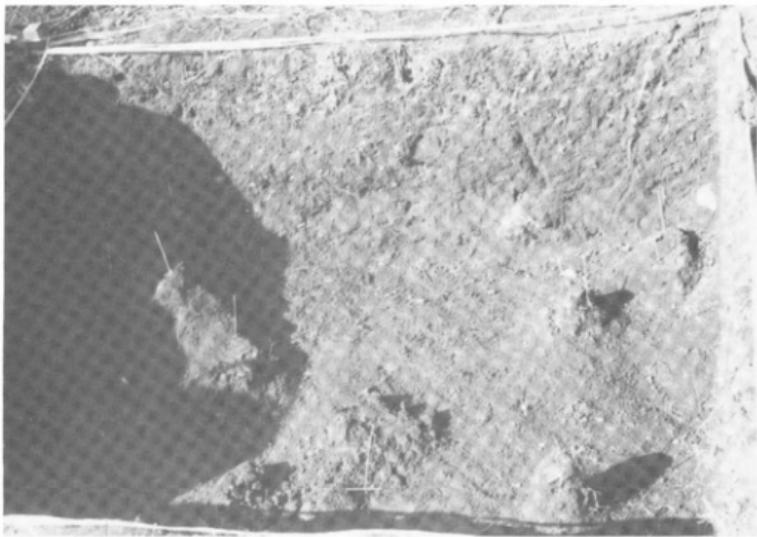
C 区岩陰 前庭部



C 区調査風景



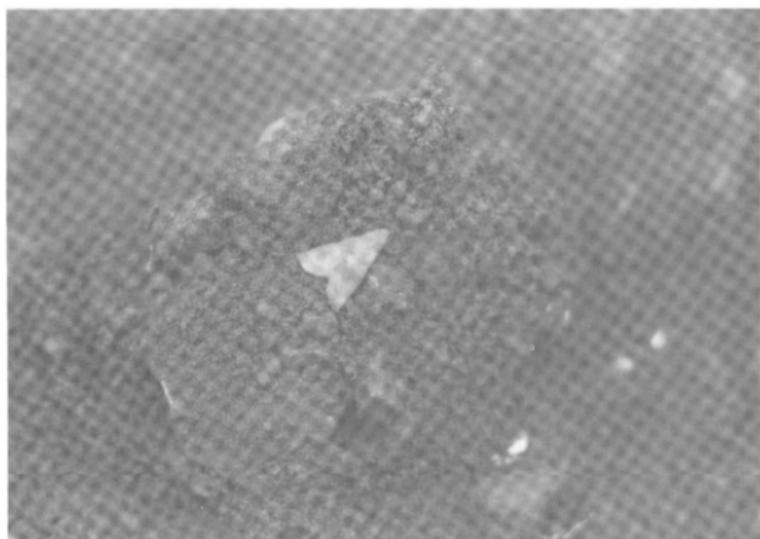
C 区調査風景



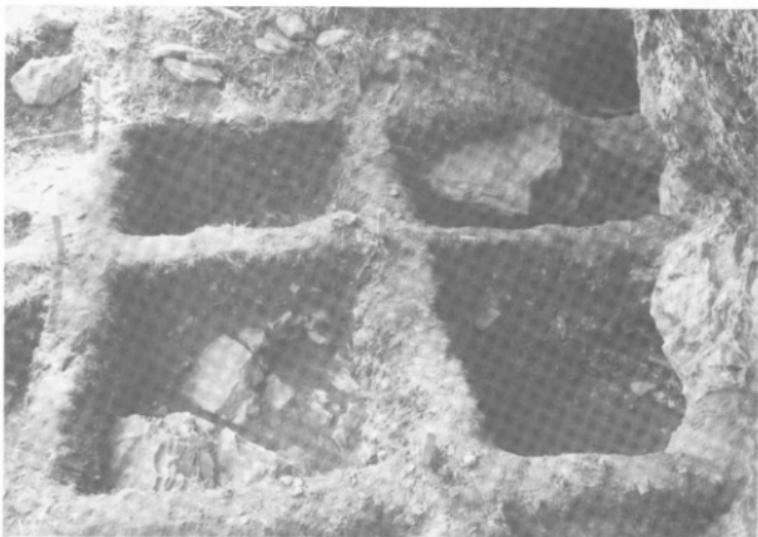
C 区 D-4 遺物出土状態



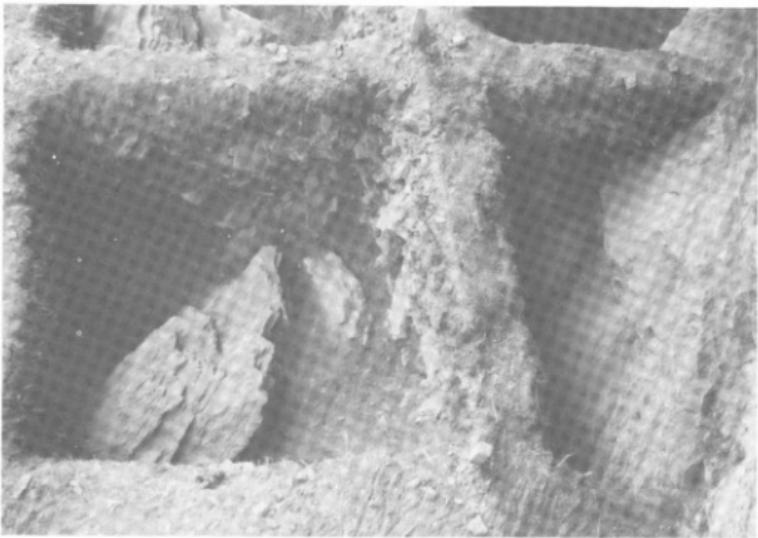
C 区 H-3 遺物出土状態



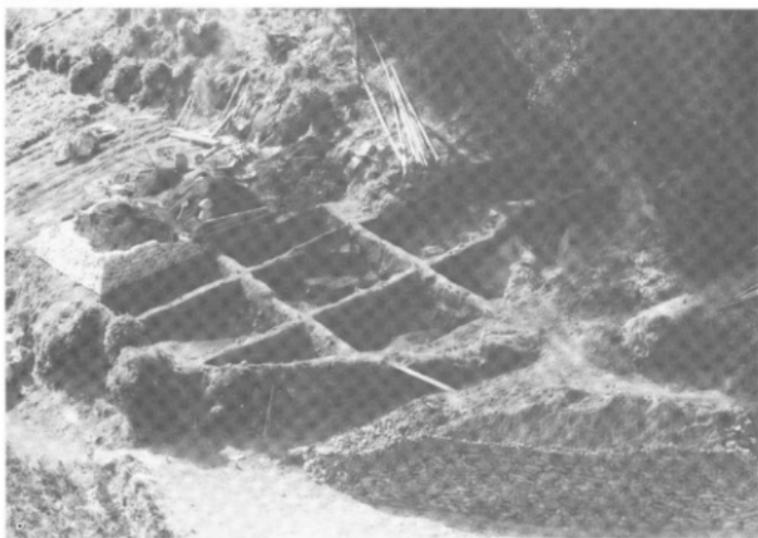
C 区 H-4 遺物出土状態



C 区岩陰部調査状況



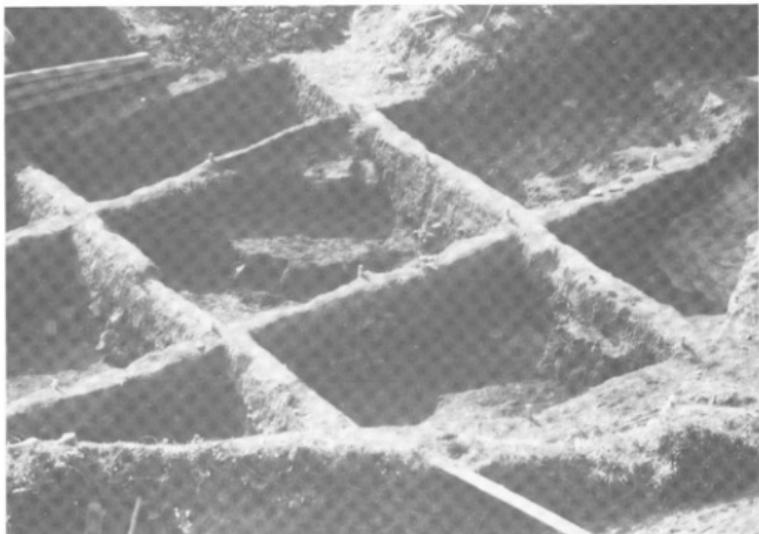
C 区岩陰部調査状況



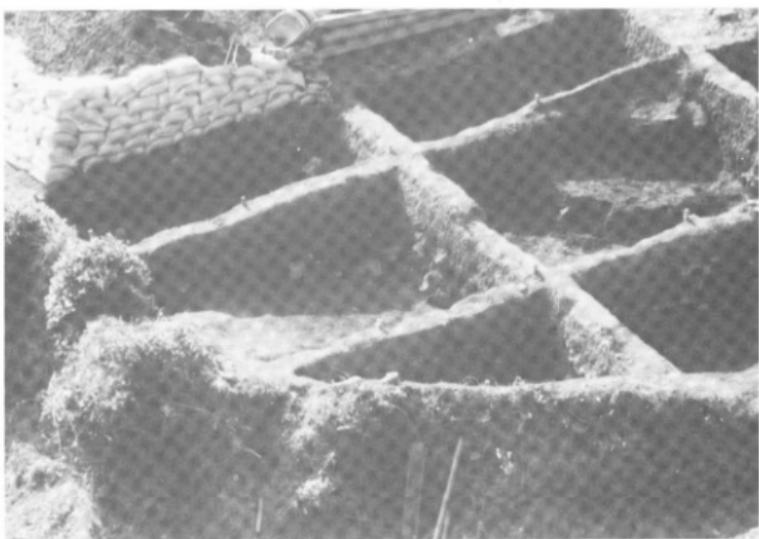
C 区調査状況



C 区 調査状況



C 区 調査状況



C 区 調査状況